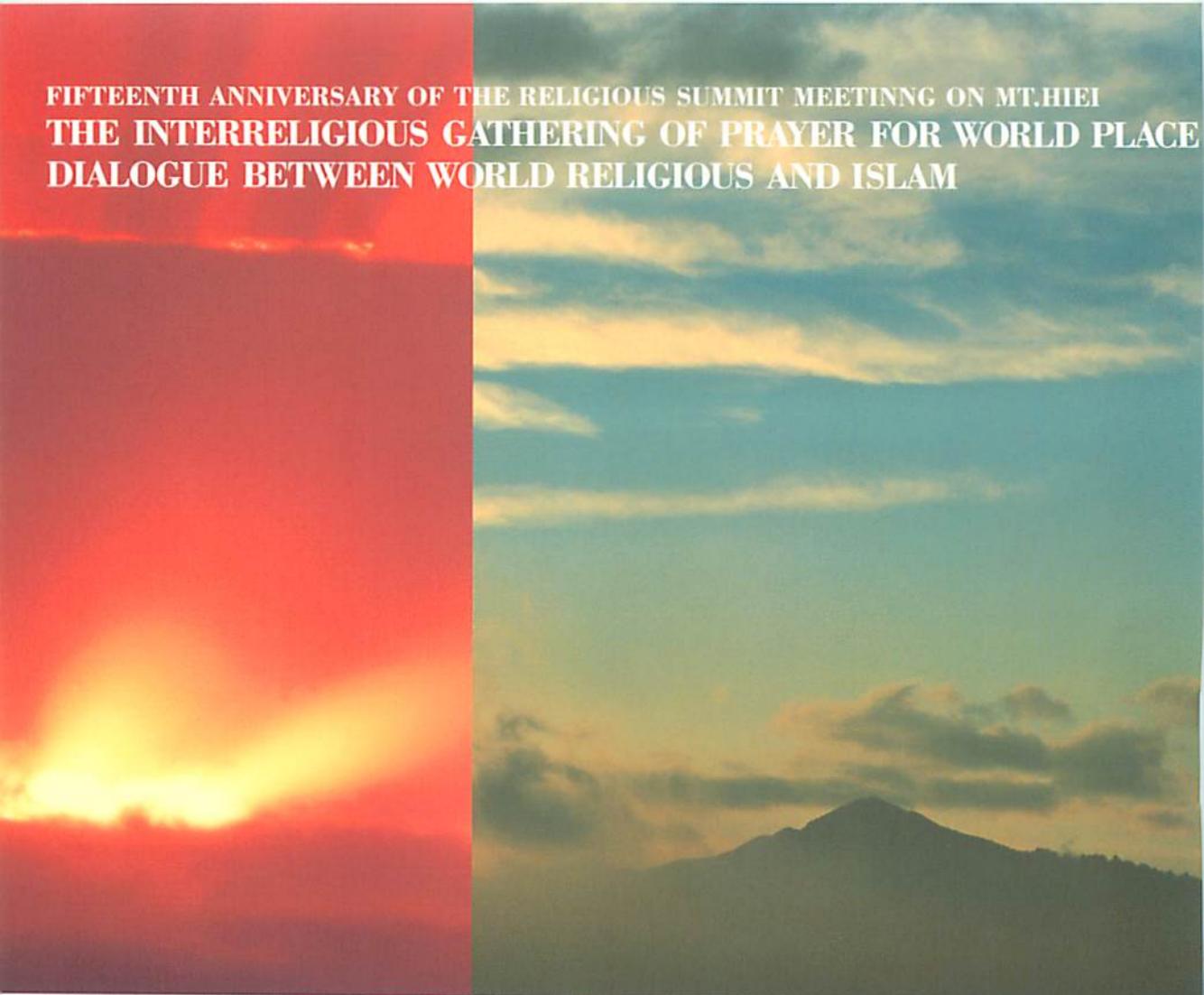


FIFTEENTH ANNIVERSARY OF THE RELIGIOUS SUMMIT MEETING ON MT.HIEI  
THE INTERRELIGIOUS GATHERING OF PRAYER FOR WORLD PLACE  
DIALOGUE BETWEEN WORLD RELIGIOUS AND ISLAM



比叡山宗教サミット15周年記念

# 平和への祈りと イスラムとの対話集会

日時:2002年8月3日(土)・4日(日)

場所:国立京都国際会館・比叡山

主催:比叡山宗教サミット15周年記念

「平和への祈りとイスラムとの対話集会」実行委員会

比叡山宗教サミット15周年記念

# 平和への祈りと イスラムとの対話集会

日時:2002年8月3日(土)・4日(日)

場所:国立京都国際会館・比叡山

主催

比叡山宗教サミット15周年記念

「平和への祈りとイスラムとの対話集会」実行委員会

2002.8.3

# 開会式典

OPENING  
CEREMONY

国立京都国際会館

開会式典での海外代表者（上）と国内代表者（下）



## 平和への祈りとイスラムとの対話集会



祝辞を述べる河合隼雄文化庁長官



主催者代表挨拶を行う西郊良光実行委員長



日本宗教連盟理事長（代理）として祝辞を述べる  
工藤伊豆神社本庁総長

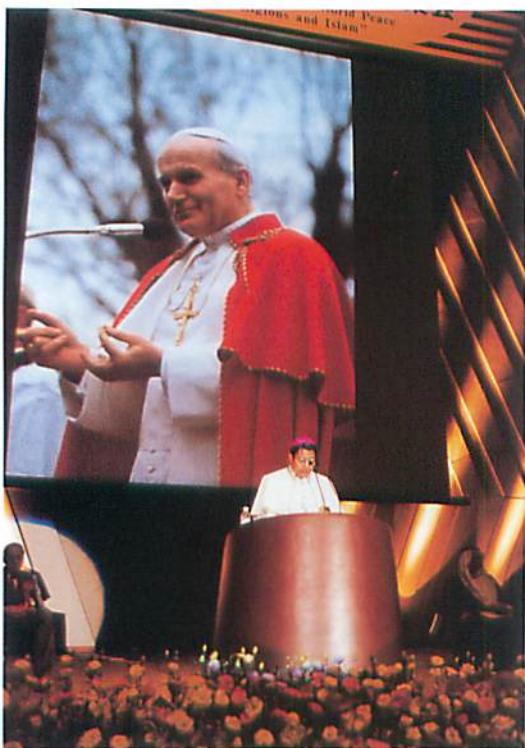


祝辞を述べる武藤嘉文衆議院議員

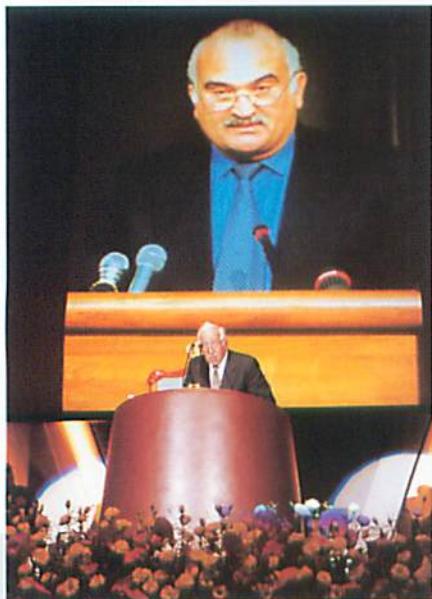


会場の様子





ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世のメッセージを代読する  
大塚喜直カトリック京都司教



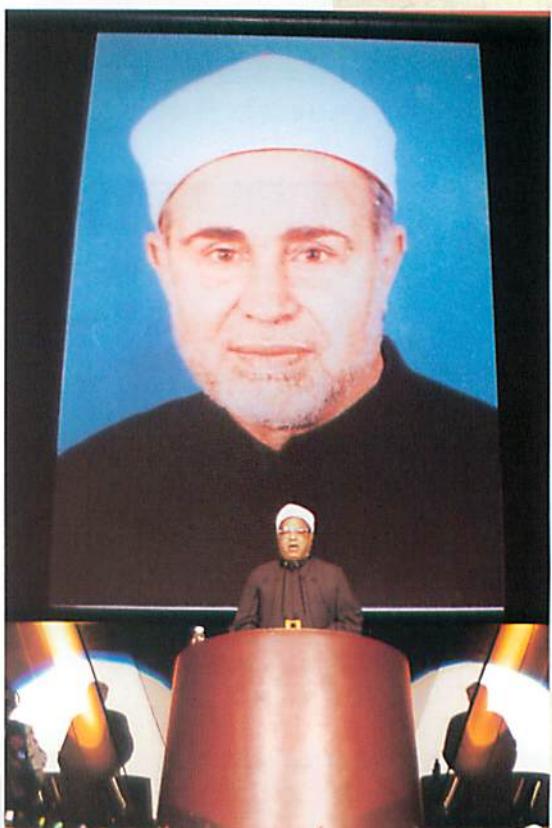
ハッサン殿下（ヨルダン）のメッセージを代読する  
ムーサ・ゼイド・ケイラニ 国際イスラム評議会代表

2002.8.3

# メッセージ

MESSAGES

国立京都国際会館



ムハンマド・サイイード・タンターイー アズハル総長のメッセージを代読するムハンマド・アブドルファティール・アブドルアジーズ アズハル大学神学部副学部長



比叡山宗教サミット15周年記念

## 平和への祈りとイスラムとの対話集会

2002.8.3

# 記念講演 「イスラムと平和」

MEMORIAL  
LECTURE

国立京都国際会館



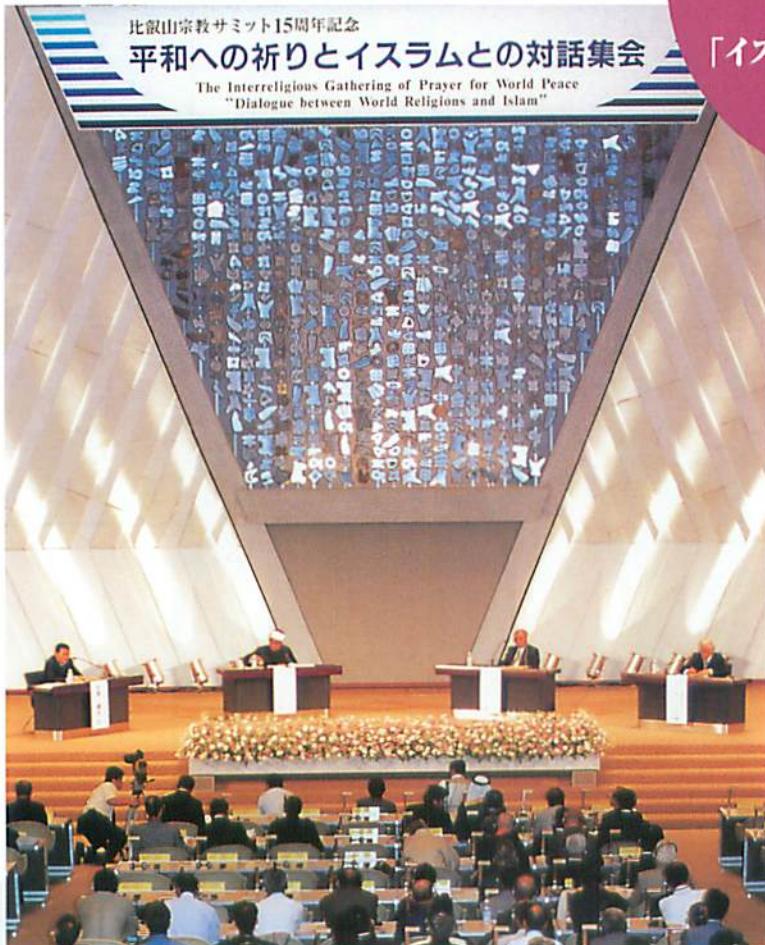
ムハンマド・サード・アッサーリム イマーム・ムハンマド・ビン・  
サウード・イスラム大学学長＝サウディアラビア

「平和こそがイスラームの挨拶である。一部個人の振る舞いが、イスラームの教えを危険な形で混同したことが神の法を侵犯した。私たちは相互理解と対話を必要とする」



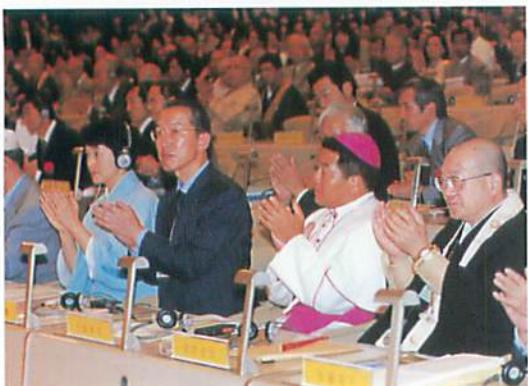
真剣に、平和への訴えに聞き入る人々

2002.8.3  
シンポジウム  
SYMPOSIUM  
「イスラムとの対話と理解」  
国立京都国際会館



会場の様子

日本の宗教が西欧と  
イスラムを結ぶ橋に





比叡山宗教サミット15周年記念

## 平和への祈りとイスラムとの対話集会

自分を清め、個人から  
社会に尽くすこと。

ジハード（聖戦）とは、  
社会悪と戦うこと。

- ◎発言者
- 1. ムハンマド・アブドルファデイール・アブドルアジーズ博士（アズハル大学神学部副学部長＝エジプト）
- 2. ミル・ナワズ・カーン・マルワット師（アジア宗教者平和会議実務議長＝パキスタン）
- 3. ムーサ・ゼイド・ケイラニ師（国際イスラム評議会代表＝ヨルダン）
- ◎コーディネーター  
吉澤健吉氏  
(京都新聞社・編集局文化報道部  
情報担当部長)



ケイラニ師



アブドルアジーズ博士



吉澤氏



マルワット師



地元の仰木太鼓が花を添えた



和やかな会食のうちに、  
理解と対話が深められた

2002.8.3  
歓迎レセプション  
RECEPTION  
宝ヶ池プリンスホテル

2002.8.4  
フォーラム

FORUM

宝ヶ池プリンスホテル

## テーマ「紛争和解と宗教」



会場の様子



## 平和への祈りとイスラムとの対話集会



人間の存在は、  
宗教の伝統の中にある。

ベンドレイ師



ムスタフィッチ師



宗教者としての正しい  
順序を。

杉谷義純師



アンナッガール博士

銃は最大の武器ではない。  
他者を敵と見る考え方こそ、  
人間を否定するのだ。

イスラムの闘争は自己  
防衛でなくては正当化  
されない。

いかなる瞬間にも、祈り  
を通じて平和がもたらさ  
れる可能性がある。



フリードランダー師

むしろ、我々の過激な信  
仰の人々と対話をするこ  
との方がより一層難しい。

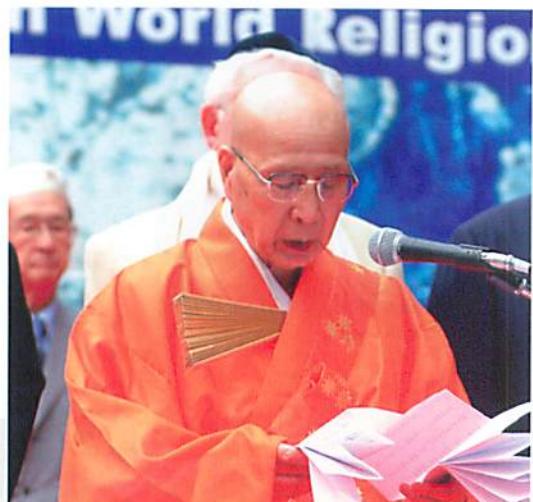


イエズス会司祭

### ◎発言者

1. イフエト・ムスタフィッチ師 (ボスニア・ヘルツェゴビナ  
宗教間対話協議会事務局長 || ボスニア・ヘルツェゴビナ)
  2. アブドゥラーサ・マブルーク・アンナッガール博士  
(アズハル大学イスラーム法学部教授 || エジプト)
  3. アルバート・ブリードランダー師  
(元世界宗教者平和会議国際名誉会長 || アメリカ)
  - 4.マイケル・イブグレイブ師  
(英國国教会宗教間協議会顧問 || イギリス)
- ◎コーディネーター

杉谷義純師  
(世界宗教者平和会議日本委員会事務総長)



渡邊座主猊下による平和祈願文

2002.8.4

平和の祈り式典  
PRAYER FOR  
WORLD PEACE

比叡山延暦寺  
根本中堂前広場

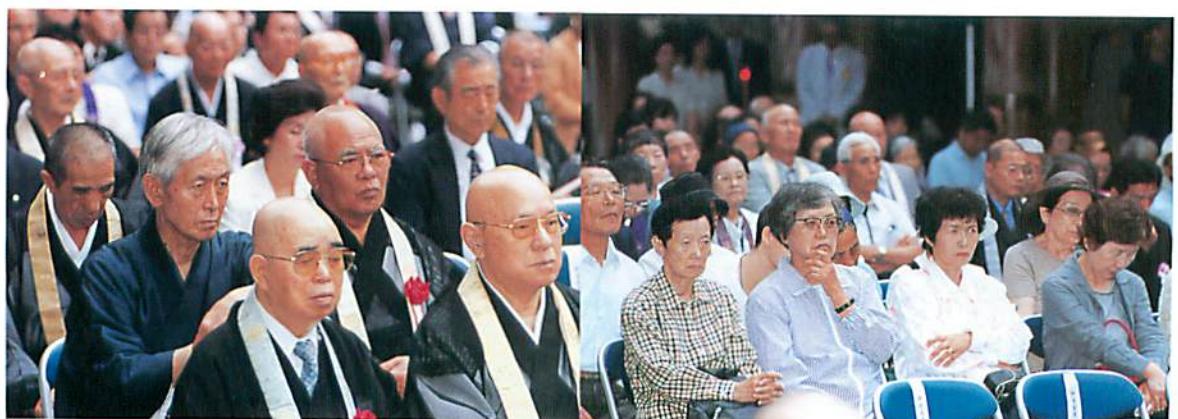


## 平和への祈りとイスラムとの対話集会

イスラム代表の祈り



白柳誠一実行委員会名誉顧問による比叡山メッセージ発表



祈りを見守る



## 平和への祈りとイスラムとの対話集会



イスラムとの相互理解と対話が深められた。



延暦寺一隅会館における記者会見の様子

G R E E T I N G

ごあいさつ

開会にあたって

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

# ご挨拶——世界平和と人類の幸福を祈つて

天台宗宗務総長

西郊 良光

比叡山宗教サミット十五周年記念「平和への祈りとイスラムとの対話集会」は、平成十四（二〇〇二）年八月三、四日の両日にわたり国立京都国際会館、及び比叡山延暦寺を会場として開催された。

私たちは、一九八七年に第一回比叡山宗教サミットを開催して以来、世界の宗教的指導者また平和を求める人々と連帯し、世界平和の実現に向けて努力を続けてきた。私たちの力は小さく、道は遙かに険しくとも、私たち宗教者の対話による相互理解は、世界平和を実現させうると信じる人々の灯となり、新しい時代の確かな指針となりつつある。

しかし、二〇〇一年九月十一日に引き起こされた「同時多発テロ」によつて、世界は一変した。その悲劇の影響は、今なお重く全世界を覆つてゐる。

とりわけ、その犯人がイスラム教徒とされたところから、イスラム教に対する憎悪と偏見が全世界に拡がつたことを、私たちは深く憂慮したために、特に今回、イスラム諸国より代表的指導者を招いてサミットを開催したのである。

その目的は、世界に蔓延したイスラムに対する誤解を解き、イスラムが平和を求める宗教であることを知り、共に平和に邁進することにあった。

今回発表された「比叡山メッセージ」にも、「目に見えない敵に対し、恐怖のあまり全く根拠もない新しい敵をつくりあげ、それに暴力をもつて対処しようとする暴挙を行つてはならない」と謳われている通りである。

不公正と無理解、無関心、そして貧困と抑圧が問題の根底に横たわり、無知こそがあらゆる差別を生んでいる。その差別の温床を断ち切るために、私たちが第一回のサミット以来主張している「対話による相互理解」こそ、最も重要であると判断したからに他ならない。

今回のサミットで、私たちはイスラムから平和を求める訴えを真摯に聞いた。また、イスラム以外の宗教指導者からの提言に謙虚に耳を傾けた。基調講演やシンポジウム、フォーラムを通じて、私たちは共に世界平和に力を結集しあうことを確認した。どのような理由があるにせよ、テロや暴力を否定し、宗教を紛争の道具とすることに反対し、新たな平和への連帯に向けて、共に手を取り合うことを、地球上に共生する者どうし誓い合つたのである。

そして、八月四日、私たちは比叡山上で、それぞれの神仏に、一日も早い世界平和の実現を目指して敬虔な祈りを捧げた。

そのことは、はからずも宗教に理解のない人々から、テロリストの行為や国際紛争を理由として、宗教全体に被せられた「宗教の独善性こそが戦争の原因である」という短絡的な思考が、いかに誤りであり、逆にいかに人類を危険な方向に導いてゆくかを明らかにし、全人類に警鐘を鳴らすものとなつた。また、巷間喧伝された「文明の衝突」や「宗教戦争」という意味づけが、単に無理解から発生したものであることが証明されたのである。

その意味では、比叡山宗教サミット十五周年記念「平和への祈りとイスラムとの対話集会」は、宗教史上特筆される集会となつた。

私たちは、今なお世界の各地に続く紛争によつて、無辜の人々の血が流され、多数の難民が生じてゐることに深い悲しみと憤りをおぼえる。

今回のサミットによつて培われた私たちの信頼と連帯が、これらの人類の悲劇にピリオドを打つよう、行動してまいりたい。

今回の宗教サミット十五周年記念「平和への祈りとイスラムとの対話集会」を開催するための実行委員を組織するにあたり、日本宗教連盟協賛の五団体である全日本仏教会、神社本庁、教派神道連合会、日本キリスト教連合会、新日本宗教連合会および世界連邦日本宗教委員会、世界宗教者平和会議日本委員会、さらに日本ムスリム協会に甚大なるご協賛とご協力ご理解を賜つた。衷心より篤く御礼申し上げたい。

また、時間が切迫するなか、宗教宗派の垣根を超えてご協力を賜つた各委員会委員の皆様はじめ諸先生に深甚の謝意を表するとともに、お手伝いを頂いたボランティアの皆様に篤く感謝申し上げる。

世界平和の実現と、人類の幸福を祈願しつつ。

平成十四年十二月二十五日

P R O L O G U E

# プロlogue

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

# C O N T E N T S

## カラーグラビア

祈りと対話のメモリアルフォト ..... 2  
開会式典・メッセージ・記念講演・シンポジウム・歓迎セレブション・フォーラム 平和の祈り式典

ご挨拶 西郊良光 天台宗宗務総長 ..... 14

## プロローグ

目次 .....	18
比叡山メッセージ .....	20
開催趣旨 .....	22
己を忘れて他を利する 渡邊 恵進 天台座主 .....	24
プログラム .....	26

## メッセージ

ヨハネ・ハウロ一世 ローマ教皇 .....	30
ムハンマド・サイイード・タンターウィ アズハル総長 .....	31
ハッサン・ハシミテ ヨルダン王国殿下 .....	32
河合準雄 文化庁長官 .....	34
新田邦夫 日本宗教連盟理事長 .....	35

## 記念講演－イスラムと平和

「イスラムの平和主義」 .....	38
ムハンマド・サアド・アッサーリム(サウディアラビア) .....	42

## シンポジウム

「イスラムとの対話と理解」 .....	42
ムハンマド・アブドルフアディール・アブドルアジーズ(エジプト)	
ミル・ナワズ・カーン・マルワット(パキスタン)	
ムーサ・ゼイド・ケイラニ(ヨルダン)	

吉澤健吉(コーディネーター)

## 「紛争和解と宗教」

イフェト・ムスタフィッチ(ボスニア・ヘルツェゴビナ)

アブドゥラ・マブルーク・アッナッガール(エジプト)

アルバート・フリードランダー(イギリス)

マイケル・イップグレイブ(イギリス)

ウイリアム・ベンドレイ(アメリカ)

杉谷義純(コーディネーター)

## 平和の祈りの式典

プログラム ..... 73

表白 渡邊恵進 天台座主

平和メッセージ アゴスティーノ・ジョバンニ・ヨーリ(聖エジディオ共同体) ..... 75

## 資料編

開催までの経過 ..... 83

組織 ..... 85

海外代表招聘者 ..... 86

実行委員会名簿 ..... 87

新聞報道の記録 ..... 89

## 英文訳

比叡山メッセージ ..... 96

開催趣旨 ..... 98

平和メッセージ ..... 100

天台座主平和祈願文 ..... 103

ヨハネパウロ二世メッセージ ..... 104

ハッサン殿下メッセージ ..... 108

## 比叡山メッセージ

二〇〇二年八月三日、四日比叡山宗教サミット十五周年を記念して、ここ比叡山上に集つたわれわれは、世界平和のため日夜真摯な努力を続ける宗教者はもちろん、平和を願うすべての人々に、心からメッセージを送りたいと思う。われわれは一九八七年、比叡山宗教サミットを開催した。宗教の垣根を越えて、時間と空間を共有し平和のためにそれぞれの祈りを捧げ話し合つたことは、宗教の奇跡とさえ言われた。それから十年、われわれの願いは拡がり、世界各地で集会が重ねられて、対話はさらに進められ、祈りは深められた。一九九七年再び比叡山に集つたわれわれは、アッシャジから比叡山へと受け継がれた平和の種子が、世界中に蒔かれ着実に芽吹いて、世界平和の実現に向けて新しい確かな流れを形成しつつあることを確認した。

一方では中東をはじめアフガン、インド・パキスタン問題など、地域紛争の火種を抱える国際情勢を常に憂慮し、その緩和のために微力を捧げてきた。そのような状況の中で、昨年九月米国で引き起こされた同時多発テロは、世界中に大きな衝撃をあたえると同時に、これまでの祈りと対話を通じて平和を希求するわれわれの行動に、重く厳しい課題を突きつけたのであった。けれども、われわれはいかなる理由づけがなされようとも、すべてのテロや暴力を否定することを、ここに強く宣言する。

同時にそれらの暴力の背景にあるものを見極め、平和を求める努力をいささかも怠つてはならないことを強調したい。特に今回の同時多発テロの犯人がイスラム教徒とされたところから、イスラムに対する誤解が全世界に広がったことは全く不幸であり、残念なことであった。われわれは、イスラムも、他の宗教と同じく平和を願う宗教であることを知らなければならぬ。

そこで、われわれは今回のテロによって生じたイスラムに対する誤解を解き、共に平和のために献身するために、イスラムの最高指導者を招き「平和への祈りとイスラムとの対話集会」を開催したのである。われわれは、米国同

# 比叡山宗教サミット15周年記念 平和への祈りとイスラムとの対話集会

時多発テロを「宗教戦争」とか「文明間の衝突」とする短絡的な定義づけや宣伝に対し、厳しい批判の目を向けなければならない。また、目に見えない敵に対し恐怖の余り、全く根拠もない新しい敵をつくりあげ、それに暴力をもつて対処しようとする愚挙を行つてはならない。なぜならば、無知こそが、誤解を生む温床であり、お互いの正しい理解と力強い連帯こそ、新たな悲劇を繰り返さない最良の道であることを強く訴えるからである。

今回の同時多発テロを通じて不公正と無理解、無関心、そして貧困と抑圧がどれほど人間の心を絶望の淵に追いやる、虚無的な状況に陥れるものであるか、それがどんなに憎悪を増幅させ人間性を蝕むものであるか、われわれは改めて実感させられた。又、テロや戦争によって、数多くの尊い人命が失われ、今なお失われ続けていることに深い悲しみと憤りを覚える。しかしわれわれは決して諦めはならない。いかなる大義をかざしても、武力に頼る限り、この果てしない憎悪と報復の連鎖を断ち切ることはできないことを訴え続けたい。不公正や相互不信と不寛容が、人と人の間に流れる慈悲や愛、公正さや平等を阻害し、宗教に名を冠した武力衝突が繰り返されるならば、人類に未来はない。そして戦争は宗教が起こすのではなく、人間によつて始められることを深く肝に銘じなければならぬ。

ここにわれわれは、今まで続けてきた宗教間の対話及び相互理解と尊重が、問題解決の出発点であることを再確認する。そのためにわれわれは比叡山上に三度集い、共に神仏に祈りを捧げ、平和への決意を新たにすると共に、これ以上一人たりとも新しい敵をつくりださないように呼びかけるものである。

人間が本来有する靈性を呼び起こし、われわれの祈りに込められた、人類が共生へと向かう輝かしい未来への願いを、一人でも多くの人々が共有し、神仏の加護のもと、この地上に平和な時が訪れんことを切に願う。

二〇〇二年八月四日

比叡山宗教サミット十五周年記念

「平和への祈りとイスラムとの対話集会」 参加者一同

## 開催趣旨

一九八七年八月、我々は日本宗教代表者会議を組織し、日本の宗教者の総力を結集して、初めて世界の諸宗教指導者が日本に集う比叡山宗教サミットを開催した。そして、世界平和の実現について祈り「宗教者は常に弱者の側に立たなくてはならない」との比叡山メッセージを発表した。

その十年後の一九九七年には、再び日本宗教界が総結集して「世界宗教者平和の集い」を開いた。我々異なった宗教者どうしの対話と理解は着実に進められ、平和を願う宗教者の連帯は、より強固なものとなつた。

我々サミットに集い、祈りを共にした宗教者の願いは、世界各地に広がり、宗教の持つ平等性と平和を希求する思想を真摯に説き、苦悩する人々の魂を救済する行動へと高まつていった。そうした行動が、初めて国連に世界の宗教指導者を集めるというミレニアムサミットの開催となり、政治経済ではなく、宗教こそが世界平和を実現させる重要な要因であるという潮流を形成しつつある。

しかし、残念なことに、本来人々を癒し、地上に平和をもたらすべき宗教は、時に為政者によって戦争に利用された歴史を否定できない。それゆえに我々は一貫して異なる宗教者どうしが互いに不寛容を排し、相互理解を確立することが不可欠であることを訴え続けてきたのである。

ところが一方で、世界は冷戦終結によって、それまで封じ込められていた民族間の差別と人権抑圧が吹き出し、紛争が多発することとなつた。また超大国の強力な資本主義が富の不均衡を生みだして、貧困と飢餓に喘ぐ人々を誕生させている。

更には中東やインドなどで続く、宗教同士の根強い対立は、依然として相手を抹殺することで自己の正当性を完結させようとしており、なお対話と和平への動きが遅々として進んでいないことを示している。そして、ついには二十一世紀の幕開けである昨年九月十一日、アメリカで同時多発テロが引き起こされ、人類に大きな衝撃を与えた。我々に重く突きつけられたのは「聖なる戦い」に名を借りた無差別殺戮であり、「正義」の旗のもとに遂行され

## 平和への祈りとイスラムとの対話集会

た「戦争」であった。多くの人々の血が流され、無数の悲劇がはてしなく繰り返された。文明の衝突や宗教間の対立が指摘されるが、その根本には、不寛容と無理解に加えて貧困と差別が横たわっていることを我々は直視しなくてはならない。

太古より、神仏は我々を導かれ、癒され、生きる力を与え給うた大いなる存在であった。神仏の名を利用して殺戮を行うことは、決して神仏に許されていないことを、人類は知らなくてはならない。テロ事件の直後、世界からニューヨークに集まつた宗教者たちは、イスラム教や、キリスト教、ユダヤ教、仏教などの宗教・宗派の違いを超えて犠牲になつた人々を悼み、平和を模索する対話を持つた。これまで我々が積み上げてきた「相互理解と対話」によって実現したこのような行動が、平和をもたらす一筋の光となることを我々は再確認する。

それゆえ、比叡山宗教サミット十五周年を迎えるにあたり、アメリカの同時多発テロ後の様々な世界の情勢を踏まえ「平和への祈りとイスラムとの対話集会」を日本の諸宗教代表者によつて開催することになった。

今回の平和の祈り集会には、海外から特にイスラム教の代表的指導者を中心に宗教代表者を招請し、対話と祈りを深めたい。それは、今回の同時多発テロによつて世界に流布されたイスラムへの偏見と憎悪が、無知からきたことを知らせると同時に、我々に深い反省をもたらすであろう。そして、そのことは平和を希求する隣人として手を取り合い、睦み合い、共に生きる世界へと歩む出発点となるであろう。

第一回比叡山宗教サミットメッセージで我々は「平和の願いはいかなる宗教にとつても根元的なものであることをわれわれは認識し、かつ主張する」と発言したが、その思いの前に相互不信が大きく立ちはだかっていることを直視し、祈りの足らざることと、無理解と差別に打ちのめされた人々との対話が不十分であつたことを謙虚に反省しなくてはならない。幾世紀にもわたつて続く対立の根本的解決は、軍事力ではなく対話と祈りによつてのみ達成される。

比叡山宗教サミット十五周年記念平和の祈りの集いを開催するにあたり、我々はそれぞれの神仏に平和の実現を祈ると共に、不寛容と相互不信に満ちた人々へ、対話と寛容と慈悲を呼びかけたい。また、今回の祈りの集いに参加される諸宗教の代表が行われる平和への提言を心より真摯に聞き、世界平和の実現に向けて一層の努力を続ける決意を新たにしたい。

その平和への祈りが、それぞれの神仏に聞きとどけられんことを切に願うものである。

# 己を忘れて他を利する



実行委員会名誉顧問  
天台座主 渡邊 恵進

宗教宗派を超えて、世界各地の宗教指導者の皆様、また国内の宗教者の皆様が比叡山に集われ、比叡山宗教サミット十五周年記念『平和への祈りとイスラムとの対話集会』が開催されることを、心より歓迎し、篤く御礼申し上げるものであります。

今回は、昨年九月十一日の同時多発テロを受けまして、特にイスラム世界を中心に代表をお招きをいたし、対話と祈りを行うこととなりました。

一九八一年に来日されましたローマ教皇ヨハネ・パウロ二世聖下は、日本の代表的宗教指導者に対し、「世界平和実現には相互協力が最も必要である。日本宗教の古い指導者である最澄の言葉を借りるならば、「己を忘れて他を利するは、慈悲の極み」という慈悲の精神こそが最も重要な要素である」と述べられました。

どうぞ皆様も、お一人お一人が己を忘れて、生きとし生けるものすべてを慈しむという慈悲の心をお持ち頂き、さらにそのお心を、隣人に拡げて頂きたいと念ずるものであります。

そのことが、共生の社会をつくり、地球を護り、世界平和実現に繋がると信じております。

合掌

P R O G R A M

プ ロ グ ラ ム

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

# Program

## プログラム

第1日目：2002年8月3日(土)

国立京都国際会館 メインホール		
12:30	開場	
13:30	開会式典 主催者代表挨拶 実行委員会委員長 西郊良光師 海外代表者紹介 実行委員 花井拓夫師 祝辞 文化庁長官 河合準雄氏 日本宗教連盟理事長代理 名誉顧問 工藤伊豆師 メッセージ ローマ教皇 (代読) 大塚喜直師 (カトリック京都司教) アズハル総長 (代読) ムハンマド・ア卜ドルファティール・ア卜ドゥラジーズ博士 ハッサン王子(ヨルダン) (代読) ムーサ・ゼイド・ケイラニ師	
14:10	記念講演=テーマ「イスラムと平和」 発言者:ムハンマド・サアド・アッサーリム博士 (イマーム・ムハンマド・ビン・サウード・イスラーム大学学長) ……サウディアラビア 演題「イスラムの平和主義」	
	休憩	
15:15	シンポジウム=テーマ「イスラムとの対話と理解」 発言者: ムハンマド・ア卜ドルファティール・ア卜ドゥラジーズ博士 (エジプト) (アズハル大学神学部副学部長) ミル・ナワズ・カーン・マルワット師 (パキスタン) (アジア宗教者平和会議実務議長) ムーサ・ゼイド・ケイラニ師 (ヨルダン) (国際イスラム評議会代表) コーディネーター:吉澤健吉氏 京都新聞社編集局文化報道部情報担当部長	
17:00	閉会　閉会挨拶　実行委員会副委員長 加藤隆久師	
宝ヶ池プリンスホテル プリンスホール		
18:00	海外代表者歓迎レセプション 開会挨拶 実行委員会副委員長 山野井克典師 歓迎挨拶 大本総長 廣瀬静水師 メッセージ披露 バチカン・アリンゼ長官 (代読) サン・テック・リー師 消興 仰木太鼓 (仰木太鼓保存会少年部) 乾杯 浄土宗知恩院執事長 牧 達雄師 会食・懇談 閉会挨拶 実行委員会事務局長 工藤秀和師	
20:00	終了	

# 比叡山宗教サミット15周年記念

## 平和への祈りとイスラムとの対話集会

第2日目：2002年8月4日(日)

### 宝ヶ池プリンスホテル 高砂の間

9:30	フォーラム=テーマ「紛争和解と宗教」 発言者： イフェト・ムスタフィッチ師（ボスニア・ヘルツェゴビナ） （ボスニア・ヘルツェゴビナ宗教間対話協議会事務局長） アブドッラー・マブルーク・アッナッガール博士（エジプト） （アズハル大学イスラム法学部教授） アルバート・フリードランダー師（アメリカ） （元世界宗教者平和会議国際名誉会長） マイケル・イブグレイブ師（イギリス） （英國国教会宗教間協議会顧問） ウィリアム・ペンドレイ師（アメリカ） （世界宗教者平和会議国際委員会事務総長） コーディネーター： 杉谷義純師 （世界宗教者平和会議日本委員会事務総長）
11:30	昼食・休憩
13:00	比叡山上へ移動

### 比叡山延暦寺根本中堂前広場

15:00	平和の祈り式典 開式の辞 主催者代表挨拶 平和の鐘 平和の祈り 平和のメッセージ 比叡山メッセージ発表 閉式の辞
終了後	記者会見

M E S S A G E

# メ ツ セ ー ジ

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

## MESSAGE

### ローマ教皇庁宗教対話評議会長官 フランシス・アリンゼ枢機卿

渡邊猊下

ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世聖下よりメッセージをお届け致します。

比叡山宗教サミット十五周年記念の集いに際し、ご参加の皆様へ心よりごあいさつをお送りします。教皇聖下は、猊下のすばらしい先任者であられた天台座主故山田恵諦猊下を、尊敬と感謝の気持ちで思い出しておられます。一九八六年十月にヨハネ・パウロ二世聖下が呼びかけられアッシジで開催された「世界平和祈りの集い」に、故山田猊下は参加されたのみならず、この「アッシジ精神」を別の集いで継承する、と発表されたのです。この精神を受け継がれた山田猊下は、今回でたく開催される比叡山宗教サミットの記念すべき第一回の集いを陰で支える力でした。

今年の集いはイスラムとの対話という最も時宜を得たテーマを選ばれました。二〇〇一年九月十日の悲劇以後、世界は大きな不安に包まれています。事実、疑いと誤解が蔓延していますが、この霧を晴らすためには実際に人々が集い、お互いの意見を聞くしかありません。

ここにこそ、世界の宗教指導者の役割があるのです。人の意見を聞く精神は祈りによって強化され、人の心を神に向かって開かせます。そして同じように神の創造物、特に同胞である人間が難局にある時、人々に心を開かせるのです。また、祈りは勇気の源となり、教皇ヨハネ・パウロ二世聖下によれば、この二つの柱を強化し、その上に平和が訪れます。すなわち正義と赦しが実現されるのです。

サミットの開催中、教皇聖下の心は皆様と共にあり、皆様と祈りと共にされますことを、確信をもつてお伝え致します。

平和が猊下と、全ての参加者の上にありますように！

## MESSAGE

アズハル総長

### ムハンマド・サイイード・タンターウィ

慈悲深く、慈悲あまねき唯一神アッラーの御名において。

万世の主である唯一神アッラーに称賛あれ。高貴なる使徒ムハンマドと、従う兄弟達の全てに祝福と平安がありますように。

ご出席の皆様。

平和のために祈るこの宗教サミットは、全ての場所にいる人間世界の子孫のために、至高なる唯一神アッラーが預言者たちに託して伝えた神与の呼びかけを行うものであります。そして勝者にも敗者にも無慈悲で残酷な戦争を止め、平和に入ることにより、安全で確立した生活を祈願するものであります。

エジプトのアズハルは、イスラームの最高権威であり、宗教大学として知られ、その伝道は一千年前より、全世界に対し、真理を実現させるために、抑圧された者達を救い、聖地を保護し、危機を排除するメッセージを呼びかけてきました。中でもその聖地の筆頭に挙げられるのは、今なお敵対行為に直面しているエルサレムです。そこは最初に信徒達が礼拝した方角であり、第三の聖地として、預言者が天上へ旅をした場所でもあります。

そのためにも、私自身は、本サミット会議代表者の皆様に、全ての国々のメッセージを読んでいただき、この人間世界に世界的な秩序ができ、民族間の公平が実現され、正義が勝利をおさめるまで立ち上がり、邪悪が敗北して消滅するまで立ち向かうことを望みます。このためには平和が広がり、世界各地へ波及して、世界を分裂させる争いを止め、全世界、全人類の祖先が一つであつたことを想い起こして、民族が互いを見直し、団結する事です。また、神が与えた命令に応えることあります。コーランに、「アッラーの糸に皆でしっかりとお縋りし、決して分裂してはならない」とあるように、御言葉に応えて、離れずに協力し合うことです。コーランは「正義と篤信のために助け合い、罪と恨みのために助け合つてはならない」ともあります。

私は至高なる唯一神アッラーへ、人間世界を統合して、正義と公正とによる世界秩序をもつて、全世界の隅々まで平和が広がるように祈り上げます。

また、預言者ムハンマドと親族、教友たちの上にも、唯一神アッラーの祝福がありますように。

# MESSAGE

## ヨルダン王国 ハッサン・ハシミテ

大変残念なことに私は今日の式典に参加することが叶いませんでしたが、「諸宗教とイスラム教との対話」というこの重大な宗教サミットにメッセージをお送りし、素晴らしい友人である仏教、神道、などの主催者の皆様と信者の皆様へ、私の友情と連帯の心をお伝えしたいと存じます。そして調和と尊敬、寛容と慈悲の心をすべての人々に拡げておられる、世界中の宗教を信じる皆様に、このメッセージをお届けいたします。

この偉大な国である日本は、豊かな歴史遺産と世界文明に対する数々の貢献と共に、諸宗教の共存と寛容でも知られていますが、一八九〇年、一世紀以上も前に制定された明治憲法に宗教の自由が謳われています。そしてこの原則は第二次世界大戦以後の大きな活力再生に寄与し、一九五一年に制定された「宗教法人法」には信教の自由とすべての宗教の保護を保証しています。

一九九八年五月二十三日～二十五日にInternational Coalition for Religious Freedom（宗教の自由国際合同会議）で「新世紀における宗教の自由」のテーマで会議が開かれましたが、実に日本は、開催国として最も適切な国であると評価されたのです。私はその際の歓迎の言葉より、すばらしいインスピレーションを受けましたので、その言葉を引用させて頂きます。「今エイズより深刻な疫病があります。それは孤独と、関係性の欠如です。私たちが、人間関係の基本的絆を破壊すると暴力に繋がります。日本の漢字では、「人間」と言う文字は二本の棒が互いに支え合つて形作られています。この文字の意味は、社会の安全と人間の心の聰明さをもたらす関係を標記しているのです」。

皆様、昨年の九月十一日にアメリカで残酷な攻撃が起きて以来、世界はイスラムを理解するための方策を探っています。一つの考え方は、熱心に、啓蒙的に、イスラムの教義と、信仰の名においてこのような罪を犯す者達の残酷なやり方とを区別しよう、と言うものです。一方では、たまたまムスリムであつたテロリストの行動と、イスラム教は簡単には区別できないほど深く結びついているものである、との悲しい見方をしています。この会議のタイトルは「世界諸宗教とイスラムの対話」ですが、非常に時宜を得た企画であると思います。

私たちムスリムは、パワフルなクルアーンの世界観である連帯を再確認しなければなりません。

## MESSAGE

連帯と言つても、もちろん、ムスリム信者達が一つの信仰に執着し、法令や宗教上の規制を他の人に強制することではありません。この点について、クルアーンの立場は明確です。「宗教における無理強いがあつてはならない。」（一一二五六）また、「あなた方はそれぞれに宗教を持ち、私は私の宗教がある。」（一〇九・六）信仰者同士の連帯とは、様々な人間社会において互いに切磋琢磨し、良きことのために努力すること、人類共通の倫理とヴィジョンを追求し、お互いを理解するように努力することです。仏教の氣高い信仰は、他者との連帯と敬意の念を抱く精神を次のように強調しています。「母親が子供を命がけで守るように、生きとし生けるもの全てを受容する思想が、あなた方のものとなるように」（Khuddaka Patha, Metta Sutta）。

共通の価値観と共同の目的を持つことが、友情を支えます。ヨルダンと日本は、過激派に対処する最良の方法は、平和の構築、経済改革である、との共通の認識を持ち、紛争の平和的抑止と解決にむけて努力を続けております。なぜならこれは、経済振興と社会開発、また人権と民主主義の発展のために欠かせない問題だからです。「人間同士の敵対」と人道主義的課題である人間と自然の不調和、という二つのコンセプトについて、ほぼ二十年前「人道問題独立委員会」に参加された緒方貞子女史が講演され、新しい人道社会の創造を提唱されました。私は彼女の役割と、この世界規模の計画を立証する、平和建設者としての日本の役割を讃め讃えます。

最後に、私は皆様に次の言葉をお送りしたいと存じます。これは私が常に大切にしている、偉大なムスリムであるIbn Al-Arabi イブン・アル・アラビ博士（一二六五年 スペイン生・一二四〇年ダマスカス没）の詩です。以下が有名な博士の言葉です。

私の心はすべての風に向かつてひらく

それはガゼルの牧場であり クリストヤン僧侶のふるさと 偶像の寺院  
メックラ巡礼の黒石 トーラの台 そしてコーランの聖典 私の宗教は愛  
神のキャラバンがどこに向かおうと 愛の宗教が私の宗教 そして私の信仰

## MESSAGE

### 文化庁長官 河合隼雄

本日ここに、比叡山宗教サミット十五周年記念「平和への祈りとイスラムとの対話集会」が、世界から多くの宗教界の代表者の参加を得て、このように盛大に開催されますことを、心よりお慶び申し上げます。

本年十五周年を迎える比叡山宗教サミットは、昭和六十一年に初めて開催され、世界の宗教者が、宗派、教義の違いを超えてこの地に集い、世界平和の実現を共に願い、そのために祈り続けることが誓い合わされたと同っております。以来、この比叡山宗教サミットの精神は今日まで継承され、「世界平和祈りの集い」として開催されてきたところであり、長年にわたる皆様方のご努力に深く敬意を表する次第でございます。

しかし、新しい世紀を迎えるも、なお、世界各地では、紛争、民族対立、環境破壊、貧困・飢餓など人類の平和を脅かすような様々な問題が発生しており、世界平和を希求する人びとの声は今もつて絶えることがありません。

今後、世界平和の実現を目指していくためには、更に、各国、各民族が対話と相互理解を深めるとともに、国境や言語、民族、宗教を超えて、人々の心を結び付けることにより、世界平和の礎を築いていくための不斷の努力が強く求められております。

このようなかつて、比叡山宗教サミットの対話と相互理解に基づく世界平和の実現に向けた取り組みは、ますます重要な役割を果たすものと思います。

今回の比叡山宗教サミットは、これから二日間にわたり、記念講演、シンポジウムなど様々な行事が行われ、また、明日は、比叡山延暦寺におきまして、平和の祈りの式典が予定されており、世界の宗教者による平和の祈りとともに、新たな平和への誓いを込めた比叡山メッセージが発表されるをお伺いしております。

本日、このサミットに参加された宗教者の平和への提言と祈りが世界各地に拡がり、世界平和の実現を果たすうえで重要な役割を担われることを期待いたします。

おわりに、比叡山宗教サミットの世界平和実現に向けてのますますの御発展と、世界各国、日本全国から参加された皆様方の御活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

## MESSAGE

### 日本宗教連盟理事長 新田邦夫

日本宗教連盟を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。  
本日は、かくも盛大に「比叡山宗教サミット十五周年記念『平和への祈りとイスラムとの対話集会』」が開催されること、誠に御同慶の至りに存じます。

はじめて比叡山に世界の宗教者が集い、平和のために深い祈りを捧げて以来十五年、今日まで多くの方々のご尽力によつて、着実に平和を祈る歩みが続けられておりましたことに、心から敬意を表する次第であります。

今日、世界の状況は誠に厳しいものがあります。生命・人権・環境などを脅かす事態が次々に起ころり、それらの事態を解決しようとする努力とはうらはらに、世界中に危機的状況が増大していることは、私たち宗教者にとって見過ごすことのできない大きな課題であります。

昨年来のテロ事件続発は、私たちに、平和に向けた新たな取り組みの必要なることを迫っています。宗教者に限らず多くの方々が既にそのことに取り組んでいるところですが、そうしたさなか、ここにイスラームの人々との対話をテーマにした集いが持たれますことは、まことに意義のあることと存じます。

日本宗教連盟におきましても昨年十月、「米国同時多発テロ事件に対する声明」を表明し、十二月には「日本人にとってのイスラーム―同時多発テロ事件を契機として―」をテーマに、対話を基調としたシンポジウムを開催いたしましたが、対話を中心にした平和への取り組みがますます求められている時だけに、このたびの集いが平和な未来への確かな一步となることを期待するものであります。

今、世界の平和とすべての人々の心の平安を祈ることは、私たちの負い持つ使命であります。今日から明日にかけてのこの集いが、世界平和に向けての尚一層の力強い歩みとなりますことと祈念いたしまして、簡単ではございますが御挨拶といたします。

L E C T U R E

記念講演 テーマ「イスラムと平和」

比叡山宗教サミット15周年記念  
平和への祈りとイスラムとの対話集会

# イスラムの平和主義

イマーム・ムハンマド・ビン・サウード・イスラム大学学長  
ムハンマド・サアド・アッサーリム博士(サウディアラビア)

唯一神アッラーを称えます。最初にして最終、又天と地を打ち立てられた御方、至高にして最高の権威者を、私は褒め称えます。同じく、遣わされた最善の人格である唯一神の僕、ムハンマドと彼の家族、教友たちの上に平安がありますよう祈ります。

平和こそがイスラームの挨拶であり、愛を広め、兄弟や同志を親しくさせる宗教がイスラームです。私たちの使徒はこう語っています。「物事を為すときは互いに親愛の情を持つようにと告げなかつたかな。はい、そうでしたと皆が答えると、では、あなたがたの間に平和を拡めるように」と話されました」。

平和は、また唯一神の属性を示す御名の一つであり、信徒のムスリム達はそれを信条としています。ムスリムとは同じく、話すこと、行うことには平和を示す者達であると、預言者は言わされました。こうして、イスラームを理解するものは、その拡がりを不思議に思いませんし、その教えを知るものは、人類を益すると肯定しながら、人々への愛を拡げています。

皆様、ムスリム達はこの宗教を誇りとします。それが愛の宗教だからです。

また、人々を益するために平和と友愛を呼びかけ、遠くも近くも救援のために奔走し、全人類の幸福を望んでいます。その

宗教の教えを実行し、唯一神に従うことでイスラームは、正しい宗教として発展し、いつの時代、どこの場所でも個人生活と社会を包含する宗教です。人間の道徳、他人との関係、環境と生活の関連を補完する宗教もあります。それは思想の流れや歴史の時代による動向や改善を促す、人間的な改革の誘いとは異なっています。

イスラームは十四世紀前に現れたとき、唯一神への信仰を人類に呼びかけています。唯一神は、そこに住みそこにある万物の創造者であり、そして人間を尊び人間の尊厳を守る素晴らしい人類文明を、創出させたのです。その光はヨーロッパへ到達し、アジア、アフリカへ拡大されて、イスラームへ入信してその一部となつた民族の文明を総合し、イスラーム・アラビア文明の形成に大きな寄与をしました。

この文明は、ここでは説明時間が無い様々な状況に置かれた結果、停滞と遅滞の期間に陥つたのでした。同じく、或る部分はイスラームの教えと一部のムスリムに帰せられる行動が混同されてしまい、多くの人々に事態を分かり難くさせました。特に、一部の情報筋がイスラームに起因するとして悪い部分を伝えることで、悪い印象を与えて偏見を生み、誤った判断を作り出しています。

この場所において、私は、イスラームとその教えを分けて、公正で眞実に基づく分析の必要なことを指摘したいと思いま

# 記念講演



す。天与のシャリーア（神の道）は誤りなく曲解や不正から守られていますが、人間の行いは時代に流され、移ろい易く、誤った解釈や理解をしがちということなのです。

皆様、イスラームの歴史は、善い行いに徹すること、平和時も戦時も同じ制限をその行動に課すなど、素晴らしい判例に満ち満ちています。

このように、私たち皆で、眞実を明らかにすること、イスラーム思想やイスラーム文化、ムスリム達の文芸、科学、道徳、政治などの文化遺産を修正する一部の思想家が陥った誤りを正すことが必要なのです。

彼等はその状況や流れを変節して、読む順序を改悪したり、呈示された資料を改ざんして、その姿を歪め、時には意図的に画策し、他では無知や無理解を露呈しています。

一例を挙げるならば、人権の問題や女性問題、宗教上認められる問題やその他の今日議論される問題について取り扱うとき、聖典コーランや預言者の言行（スンナ）から来た法的な典拠を定めるイスラームの明解な解釈を無視します。そして人間

皆様、人権の分野においてサウディアラビア王国の法令モデルはイスラームを基盤としています。その高度の規範は重要で価値があり、地上に存在するものとして研究に値するでしょう。もし私たちが異文化を見るとき、全ての者が信じるのは、私たちが同一の両親から生まれたことであり、私たちの目的は地球を住処とし、全ての者が生きるために安全で、生活や信仰、財産などが保証される平和を実現する事です。イスラームでは、対話は義務であり、推奨されるとコーランにあります。預言者の伝記は様々なやり方、方法を明示しています。コーランには「あなたの方を、民族や部族にしたのもお互いに分かり合うため」とあります。他人を理解するには対話なくして成立はしないでしよう。

現在、私たちが急務とするのは、道徳の精神と物質主義の均衡を見出し、全人類の公正を図り、地球全体規模での発展を実

現することだと確信します。

また、私がリヤドにて丹波実大使から聞いた話を披露します。日本とサウディアラビアの間には、地理的にこれだけ大きな隔たりがあるにも関わらず、歴史的な類似性がある。その類似性とは、両国が共にその確固とした伝統を保持することで経済的な発展を実現したことだ』という言葉でした。

皆様、例えば、イスラームにおける女性の立場について、イスラームでは女性が男性と同じ権利を、全てのムスリムが信ずるコーランの中で保証されていることをご存じでしょうか。「女性は与えられた対等の権利を持っている。男性は女性に対して等級を持つ」。

この、等級と言うのは、秩序を守る上での区別と言うことで、言われるような隸属を示すものではなく、船を操縦するときに、一人の船長が操縦すれば、無事に目的地へ着くのに、二人の船長が舵取りをすれば、うまく行かないというような意味であります。

日本の「武士道」の著書で新渡戸稲造氏が言っている言葉に「男女平等が全ての面で実現することはないと悟ること」とあります。

イスラームは、人間を構成する男女両性へ語りかけています。この視点からイスラーム哲学が始まり、両性の関係を構築して女性から男性の立場を定めるのです。この一つの例からこの問題に対するイスラームの真実を明らかにすることを望んだ次第でした。

一部個人の振る舞いとイスラームの教えが危険な形で一般化して混同したことが、イスラーム教理や神の法を侵犯する方向

付けとなつたのです。私たちは相互理解と対話が必要とします。宗教の価値を知るために対話であり、党派や差別をなくすことです。私たちはサウディアラビアにおいてこれら問題を常に論議の議題として採択しています。この中から、アブドッラー皇子は中東和平実現のために周知の構想を提案して、この世界の一角に安全と平穏が訪れるまで、可及的速やかな平和の実現を世界に求めました。その提案は特に重要なものがありました。

私たち、イマーム・ムハンマド・イスラーム大学は國の方針を実現するために運営しており、教育機関を通して対話の基地とするべく、全世界に施設を設立しています。東京に設立したアラブ・イスラーム学院は、本大学の付属であり、アラブ・イスラーム文化と日本文化を緊密に結ぶ橋頭堡であり、両国間の対話と相互理解を目的としています。教育、授業の合間に、シンボジウムや会議を開催して理解を深め、平和の実現のために努力しています。学院は本大学に属するだけでなく、友人である日本の方々のものもあります。

それは日本の土地にあるからです。イスラームの本当の姿を知りたい方は、直接お会いするか、または図書館の蔵書を通して、どなたでも歓迎いたします。

今回の会議を開催してくださった全ての方々に心からの謝意を表します。

そして特に今回、「イスラーム理解とイスラームとの対話」という議題をいたいたことに感謝します。ご出席の皆様へ有り難うございました。

皆様がたに、平安がありますよう祈りながら。

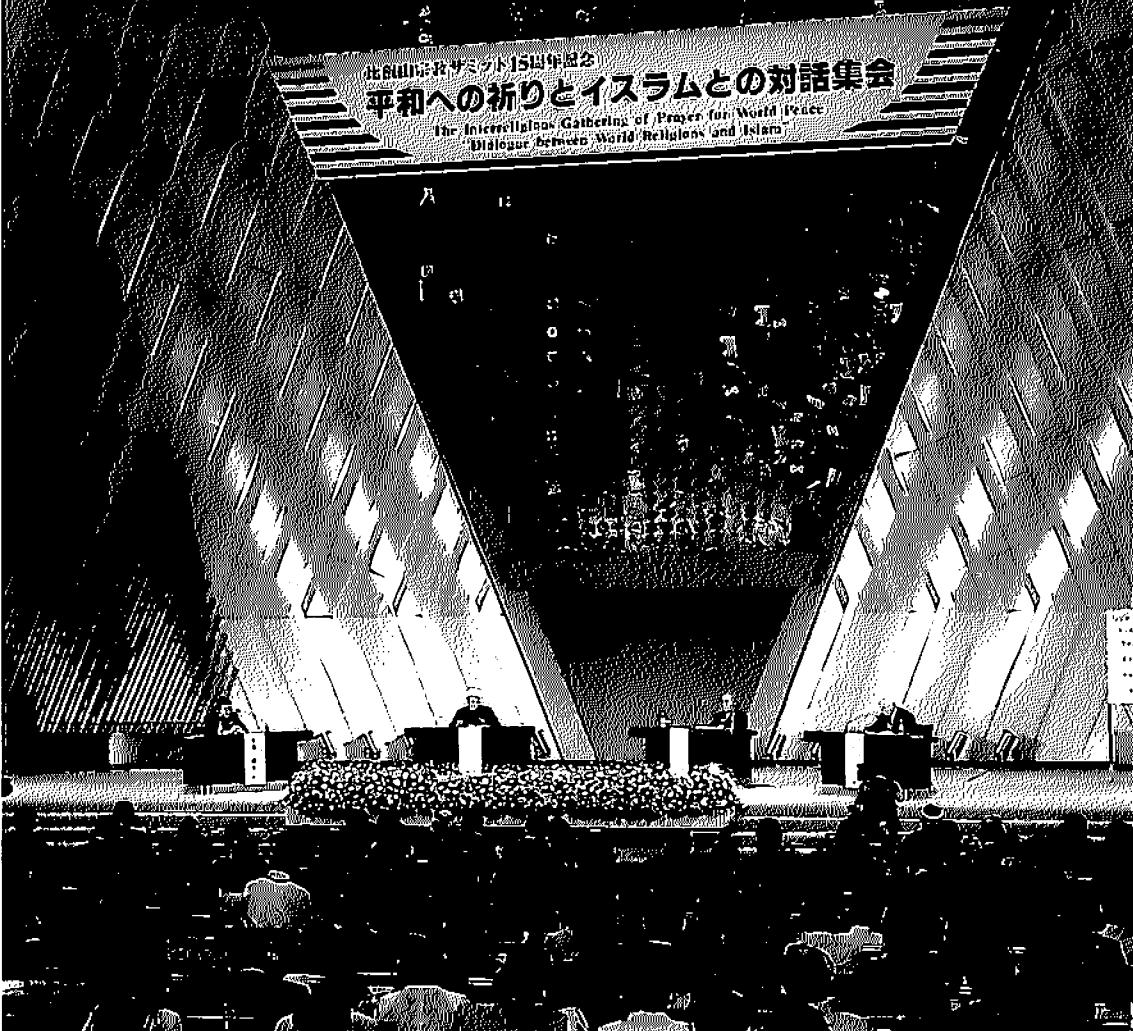
S Y M P O S I U M

シンポジウム テーマ「イスラムとの対話と理解」

比叡山宗教サミット15周年記念  
平和への祈りとイスラムとの対話集会

# ◎シンポジウム イスラムとの対話と理解

2002年8月3日 午後3時より  
国立京都国際会館メインホール



## ◎発言者

アズハル大学神学部副学部長

ムハンマド・アドルファディール

アドルアジーズ博士(エジプト)

アジア宗教者平和会議実務顧問

ミル・ナワズ・カーン・マルワット師  
(パキスタン)

国際イスラム評議会代表

ムーサ・ゼイド・ケイラニ師(ヨルダン)

## ◎コーディネーター

京都新聞社編集局文化報道部情報担当部長

吉澤健吉氏

(本文敬称略)

今回のサミットは、昨年九月十一日に起った同時多発テロを受けて、世界にイスラム教全体に対する不安と不信が拡がっていることを懸念し、宗教者間の理解と対話を深めることを目的に開催されたものである。

そのために開催された「イスラムとの対話と理解」のシンポジウムは、出席者全員がイスラム世界からの宗教指導者が構成され、日頃日本人が疑問に感じているジハード(聖戦)や一夫多妻制、食物禁忌などについて、コーディネーターとなつた京都新聞社の吉澤健吉部長が質問する形で進められた。

会場となつた京都国際会議場には、千三百人の参加者がつめかけて、熱心に聴講、イスラムへの理解を深めた。

## 平等・生命・兄弟・友愛・寛容

吉澤 ただ今より比叡山宗教サミット十五周年記念シンポジウム「イスラムとの対話と理解」を始めます。

最初に三人の先生方の簡単なご略歴を紹介いたします。

まずアブドルアジーズ先生です。一九四四年一月十二日生まれ、五十八歳というまだ若い先生であります。千年以上の歴史を誇るイスラム学の総本山・アズハル大学で、一九七五年に哲学博士号を取得されました。専攻は「信条と哲学」であり、現在はアズハル大学神学部副学部長を務めています。

一人目はミル・ナワズ・カーン・マルワット先生です。現在、アジア宗教者平和会議実務議長を務められています。先日インドネシアで開かれました、アジア宗教者平和会議でもご活躍されております。パキスタン・イスラム共和国最高裁判所顧問で、同連邦政府大臣に二度就任されております。現在アジア宗教者平和会議実務議長、そして世界宗教者平和会議国際会長で、パキスタンの両組織の委員長を兼ねていらっしゃいます。また世界ムスリム会議国際事務総長補も務められております。

三人目は、ヨルダンからお越しのムーサ・ゼイド・ケイラニ先生です。現在、ヨルダンのアル新聞社の編集長を務められております。エルサレム問題関連のイスラム協議会の執行委員もされております。国際イスラム協議会代表、そして元ハーレーン大使、元スエーデン大使も務められました。要職にあられる方でございます。

本日の「イスラムとの対話と理解」の開催趣旨であります。昨年九月十一日の「アメリカ中枢同時テロ」以来、日本ではイスラムへの関心が高まってまいりました。イスラム世界は長年、日本にとって遠い存在でした。その原因は何かと言いますと、明治以来、欧米に追いつけ追い越せという国策のもとに我が国は突き進んでまいりました。戦後は、アメリカの繁栄を手本に復興に励んできました。また、キリスト教は明治以来、日本にミッションスクールを相次いで開校し、教会も数多くできたために、我々にとって非常に身近な存在であったのに対して、イスラム教は最近まで、ほとんど目に触れる形では見えてきませんでした。

まぜんでした。アメリカ中枢同時テロと、それに続くアメリカのアフガン空爆は、そんな日本人に大きなショックを与えるました。また、欧米のジャーナリズムを通じて流れてくる「イスラム原理主義」「ジハード」という言葉が、国民党は、十五年前、比叡山宗教サミットを呼びかけた山田惠謙天台座主であります。本日はイスラムに無関心であつた私たち自身への反省もこめまして、遠いイスラム世界から指導者の先生方を迎えて「イスラム」という宗教の教えや、平和について何を考えているのか、日本の宗教者に何を期待しているのか等についてご意見をお聞きして、イスラムへの理解を深めたいと考えております。シンポジウムを始めるに当たりまして、まず三人の先生方にそれぞれ十分ずつご発題をお願いします。

それでは最初にアブドルアジーズ先生からお願いします。

アブドルアジーズ 慈悲深く自愛あまねき唯一神アッラーの御名において。  
イスラムのメッセージは、唯一神が人類に与えた最終のものであります。それは時間と場所を問わず、全ての人々に贈られたものであります。それは普遍的なメッセージであり、全人類に対する深い慈悲に富んでいます。

自愛あまねく唯一神アッラーは、その慈悲の下に、平和、公正、協力、善行、などを保証して、不幸、恐怖、残酷な戦争などにより、人々が分裂して憎しみあうのを避けるようにと諭しています。

われわれの惑星は、各地で失われた平和と安全を回復するために、今この神圣なメッセージを必要としているのです。人類の病を癒すために、この最終のメッセージが、どのようなものであるか、答えたいと思います。

第一は、イスラームのメッセージは、唯一神の啓示に基づく聖なるコーラン



と預言者の言行録ですから、全く偏りがなく公正で、全ての人々に教えるものであります。

人類の主は、特定の民族や人種、國家、党派などに決してこだわりません。コーグンには、「全てのものを完成なされるアッラーの御業なり」(二七章八八節)、および「コーグンをよく考えてみないのか、アッラー以外のものから出たとすれば、必ずや多くの矛盾を見いだすであろう。」(四章八一節)とあります。

イスラームのメッセージは、他の人間に隸属することから解放し、誠の人性を実現させるものであります。

イスラームにおける人間の位置は、神のような高い地位にあらず、動物のような低位ではないとされますが、特別な創造物として他に優越しているといわれます。「私はアダムの子孫を重んじて、海陸に運び、良いものを支給し、我が創造した多くのもの上に優越させたのである」(一七章七〇節)。

しかも人間は、この地上においては神の代理人であり、そのためには地獄がありますから、公正をもって、繁栄させることができます。不正や悪行を避け、善行をなして、人間兄弟が協力し合つて住まなければいけないのです。

イスラームにおける人間性は強者が弱者を制圧し、蹂躪することを許さず、強者が傲慢でないようにとも命じています。

第二にイスラームのメッセージは、人間の生命の貴重さと尊厳を強調しています。人の命は、神の魂の息吹が送り込まれたようなものであり、唯一神から贈り物ですから、むやみに奪うことは許されません。命を粗末にすることは、例えそれが自分の命でも大罪に値します。イスラームでは、動物の命まで、その範囲を広げています。「地上の生きとし生けるもの、双翼で飛ぶ鳥も、あなたがたの共同体に属している」(六章三八節)。ムハンマドの言行録には「猫を死ぬまで閉じこめ、食事を与えなかつた女は、地獄に行く」とあります。

第三にイスラームのメッセージは、人間が兄弟であるという基本を実現するように述べています。人種差別や、民族優先の考えは有害であります。ムハンマドは教友達に「それは悪いことだ」と言い、嫌いました。また礼拝に際しては「願わくば、我らをして、人間みな兄弟であることを実証させ給え」といわれました。またコーグンでは「人々よ、我是一人の男と一人の女からあなた方

を創り、種族や部族に分けた。これはあなたがたが互いに知り合うためである。アッラーの御許で最も貴いものは、最も主を畏れるものである」(四九章一二節)と、述べられています。

第四にイスラームにおける友愛の精神は、單なる理論に終わるものではなく、実際に使える実践の形式を探っています。「われは、万有への慈悲として、あなたがたを遣わしただけである。」(二二章一〇七節)。

ムスリムはその慈悲をもつて、自己本位でなく、他者との障害を取り除きながら、協力し合うのです。その慈悲と善行により、全ての人間と信仰を分かち合い、怒りや嫉妬、暴力、強制などが一切ない、英知と優しさ、愛情のこもった付き合いをするのです。「英知と良い話し方で、あなたの主の道へ招け」(一六章一二五節)。ムスリムは、ムスリムでない人々と接するとき、心からの慈悲と愛情を持つて行うよう命令されています。そして人々の望む信仰の自由を守るように、決して強制してはならないと命じられているのです。それは信仰が人間精神の深い内面から生まれるものであることを尊重するからです。

宗教の強制は、信仰を生まず、偽善のみを生じさせます。コーグンは「宗教に強制があつてはならない。正しい道は誤りから分かたれている」(一七章二五六節)ともあります。さらにコーグンは、人間が宗教や信仰において様々な道があることも述べています。「あなたの主の御心ならば、人々を一つの共同体にしたであろう。：だが違つてているのも主の慈悲によるもの」(二二章一八節)。「もし上の御心ならば、地上の全てのものは信仰に入ったことだろう」(二〇章九九節)。

第五にムスリムでないものが、自分の宗教を続けることを選んだ場合はどうなるでしょう。イスラームでは、非ムスリムに対して、善意と親切心、公平に接するよう、決して荒い言葉を使つたり、権利を剥奪したり、迫害してはならないとしています。「アッラーは、宗教上のことで、あなたがたに戦いを仕掛けたり、家から追放したりしなかつた者達には、親切を尽くし、公正に待遇することを禁じてはならない。」(六〇章八節)。ハディース(言行録)には「ムスリムは非ムスリムに対する態度はすべて良くするように」と命じています。また、「非ムスリムを害した者は、私を害したと同じこと」、「非ムスリムに害を与えた者には、私が相手となろう」という言葉まで残されています。この二

つは、ムスリム達が如何に行動するかの基本を示しています。

また、教友のアブドッラー・イブヌ・ウマルが羊を屠殺したとき、隣人のユダヤ人へ、その肉を召使いに届けさせたと聞いた預言者は「隣人を思いやるのは天使が推薦したことである」と言いました。

また、ユダヤ教徒と後にカリフとなつたアリーが裁判の席に出たとき、裁判官が、アリーを「アバーハサン」と通称で呼んだとき、アリーは怒った顔つきを見せました。裁判官が何故かと尋ねると、そういう親しげな呼び方をしては、裁判の公正が保たれないのではないか、と答えたと言います。

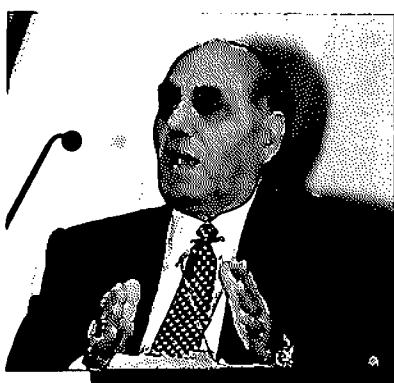
イスラームは信仰を異にする人々が、善行において競い合うことを認めています。イスラームは既に「文明の衝突」を乗り越えており、全人類的な視点に立っています。コーランには「全ての方位は主のものである、だから善行にいそしめ」(二章一四八節)。

終わりに当たり、私のスピーチは「慈悲深く慈愛あまねき唯一神アッラーの御名において」というイスラームのシンボルである言葉で始めました。そして最後を「アッサラム・アライクム」と、「あなたがたの上に、平和と唯一神の慈悲がありますように」という挨拶で締めくりたいと思います。この二つの挨拶の言葉の中にこそ、人類に対して贈られたイスラームのメッセージが集約されています。偉大なる慈悲、恒久の平和、導きの光、真の安寧が語られているのです。

## 「ジハード」とは社会悪と戦うこと

吉澤 アブドルアジーズ先生ありがとうございます。非常にわかりやすい言葉でイスラムの教えるポイントをまとめていただきました。一つは平等主義、二つは生命の大切さ、三つ目は人間がみな兄弟であるということ、四つ目は友愛の実践、五つ目は他宗教への寛容さということであります。

猫の例を引用されていましたが、生きとし生けるものに命を見出すことは、どこか我が国日本の仏教にも相通じるところがあるような気がしました。次にマルワット先生にご発題をお願いします。



なりません。

マルワット 慈悲深く慈愛あまねき唯一神アッラーの御名において。全ての宗教の基本的なテーマは、平和と人愛であります。どの平和も、憎しみや、対立を説くものはありません。全ての平和は、対話と和解を通しての共存を説いております。全ての宗教者がその教えの道を生きれば、世界から紛争と対立は無くなるに違いありません。今までのところ、宗教を平和の武器として使っていないと言わねばなりません。

私は、この美しい歴史的な京都の都市に、平和を求めてやつてしまひました。日本の皆さまは最も平和を愛好し、平和を追求する人々だと承知しております。市の中に平和が流れているのでしょうか。また、仏の教えが皆様方を平和の愛好家にしているのでしょうか。仏こそ、平和と愛情と自己犠牲と憤りを体現された方であります。自らの快適な生活を犠牲にし、人類の苦難を身に背負われたのであります。そして、平和と権力と隸属から世界を解放するために身を擲げられたのです。

今回のテーマである「イスラムとの対話集会」について触れてみたいと思います。

イスラムという言葉は「平安」を意味します。平和と友好と理解を推進する宗教であります。生活の在り方を説いています。道徳的な価値を擁護し、人権を擁護しています。

決して儀式や、慣習や伝統だけを説いているではありません。人間らしい宗教であります。生活の在り方を説いています。道徳的な価値を擁護し、人権を擁護しています。

イスラムのうちの道徳的な暮らし方を説いています。コーランとモハメッド預言者のメッセージは、一国や、地域や宗教に止まるものではありません。全ての人類を対象としているのです。イスラムはすべての宗教を尊敬し、他の宗教を嘲笑したり、批判することを禁じております。人類の平和的共存の篝火をかざしている宗教であります。理解と対話を通しての平和共存を説いております。

モハメッド預言者は、イスラムを最も尊厳ある、平和的な礼儀をつくした形で説いてきました。彼の説いたその時代は、人命が軽んじられて、人々は退屈した生活を送っていました。力こそ正しいとされ、力の無い女兒は両親に生き埋めにされていた時代であります。隸属や奴隸、不倫や不義が横行していた時代でした。不道徳を社会から追放しようと、イスラムの原を開いたのです。自らがイスラムのモデルとなり、平和的な対話を通して、アッラーの戒律を守ることを説いたのです。流血に慣れていた部族を改宗しようとしたのです。ムスリムであれば神の預言者、アダムからモハメッドまでそしてトーラ、ザブル、聖書、コーラン、すべてを信じなくてはならないのです。

ですから、モハメッドは人々に三つの偉大な宗教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を説いて聞かせたのです。そして各國の元首や部族の長に使節團を送つて平和の条約を結び、友好協約を結びました。平和を探求し、対話を通して理解を模索したのです。モハメッドのメッセージは普遍的なものであります。正義の制度を作り、法の下に全てが平等であり、それぞれの権利が擁護される制度を作ったのです。最後の巡礼におけるモハメッドのサーモンは、人類に対するメッセージであります。白人が黒人の上に優越することがない、黒人が白人に優越することもない、アラブ人がアラブ人でない人に優越することがない、またその逆もあるいはないということであります。人の偉大さは、その人が慈悲を持っていますか、正しく生きているかによって決められるべきであると説いているのです。

残念ながら、イスラムが充分に説明がされていない為に、多くの地域で誤解されていると言わねばなりません。眞のイスラムを説くことが出来たならば、誤解や懷疑的な気持ちは排除されるにちがいありません。例えば「ジハード」、聖戦と呼ばれていますが、最近では大いに誤解されております。「ジハード」、聖戦というのは、罪のない人々を殺害することや他の土地、財産を侵すこと、人を奴隸にすること、またテロ的な行為を意味しません。

イスラムはその宗教の名において、罪を犯すことを禁止しているのです。「ジハード」とはどういうことを意味するのか。それは社会悪と戦うことを意味します。人の生命や名誉、財産、国に侵略の攻撃を受けたときに戦うこと、意味するのです。ですから、決してテロリズムと誤解してはならないのです。

善と惡との間の永遠の戦いであります。自己防衛の権利は市民社会においては、どの個人にも許されているのではないでしょか。イスラムの最初の歴史からお話します。預言者モハメッドは平和を愛好し、平和を推進してまいりました。平和協定をユダヤ人と、キリスト教徒と、異教徒とも結んだのです。そしてそれを守りました。敵を寛容に許し、大赦、恩赦を与えました。最悪の敵に対する恩赦を、ムカーフの征服の後に出したことは有名であります。このモハメッドのような恩赦は人類史上に例はありません。常に慈悲と教しのモデルと言わねばなりません。キリスト教徒もユダヤ人も異端者も預言者であるモハメッドを訪れ、モハメッドはマディナのモスクで彼らと対話をし、そしてそれぞれが、それぞれの方法で祈ることを推奨したのです。イスラムは寛容の宗教であります。力による改宗を禁じています。強要もありません。そのことは歴史が物語っています。ムスリムが何世紀にもわたつてある国、ある地域を征服した時も、国民を改宗することはしませんでした。イスラムを押しつけることは決してなかったのです。イスラムの統治のあとに、イスラム教徒はその国では少数民族でありました。イスラムはこのように寛容の宗教であります。コーランで神は人類に対しても、「人類は普くアダムとイヴの子孫である」と言っております。人類は兄弟であり姉妹であります。同じ人間らしい生活をし、生き残る共通の権利をもっているのです。コーランの中で神は「人類は神の代理人である」と言っています。「自分の最も良の創造物である」とも言っております。この神の最も良の創造物がムスリムだけではなく、人類全部に神の代理人だと指定されているのです。今日の引き裂かれた世界に、和解と平和を取り戻さねばなりません。その道こそ、仏とイエス・キリストとモハメットが辿った道です。

複雑な問題を平和的に解決していくなければなりません。でなければ世界は、危険に陥ってしまうのです。私どもは領土や国境、宗派を超えて地球市民として世界平和を達成しなければなりません。国内において、国外において、正義を行い、個人の利害、損失を顧みず、眞実と正義を行なうべきです。

人類は人体のようなものです。その一ヵ所が傷めば、体全体が痛みを感じるのです。その意味で世界中の至る所で苦難を経験している人々の苦しみを、私たちは感じなければなりません。そして私たちは、どんな艱難辛苦を超えても平和達成への努力をするという役割を果して行かなくてはなりません。私たち

は、共通の創造主によって作られているのです。どの名においても、神は神です。同じ両親を持ち、人類は同じ共通の運命を共有しているのです。イスラムは人命を聖なるものとして認めていました。モハメッド予言者が教えたように、一人の人間を殺めれば、人類すべてを殺めることになるのです。一人を助ければ、人類普く助けることになるのです。これがコーザンの教えでもあります。

京都は豊かな平和の探求の歴史を持つています。一九七六年、世界宗教者和平会議が初めてここで行われ、組織されました。世界の平和のために、大量兵器や核兵器を完全に禁止し、撲滅せなければなりません。これは全ての国家に適用され、例外を許すことがあつてはなりません。(一九八〇) 一月九月十一日のニューヨーク市とワシントンDCにおけるテロリストの行為を糾弾し、ムスリムの一人として、アメリカ政府とアメリカ国民に対して同情の念をお伝えします。テロリズムに対する国際社会を支持します。テロリズムの原因をきちんと究明するべきです。そして社会の至るところで、それに対して手を打つべきです。

時に、貧困がテロリズムを生むことがあります。貧しい人々はテロリストに、テロ行為のために雇われることがあるからです。ですから貧困を撲滅して行かねばならないのです。明確に言いますと、イスラムはあらゆる形のテロを容認することなく、あらゆる形のテロを糾弾します。人間の尊厳を信じ、人間の生存、平和と人類の権利を擁護します。イスラムは、カースト、信条、皮膚の色、宗教を問わず、侵略と戦争に反対し、弱者を守る宗教です。

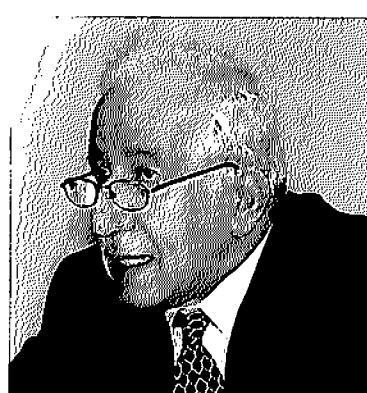
この時にテロと不公正と搾取に対して断固として戦うことを誓いましょう。日常に、平和と静寂と兄弟愛をもたらすべく、苦難、対立のない世界を作り、後代に受け継ぐべく努力をしようではありませんか。対話を通じての和解を私どもの信条として選ぼうではありませんか。

## 仏教と共通の価値を持つイスラム教

吉澤 今のお話の中に後のディスカッションでご質問させていただこうと思つていました「ジハード」、「テロリズム」の話が出てまいりました。人類は神の代理人、最良の創造物であるから、人類の権利を守るのである。このような人

類を抹殺するようなテロリズムは決して許すことができないという、強いお辞葉がありました。マルワット先生は今回、アフガニスタンの隣にあるパキスタンからお見えになつております。今回のテロでも非常に心を痛められた方だと思ひます。

それでは二番目に、ヨルダンのケイラニ先生にご発題をお願いいたします。



ケイラニ テロリズムの問題を分析

し、そしてイスラム世界からお詫びをする必要はない。我々は自分たちの宗教を誇りを持っており、我々の宗教を高貴なものとして、心に大切に思つていることを皆さまに申し上げたいと思います。

私たちの立場、考え方を述べるに当たり、皆さまにお詫びを申し上げるものではないということを、ご理解頂きたく思います。

私は、国際イスラム評議会の代表として、昨年の九月十一日の事件以来、私どもの宗教であるイスラム教が誤解され、中傷され、多くのイスラムの信者たち全体にとって甚大なる影響を及ぼしているという観点からお話しします。特にイスラム教に対する固定観念、イスラム教を悪魔化し、またメディアが誤解するような情報を与える、イスラム教に対して最も悪いイメージを与える、まるでサターン（悪魔）であるかのごとく、イメージを植え付けているということがありますので、このよう背景を考えますと、特にイスラム教に正しい理解をもたらすことが大事であると思ひます。

イスラム教と仏教は一つの共通の価値をもつています。それは、平和をもたらす為に、理解という共通の橋を架けて、慈悲の心を持ち、気高い精神を深めていくことです。

吉澤さんが、日本がイスラムの世界から遠いとおっしゃいましたが、私はそうは思つていません。私は最初にアラビア語で出された本のコピーを持ってい

ますが、これはエジプト学者の本であります。一八九〇年のものです。彼は、エジプトからインドを経て、船で日本へやつて来ました。そこで、彼は当時の日本人と、日本の為政者と出会ったのです。これは十九世紀末のことです。

私は未だにエジプト人たちのことを覚えています。朝八時に、学校の教室に入る前に、国歌を齊唱します。次に詩を唱えます。「帝は、我々の土地の父であり母であるべきものである」というものです。

このように愛國主義的で、しかも日本の象徴である天皇がイスラムの世界に登場します。しかも六歳から九歳という小学生の低学年で、心を形成する非常に重要な時期に「帝」という言葉が使われたことは、影響があつたことを物語ります。

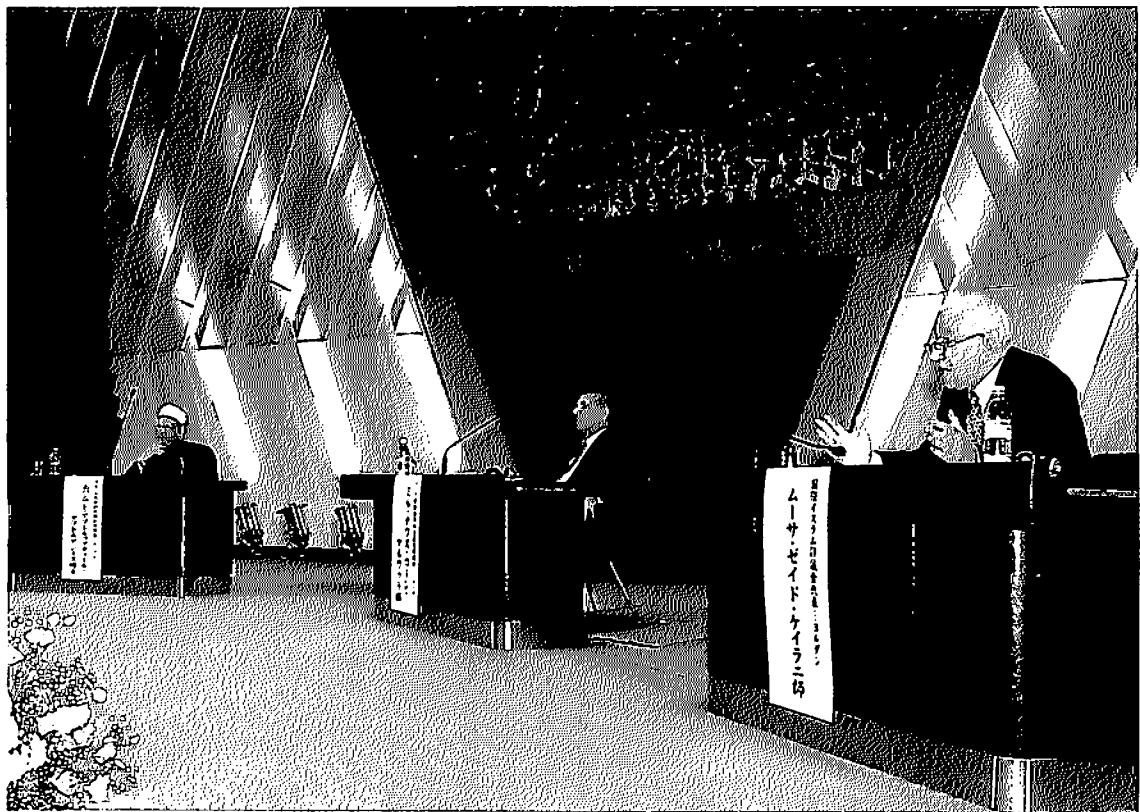
仏教徒、天台宗、これは宗派ではなく、組織、人々の集まりが、このイスラムの世界と他の宗教との間の緊張緩和という橋がけをする役割は非常に大切であると思います。

日本のメディアは、このような会議を通じて教えられるでしよう。今まで、非常に保守的なアメリカの教会は、ムスリムに対する不正義を批判しませんでした。このような保守的な姿勢、伝統というものがヨーロッパの教会にもあります。バチカンもそうであります。私がこのようなことを申し上げることをリーザーにお許し頂きたいと思います。十日前、私は、ロンドンで同じ会議にリーダーと出席していました。西側の教会は、ムスリムといくつかの国におけるムスリム教徒に対する攻撃を批判しませんでした。アルバート・フリードランダー師が来られていますが、ユダヤ教のラバイ司祭たちもムスリムがこのような犠牲に遭つた時にそれに反論しません。ムスリムの世界の人々は何とかして、偏見もなく差別もなく、中立的な人々が橋を架けて欲しいと願うのです。

ですから、日本人と日本の仏教徒がこのようなお仕事に力を注いでいただきたいと心から願うのであります。日本人は正直であり、心を明らかにし、客観性を持っているということ。天台宗の仏教徒たちは、このような平和の和解のための作業を手伝つてくださることを願つております。日本人は信用され、中立であると考えられております。その意味で私たちイスラムの世界で生きている者たちの心の中に日本人の良いイメージが意識下に埋め込まれていています、みなさまに申し上げます。

イスラム教は他の宗教を理解し、また理解されたいと願つております。イスラム教といったとき、さまざまなレベルで理解されます。イスラムは他の宗教を大切にし、他の宗教の持つイデオロギー、教義を大切にします。同時に他の宗教もイスラム教を大切にして欲しいと願います。それにもかかわらず、イスラム教徒は、異教徒として蔑まれている時があるのです。イスラムの、神のメッセージを伝える宗教としての性格が理解されていないのです。神の名を語るもの、あるいは異端者、異教者と言われることさえあります。もう一つの誤解のレベルは、色という壁障があります。これは多くの国において、肌の色が問題になるのです。イスラム教はすべての信者と神のメッセージを通じての信仰の友愛というものを与えているのです。ですから一つの宗教、イデオロギー、教義あるいは人種、家族、町、そういうものへの忠誠心を超えてもつとより高いもの、それは人類としての繋がりというもの、つまりイスラム教がすべての人与えるものに高められることを実践してきているのです。イスラムの預言者はアフリカ人も、アーリヤ系の白人も一緒になって祈り、信仰に加わるのです。アブルハタその他の人たちに人間的なアプローチをもつてイスラム教徒としての生き方を説いているのです。

第三の理解は、人種と人種的な背景、ムスリムの中にあるものを望むべきです。アフリカ人である黒人や、アーリヤ系の黒人は同じ祈りの中で、同じ立場、平等性を与えられています。同じ価値の体系を持ち、同じ権利と責任を分かち合っているのです。多くのレベル、水準の中でイスラムが説くのは、イスラムという価値の体系の一つの構成、要素である當の障壁をなくすことであり、そのための理解をもたらすことであります。その意味で敬虔であること、慈悲深いこと、他人に対する奉仕というものが、人を判断する唯一の基準となるのです。イスラムにおいて女性は、他の宗教では長く否定されていた権利と平等を与えられています。イスラムによると人間の尊厳、男も女も子供たちも人間の尊厳を尊敬するということが、教義の重要な側面であります。それは人種や宗教や言語の違いを超えて尊重することであります。つまり政治の権利も守らるべきであることを意味しています。それは言論の自由、政党結社の自由も、仕事をする権利も同じように大事であります。何故なら、貧困と失業というも



のが人間の尊厳の敵であるからです。人間の尊厳こそイスラムの讀えるものであります。まとめて申しますとイスラムの理解には天台宗の皆さまが今回の會議において提供されているような機会が必要であります。皆さまがここに集まつて下さったことが、平和と調和を我々の世界にもたらす要です。しかし、我々の大変な大事なこの時にも、無実の子供たちが多くの場所で毎日、虐待され、殺されています。しかも、信仰が違う、人種が違うというだけで、犠牲になつていることこそ、考えなくてはなりません。

そうすると、ジハードの話が出てきます。聖なるジハードがあり、不正なジハードがあります。これはイスラムの側からのお詫びを申し上げるのではありませんが、これは正しくありません。イスラムはテロや戦いを称赞しません。コーランの中から詩を読んでみます。それはイスラムの本質を表す唯一のものであると思います。XやYというものがイスラムを表すのではなく、コーランが言っているところが当にイスラムそのものであります。イスラムは自己防衛の行動、つまり戦うことを許しております。しかし自己防衛は、人間性の中にまた動物の中にあり、昆虫の中にさえある本能的なものであります。この自己防衛はすべての人の中にその遺伝子の中に深く埋め込まれたものであります。イスラムは戦いをしたいわけではありません。どうしても避けられない最後の時に、本当に他の手段では解決できない時のみ、イスラム教徒は戦うのです。モハメッドが前にいいましたように、イスラムは平和の宗教であり「イスラーム」という言葉 자체が平和を意味します。神は平和を意味し、平和は神のメッセージであり、天使のメッセージであります。これは乐园をもたらす宗教であり、アラビア語の「セルン」という言葉の語源、これは「平和的である」という意味であります。イスラムの目的と、イスラムを表すものであり、平和的で親切なイスラム人は、どんな人種であれ、どんな場所に住んでいるイスラム教徒もそうです。イスラムに関係がなくとも、それらの人に戦いを挑むことはありません。つまり宗教戦争などによって、イスラム教徒が非イスラム教徒に戦いを挑むことはありません。何故ならイスラム教徒は深くその信仰、信条によつて戦うことは、神に許されないからであります。バカラの二五七でありますが、アッラーから明らかに言われているように、神を信ずるものはもつとも信頼できるものとして、イスラムのダウワにおいて「力を使うことは禁じられて

いないが、それは最も平和的な手段を用いて行なうことがまず先である」と言われています。スーの「六の二五において「神は英知と美しい教えを持って、最も慈悲深い神として過去から現在、未来へと導きをしてくださる」。そしてコーアンは「不正義がお前たちの上に与えられない限り、争つてはならない」と言つております。

## イスラムのより深い理解のために

吉澤 ありがとうございます。

先ほど三人の先生方と打ち合わせをしている時に、先生方が非常に喜んでいらっしゃったのは、千三百人の日本の宗教者の方々が、自分たちの訴えに眞面目に耳を傾けてくれる、こんなことはヨーロッパやアメリカでは無い。やはり平和の国日本であるから、我々の声に耳を傾けてくれる。だから非常に喜んで今回参加させていたいたいということをお聞きしました。おそらく先生方は言いたいことが一杯あって、一人二時間くらいはお話をされるのではないかと、制限時間を設けました。一方、私も主催者側から頼まれていることがあります。この後のディスカッションにおいて、今日来られている聴衆の方々の立場に立ってイスラムについての質問をするよう言われております。イスラムの一口・ハのような質問を先生方にお聞きする事になりますので、先生方には失礼に当たりますが、いくつか私どもが、普段からイスラムを見ていて、どうしてだろうと思うことを先生方に投げかけたいと思います。ただし、時間がございませんので、お一人お答えいただくのは五分程度、ポイントをまとめて短くお応え頂きたいと思います。非常に無理な注文ではありますが、よろしくお願ひします。

最初に、イスラム教といいますと、必ず一日に五回メッカに向かって礼拝をされます。これをあわせまして五行（五つの行）と言うようですが、イスラム教の「五行」とは、いつたいどのようなものであるのか、について、まずアブルアジーズ博士に教えて頂きたいと思います。

アブルアジーズ このイスラムのメッセージをまとめますと、アラビア語で四語、または五つの言葉で表現することができます。「アシュハド」私は証します。これは「アッラー以外に神はなく、モハメッドはその予言者なり」という言葉です。この言葉がイスラムの最も重要な言葉です。「アシュハド」私の心と体で、また私の知能をもつてこれを証言します。では何を証言するのかといいますと、「アッラーは唯一神であり、宇宙は一つであり、人類は一つである」ということです。ですからこの最も大切なことを知ることができれば、人類の中の差別や闘争がなくなるのです。

次にこの証言から解ることは、モハメッドが預言者であるということです。以前からの預言者たちがいたこと、そして以前の預言者たちを尊敬しつつ、そ



の預言者たちが行つたことを最終的に保管するということです。これは最終的に一人であつても、最後の預言者であります。ムスリムというのは、人類に与えられた最終的なメッセージであり、その最終預言者を信じるということです。ですから、私はアッラーが唯一神であること、一つの人類に対して、その唯一神を崇めるということ、これがイスラムの精神であります。ですから、現在の私の心、知能をもってそのことを認識することです。

次に、礼拝ということは、頭を下げること、体と心をもつて示すことであり、自分の四肢で、体全部で、神を崇めるということであります。ですから礼拝というのは、自分の体全体を通じて、この宇宙を創造された神を崇めるのであります。

次に「断食」があります。これは色々な宗教の中にもあります、これは自分の心、そして自分の体を淨めることであります。全てのことから、自分の心と体をきれいにする。一ヶ月間ラマダーン月という間に断食をし、様々な欲望から身を淨め、様々な罪から身を清めるのです。これが「ラマダーンの断食」です。これは一つの社会の中で行われる崇拝の動きの一つであります。

そして「巡礼」であります。これは自己への利益をすべて追い払い、一つの社会を作っていく、決まった時間に全ての者たちが一つの場所に集まることが重要であります。ですから、イスラムの呼びかけは、あなた方の心、自分たちの知能に達するということで、イスラムのメッセージは、一つの神、一つの人類において平等である全ての人々は、一つの神によって創られた一つのものであるというのが、我々の認識であります。我々自身を清め、一つの社会という存在の中で、イスラムが重要な意味を持つてくるのです。最終的にイスラムは一つの地球、一つの惑星の中に住んでおり、様々な民族が発展を示していく中で、それぞれの特徴を生かして、一つのものを構成するということ、そして一つの地球を創っていくことが、イスラムの唯一性であり、一番重要なことがあります。

次に「ザカート」というものがあります。これは「喜捨」のことです。自分のものの中から社会に寄与するという意味です。お金は人間にとつて大切なものです。自分にとって大切なものを差し出す、そして個人に所属するものからそれを出して、社会の良きことに使うことが、イスラムの「喜捨」という意味

です。「ザカート」は個人が社会のために貢献することです。「断食」と「喜捨」の二つを併せて自分の身を清めていく、そして個人から社会に尽くすということがイスラムの教えです。

吉澤 次に、会場の皆さま方の立場に立つての質問ですが、特に欧米の人権運動家から、イスラム教というのは「ヒザール」という女性の顔に布を巻いて顔を隠せたり、男は四人まで妻帯できる、これは女性の人权無視ではないかとよく言われます。これについて、まず女性にヒザールをかぶせる習慣について、ケイラニ先生からご説明をお願いします。

ケイラニ アラブやイスラム、ムスリムの世界では私たちの文化というものがあり、私たちのアイデンティティがあるのです。政治、社会も特有なものとなっています。ヨーロッパ諸国が、私たちの領土を占領した時代があつたために、私たちの社会に、特定の行動パターンが出てきたのです。また特定の規則が出来上がりりました。これは、例えばお化粧をするようなものであります。一つの規則、そして次の規則が次々と作られていったのです。外国の占領によって、外国からの影響が、私たちの顔、国民としての顔、宗教としての顔の上に厚化粧を施していくようなものです。今、アラブ人の女の子とパリジエンヌは服装や行動について識別、区別することはできません。私たちのアイデンティティーに因して、アラブのアイデンティティー、イスラムのアイデンティティーに新しい意識が目覚めています。すなわち布で顔を覆うような習慣が一個ずつ取り除かれています。私たちの新しい顔を出そうとしています。私たちの本当の肌の色、私たちの本当のアイデンティティーを表そうとしているのです。

また、女の子や女性の顔を覆う布「ヒザール」というものは、アイデンティティーの象徴であり、そして誇りの象徴でもあります。日本の場合、女性が着物を着るよう、フリードランダー先生はラバイであるので帽子をかぶつていこと、サン・テック・リー師の白い高い襟は、カトリックの高僧であることを示すのと同じです。それぞれ私たちは特有の文化に悩んでいることを示して

いるのであって、私たちは文化的に、イデオロギー的に他から押さえられることが好みません。私の妻も来ておりますが、彼女も「ヒザール」をかぶっています。それは、それなしに外を歩くことができないわけではなく、「ヒザール」をつけていることで、イスラムの女性であり、文化や遺産を誇りに思っていることを表しているのです。いわば兵士の旗のようなものであり、自分が何處に属しているのか、自分のアイデンティティーを示しているものです。非常に崇高な聖使に所属していることを意味しており、アイデンティティーの象徴であります。

それから、「一夫多妻」に関してですが、コーランは、四人まで妻を持つてもよいと書いています。しかしながら、皆を平等に扱うこと、全ての側面において平等に扱うことが大切であると規定されています。食事も同じように出し、家も与え、職はみな平等にするのであります。しかし必ずしも四人持たなくてはならないということではありません。私の妻は一人であります。全てのムスリムが四人の妻をもつていいわけではありません。そもそもの考え方としては、女性が病気になり子供たちの世話をできなくなつたり、夫の為につかえることができなくなるかも知れない。そのような場合において、イスラム教としては、女を買うことを避けるために一夫多妻となつたのです。我が国はイスラム教の国であります。法律によりますと、結婚するなら判事が証書を与えるのですが、第一の妻が病気になつた時はその妻自身が、第二の妻をもらうことを承諾するのです。そもそもの考え方としては、戦争や災害で男性が死んですることに対して、イスラム教徒は女性に保護を与えたいと思っているのです。第一次世界大戦、第二次世界大戦であまりに多くの未亡人が発生したので、一夫多妻となつたのであります。

このことは国連でも問題になりました。なぜイスラムは男女に対して平等でないのか。平等であることが重要であるのに、どうして一夫多妻制なのか。他方、一妻多夫はどうなののかと、預言者モハメッドの時にも同じようなことが聞かれました。ある老女が預言者に「神を感じているが一夫多妻制には、それなりの理由があるのでしょう。では神に聞きたい、一妻多夫制はどうですか」と尋ねました。



「この壺の中から自分の水だけを取り出しなさい」と。しかしそんなことが出来るはずがありません。液体が混ざってしまっては、分けることはできません。

万能の神は「妻多夫制を許さなかつたのです。四人の主人がいれば、だれがその子供の父親なのかわからぬ。イスラムでは結婚は宗教であつて、聖なるもののです。イスラムの觀点では、決して矛盾がないわけではありませんが、主人の義務として妻を養い、子供の養育があります。そして、夫が亡くなつても財産権の一部は妻にあります」ですから「夫多妻」でありますか、きちんと妻に対して保護が与えられているのです。

イスラム教において、誇りに思うことですが、きちんと妻を持つために、そして妻以外と関係を持たないために、「夫多妻制」があるのです。

吉澤 これだけ厳格に「妻に対する平等になせ」と言われても、日本人の我々サラリーマンとしては「無理だな」と気が重くなりました。それぞれの宗教は、その国の風土、お話にもありました戦争による未亡人がたくさん生じ、その未亡人たちの面倒をどのように見るのかなど、非常に合理的な発想から生まれていることが、よく分かります。

今度はアブドルアジーズさんにお聞きします。ムスリムの方々はお酒を飲まない。そして豚肉を食べないという決まりがありますが、これは何故でしょうか。

アブドルアジーズ 第一の答えとして、例えば、皆さんが、医者にある食べ物を食べてはいけないと言われたとき、それについて不満には思わないのではないでしょうか。体に悪いのでそれを食べてはいけないと「われば、医者に言われたことを守るでしょう。これと同じ事で、唯一神アッラーは全知全能の神であり、すべてのことをご存知であるため、我々の健康を考えた上でこの様な規則を決められたのです。宗教の中にはこのような命令がいつも存在するのです。ですからムスリムが酒を飲むこと、豚肉を食することを禁じているのは、唯一神アッラーの命令であります。要するにこれらのは、人間に害を与えると理解しているのです。

働くかさなくてはなりません。理性は常に働いていて、眠っているときだけがその例外でしょう。

「頭脳」というものは一日中動いています。酒はこれに影響を与えます。酒を飲むと「酩酊」というものが出てきます。「酩酊」は理性に非常に害をもたらします。このように「理性」を麻痺させるようなものはいけないのでですから、我々は何世代にわたって、酒を飲むことを禁じているのです。

豚肉は、過去、非常に寄生虫が多く、腐りやすいものでした。医学的見地からも検討されました。このような意味合いから、体に悪いものを止めたものでありますと理解できます。

この問題は、唯一神が定めたものであるので、我々はこのことについて議論はしません。

唯一神が定めたものであるから、我々は酒を飲まないし、豚肉を食べないのです。

## 世界平和の実現に向けて

吉澤 日本の宗教者の皆さまにとつては極めて耳の痛い話がありました。ムスリムが酒を飲まない理由がよくわかりました。

今日の集会はシンポジウムも、宗教者の集まりですから、あまり政治的な問題には触れないと思っております。ただ一つ、テロの問題に関しては、どうしても聞きたいと思っております。例えば、イスラムの世界で戦争やテロが起るたびに「ジハード」という言葉が使われます。湾岸戦争ではフセイン大統領が「ジハードだ」と言った。アフガンではアルカイダでムサマ・ビン・ラディンが「これはジihadだ」と言った。パレスチナではハマスが「ジihadだ」と言う。しかし、先ほど、ケイラニ先生のお話にあつたように、「ジihad」という意味は少し違うとおっしゃいました。私共も「大ジihad」「小ジihad」といった少し違う意味を聞いております。

ケイラニ先生に、一つは「ジihad」の意味がイスラム教で正しくはどのようない意味があるのか。二つ目は、テロ事件の度に歐米のジャーナリズムは、イスラム原主義者の仕業だという言葉を使います。ニューヨークの同時多発テ

口の時も、「イスラム原理主義者」という言葉が出てきました。私ども日本のジャーナリズムも最初それに乗せられて、「原理主義者」という言葉を使いましたが、やはり違うのではないかということで、途中から「イスラム過激派」という言葉に換えました。「イスラム原理主義」というのは、もつと別の意味があると聞いています。他の言葉で言うと、「イスラム復興主義」や「イスラミズム」と言うものだと聞いております。では本来の意味での「イスラム原理主義」とはどのようなものなのか。この一点について教えて頂きたいと思います。

ケイラニ テロ攻撃というものが、イスラムの名前によって行われることを私は非難します。

最初の非難はサウジアラビアのイスラム本部から参りました。そしてカイロのアズハル、ヨルダンから非難が参りました。それはすべて昨年の九月十一日の同時多発テロ攻撃が無実の人、無辜の人に対して行われたことを非難し、これは聖戦「ジハード」ではないと言ったわけです。

「ジハード」には二つの意味があります。一つは「努力をする」という意味です。戦うことはジハードの一つの現れです。より大きな表現として、より大きな「ジハード」は個人が悪事を働くとするその心の働きに抵抗するという意味です。ですから、イスラムが「惡」という性質に対し戦うことを讀えますが、人が戦う小さな意味での「ジハード」があります。その意味で「自己防衛」があります。しかし自己防衛としての「ジハード」を行使する事に関して、コーエンの中からたくさん引用できますが、暴力を用いて自らの教え、自らの宗教を実行することは、許されないのであります。イラクが「ジハード」と呼んだことがあつたとしても、私はそれをジハードとは認められません。今回のご参会者の中には、私よりもイラクのことをよく理解されている方がいらっしゃると思いますが、イラクの政権は「世俗政党」と「世俗党派」であつて、この戦いはイスラムによる戦い、またムスリムによる戦いではないのです。ですから、これは「ジハード」とは言わないのです。しかし領土的野心があつて、イスラムの領土と考えられるものを侵す場合に対する自己防衛という側面があります。

ハマスの表明をみると、エルサレムで起つた攻撃、自爆攻撃がエルサレムのヘブライ大学で起つりました。

昨日、私は手に湿疹ができたので、ホテルの医師の診察を受けました。それで何かクリームを塗ればいいのかと言うと、医師は「これは血液の循環から出ているので、抗生素を飲む必要がある、感染を抑えることによってこの湿疹はおさまりますよ」と言いました。このことを例えますと、何かより深い原因があつて、例えば領土を占領されるというような深い原因があつて、ハマスがそれに対して何か攻撃をしてくる。この攻撃というのは、私の手の発疹のようなものであり、深い原因というのは、イスラエルが、アラブの領土、パレスチナの領土を占領しているという事です。イスラエルによる隣国への、特にパレスチナに対する侵略が根本原因であると思います。ですから、我々が見ているものは單なる症候的な現れであります。しかしそこには深い原因があるので、パレスチナ人は、自殺をしてまでも攻撃することを決意しております。

アラブ人とパレスチナ人は、イスラエルと五十年も、実際は百二年間争っています。しかし、過去においてはこのような自殺的な爆弾攻撃をするようなことは一度もありませんでした。アラブ人とパレスチナ人の行動は、いわば神風文化、つまり自らの命を犠牲にして日本人が神風攻撃したような、命を惜てて國を守り、領土を守るという文化、手法が使われていると思います。これは日本がアラブの人々に与えた影響かもしれません。時に一つ一つの暴力行為、あえて暴力行為と呼びますが、その報復に二十倍ものイスラエルの空軍による攻撃、またイスラエルの重装備をした軍の攻撃、F16による攻撃が行われています。そして一トン爆弾を落とされる、こういったことが行われています。ここに新聞報告がありますが、軍が攻撃目標ではなく、パレスチナ難民の住居に対して一トン爆弾を落とし、何百人の人が亡くなっています。もう一つ、コフィー・アナン国連事務総長は「マッドベルト」という村に激しい砲撃が加えられた。自己防衛は許されるものであるが、泥で作つた家の村に激しい砲撃を加えるということは許されることではない」と言っています。

ですから、平和的な話し合いをして領土問題が解決できないときにはこのような暴力によって自己防衛をし、またそれに対し激しい攻撃が加えられるようなことが起こつています。従つてイスラエルの軍によるパレスチナの土地

の占領、シリアの土地の占領、エルサレムの占領を終わらさねばならないと思います。

**吉澤** 連日、新聞を貰わせております泥沼の中東紛争です。仏教国日本には、「恨みをもつて恨みに報いれば、輪廻を断ち切ることができない」という教えがあります。日本人にとっては、どうしてそこまで憎しみあうことができるのかと理解できない部分がありますが、本当にケイラニ先生が仰るようにどこかで話し合いの糸口がもたれ、和平が一步でも進めばと思います。

以前、バレスチナ情勢がここまで悪くなる以前に、京都で世界宗教者平和会議（WCRP）の中東会議が開かれ、バレスチナに住むキリスト教、ユダヤ教、

イスラム教の代表が一週間近く和平のための話し合いを持ったことがあります。この時にユダヤ教のラビが休憩時間に京都市内を散歩されて戻って来られて、非常に感動したと仰っていたのが記憶に残っています。自分の住んでいたエルサレムと比べて、この京都を歩くと、神社はある、仏教寺院はある、キリスト教会もある、いろいろな宗教が静かなこの自然の中で平和共存している姿を見て、本当に羨ましく思つたと、このラビは仰っていました。会議の最後にバレスチナのイスラム指導者の言われた言葉が記憶に残っています。日本に何をして欲しいのかと聞いたところ、「バレスチナのイスラム指導者からみる第一に、日本は世界で唯一の被爆国である。第二に日本は、戦後、軍備により、我々のモデルである。第三に日本は、お金を使わずに奇跡的な復興を遂げた国であり、我々のモデルである。第四に日本はキリスト教でも、ユダヤ教でもない。平和を愛する仏教の国である」とばわれ、「イスラムに偏見をもつ欧米は、何がある」とイスラムを悪者扱いする。

— 日本は独自の立場で中東和平の調停役を果たして欲しいと訴えて帰つて行かれました。

— この世界平和実現に向けて、異



文化的多様性の承認、違う宗教者がそれぞれの宗教を尊重して対話し、理解を深めていくことは非常に難しい事です。

最後に、三人の先生方を代表して、マルワット先生より、イスラムから日本の宗教者、特にここに来られている千三百人の宗教者の方々に、どのようなことを期待するのかということを、一言締めくくりにお願いします。

**マルワット** 皆様方に申し上げます。いろいろお話をありました。そして日本の宗教者が何をすべきかと聞かれても、なかなか難しいことです。日本の皆さまが答えていただかなくてはならないことあります。

何を期待するのか、提案させていただきます。

日本の方々は平和愛好家であります。平和を愛するばかりではなく、探求されている。胸襟を開くオープンな頭と心を持っていらっしゃる。深く物事を研究し、決断される。スローガンやプロパガンダには左右されない。日本国民は非常に実践的で、実際的です。働く意欲、意志を持っている。西洋とイスラムの間には橋がありません。日本の皆さまこそ橋になつていただきたい。色々な宗派の間の橋になつていただきたい。すべての宗教の共通項を見出し、それをすべての宗派に贈り物として出していただきたいのです。宗教というのはすべて美しい花である。美しい宗教を集めれば素晴らしい花束ができる。日本は仏教について深い造詣を持つておられる。寛容の教えであります。私は仏の話をプレゼンテーションでしましたが、仏教徒は、平和に大きな役割をお持ちだと思います。そして、偏見のないアプローチをとつていただけるものだと思います。偏見のない方法で、橋を築いていただきたい。イスラムと他の宗教と西洋との間の橋頭堡を築いていただきたいのです。西洋は、ユダヤ教もありますが、ほとんどがキリスト教です。ですからイスラム教との間に橋がないのです。ムスリムは神と神の使徒、神の天使、神の書かれたすべての書物を信じています。私はすべてのトーラ、仮の本も読まなくては、ムスリムとは言えません。他の預言者を認めなければムスリムとは言えないのです。ところが、残念ながらキリスト教徒は、モハメッドに信奉しない。私どもはモーゼも信じますし、イエス・キリストも信じます。やはり対話が必要だと思います。すべての宗教の勉強をしていただきたいのです。コーランの中には、イエス・キリストの母マリ

アに関する特別の章があります。他の宗教の本にはこのようなことは無いと思います。それから、キリストの行った奇跡に関することも、コーランには書かれています。ですから、私どもはキリスト教を信じることもできるし、キリスト教の儀式を認めることも出来ます。宗教はアダムから始まり、預言者モハメッドで終わりました。それをもって、神は全ての宗教を創ったと言われました。

初めは、ムスリムも飲酒をしていました。しかしコーランで飲酒を禁止しました。ユダヤ教も飲酒を禁じています。ですから全ての宗教者と同じ円卓の席に着かせることは、日本の皆さま方です。全ての宗教の勉強をして頂いて、全ての宗教者を同じ円卓に着かせて下されば、人類への日本の貢献です。預言者レバ、ハラームと呼ばっていましたが、最初は禁酒していましたが、後に変えられました。これは人類の教えであつて、イスラムは人類に扉を開いています。キリスト教徒にもユダヤ教徒にも扉を開いております。日本の方々は、偏見を持たない、偏見を持たぬ心を開いた中道の方です。今回「宗教サミット」を開催していただいたことが、人類への貢献になるのです。ユダヤ教とキリスト教とイスラム教の間にはなかなか共通項が見出しづらい。日本の皆さまに助けて頂きたいのです。そして宗教者間の対話を通じて共通項を見出すために手助けをして頂きたいのです。人類が共存することによって、平和と寛容と理解を見出すことが出来るように、また尊厳を持つて人類が生きていくことができるよう、手助けをして頂きたいのです。もし、これを日本の皆さまにして頂けるのなら、イスラム教は他の宗教に介入してはいけないことになつておりますが、一緒に集まり、話し合うことを通して、人類に貢献することが出来るのです。今や戦闘機とか、爆弾では世界の問題を解決することは出来ないのであります。

ケイラニ師が仰っていましたが、正直に申しますと、キャンプディビッドの協約は問題を解決することにはならなかつたのです。すべての人たちを認めることが大切であります。キャンプディビッドでは時間のスケジュールが明らかにされていませんでした。パレスチナの国家を創りたいというのが、パレスチナの夢です。テロリズムと呼ぶあのような行為に至つたことは本当に不幸であります。キャンプディビッドでは、パレスチナ国家を創るスケジュールが、未だに与えられていません。いつまでも待つことは出来ません。罪のない人々が

殺害されているのです。流血をこのまま許すことはできません。パレスチナ国家の建設の時間が需要です。それをアメリカに働きかける努力をするべきだと思います。以上です。

**吉澤** マルワット先生から西洋とイスラムの架け橋になつてほしいと、ずつしりと重い宿題を頂いた気がします。今日は非常に有意義なシンポジウムになります。日本から遠い世界に思えていたイスラムが、皆さんにとつて身近な存在になったのではないでしょうか。「相手を知ることが平和への道」と仰いました山田座主の言葉に少しでも近づけたのではないかという気がします。やはり平和の構築を阻害する一番の要因は、「無知と無関心」であります。これを機会にイスラム世界の同胞が抱える問題、とりわけ中東・アフガンの紛争地の人々の痛みを日本人、日本の宗教者の問題として捉え、祈りと平和実現に向けて何が出来るのかを考えなければと思つております。三人の先生方、本日はどうもありがとうございました。

F O R U M

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

フォーラム テーマ「紛争和解と宗教」

## フォーラム



### ◎テーマ「紛争和解と宗教」

2002年8月4日 午前9時30分より  
京都宝ヶ池プリンスホテル 高砂の間

◎開会挨拶 宮澤佳廣 神社本庁渉外部長

#### ◎発言者

(ボスニア・ヘルツェゴビナ宗教間対話協議会事務局長)

イフェト・ムスタフィッチ(ボスニア・ヘルツェゴビナ)

(アズハル大学イスラーム法学部教授)

アブドゥラー・マブルーク・アッナンガール(エジプト)

(元世界宗教者平和会議国際名誉会長)

アルバート・フリードランダー(アメリカ)

(英國国教会宗教間協議会顧問)

マイケル・イブグレイブ(イギリス)

(世界宗教者平和会議国際委員会事務総長)

ウイリアム・ペンドレイ(アメリカ)

#### ◎コーディネーター

杉谷義純(世界宗教者平和会議日本委員会事務総長)

#### ◎司会 黒住宗道 黒住教副教主

#### ◎閉会挨拶 徳増公明 日本ムスリム協会副会長

(本文敬称略)

四日に開催されたフォーラム「紛争和解と宗教」には、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、諸宗教の代表的宗教指導者が登壇し、それぞれの立場から、宗教間の相互理解と協力を訴え、また紛争和解についての具体的な提言を行った。

コーディネーターを、杉谷義純 W C R P 日本委員会事務総長がつとめ、各宗教代表者も活動実績をふまえて発言。世界平和実現にむけて、終始、熱い論議が続けられた。

フォーラムの参加者は、国内の宗教者を対象としたが、当初百五十名を予定していたホテルの会場には、参加希望者が激増。急遽二百五十名に設定し直して開会された。

フォーラムの参加者は、国内の宗教者を対象としたが、当初百五十名を予定していたホテルの会場には、参加希望者が激増。急遽二百五十名に設定し直して開会された。

宮澤 昨日は「イスラムと平和」と題する記念講演、そして「イスラムとの対話と理解」をテーマとしたシンポジウムを通じて、日本の宗教者にとって、比較的遠い存在であったイスラムが、身近な存在として意識されるようになったのではないかと存じております。

本日はその成果を踏まえさらに一步踏み込み、宗教が、平和と紛争と和解に如何なる役割を果たし得るか、といったことを真摯に考えていきたいと存じます。

もとよりこの紛争という言葉の定義と、印象は、時代によつて様々異なるでしょうが、その根源は人類がこの地上に営みを始めた時から内包されていたのではないかと考えています。宗教、宗派を超えたこの問題の取り組みは、宗教の普遍的な価値といったものを高める意味を持つと存じております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

黒住(司会) それでは、フォーラムのコーディネーターをお務めいただく世界宗教者平和会議日本委員会事務総長の杉谷義純様に、フォーラムの趣旨説明並びに発言者の紹介を頂き、フォーラムを始めいただきます。

杉谷 今日は早朝からたいへんお忙しい中、大勢の先生方にこのフォーラムに御出席いただきました。心から感謝申し上げます。

今回のテーマは「紛争和解と宗教」であります。昨日は「イスラムとの対話」ということで、ムスリムの方々のお話をうかがい、私共の日頃感じている率直な質問をぶつけさせていただきまして、実りある成果を生んだということは、大変有り難いと存じております。それを踏まえ、現在起つてゐる色々な諸問題について掘り下げていければ、大変有り難いと思っております。ご出席頂きましたのは、イフエト・ムスタフィッチさんです。ムスタフ

イチさんは、ボスニア・ヘルツェゴビナの宗教間対話協議会の事務局長をお務めになつております。大変な紛争のさなかを、精力的にご努力頂きました体験を踏まえてご発言を頂きます。

続きまして、アブドゥラー・マブルーク・アッナッガールさんです。イスラム教学の総本山といわれるアズハル大学の法学部の教授であられ、いわゆるイスラムの基本的な立場から諸問題についてご発言頂きます。中東の問題では、日夜心を悩まされている方であります。

続きまして、アルバート・フリードランダーさんです。現在国籍はアメリカですが、ご両親がナチに追放されて、キーババに亡命され苦難の大変な半生を過ごされて、現在アメリカのラビ中央会議会員、キリストユダヤ協議会の役員として宗教対話はじめ、またWCRPの名譽会長も務められました。

続きまして、マイケル・イブグレイブさんでございます。英國国教会の宗教間協議会の顧問をされており、アイルランド問題という大きな宗教問題を抱えた地域においてれます。また日本におられたこともございまして、日本語もお達者ですが、今日は英語でのご発言だだと思ひます。

最後にウイリアム・ペンドレイさん。世界宗教者平和会議の国際委員会の事務局長を務めておられます。アフリカのシェラー・レオーネの内紛の調停など、危険な所へ自ら飛び込んで、幾たびも調停を図られたり、中東問題についても現地に足を運ぶなど本当に席の温まる暇もなく、世界中を飛び回つておられます。諸宗教間の対話の専門家であります。以上、今日のパネリストの五人の方のご紹介を終わらせて頂きますが、主催者いたしまして、こういう大きな問題に第一線で取り

組まれている方が、快く本日御出席頂きましたことを感謝申し上げながら、フォーラムに移らせていただきたいと思います。

## 民族紛争と宗教者

杉谷 それでは本日、まず最初にそれぞれ五名の方から自分の取り組まれている問題をご自分の宗教をバックボーンにしながら伺いたいと存じます。

歴史上、また現在も、紛争が起きたときには、それが宗教が原因であるとか、宗教の違いが原因であるとか、民族の違いが原因で紛争が起つてゐるんだと、そういう説明がなされると、我々は簡単に「あつ、そうなのかな」と理解しがちです。では、宗教を一緒にすれば解決するのか、民族と一緒にすれば解決するのか。そんなことはできるはずがありません。宗教者は、「この問題をどのように考えているのか、お話を頂きたいと思います。そして、宗教、また宗教者の、問題解決に対する役割と、果たすべき仕事、責任をお話を頂きたいと存じます。

二回目以降のご発言では、将来、紛争がない状態はどういうにしたら生まれるのか、いや、紛争はどのようにしたら起つさないで済むのかというところまで話し合ひができるれば、本当に実りある結果が出るのではないかと思います。

それではまず最初にイフエト・ムスタフィッチさんからお願い致します。

ムスタフィッチ 私は、ボスニア・ヘルツェゴビナのグランドミフティーの下で、宗教間の対話協議会の事務局長を務めております。既にご存じますがボスニアでは、二十万人以上のムスリムの人々が殺され、千二百以上

のモスクが破壊されました。これらの惨禍、また残虐なことはセルビテ人、クロアチア人という隣人たちによって行われました。これは私の国における悲しい現状です。世界の多くが、ボスニア・ヘルツェゴビナという国を、このイメージで見てています。しかし私は、私の国をその固定観念で見ていただきたくありません。ボスニア・ヘルツェゴビナには、世界の重要な一神教、すなわちカトリックそして正教、ユダヤ教、そしてイスラム教が、六世紀の長きに亘つて平等に和平共存していいた歴史があります。お互に隣人として住んでいたのです。これは示唆に富む歴史です。例えばサラエボには、ユダヤ教のシユナゴーグル、カトリックの教会、正教の教会、そしてモスクがお互いにあります。これがボスニア・ヘルツェゴビナの眞の姿なのです。

ボスニア・ヘルツェゴビナからムスタファ・セリフチそしてグランドミフティーをお招きいたしまして、誠に有り難く御礼申し上げます。残念ながらグランドミフティーはごちらに参れませんが、御挨拶、お祝いそして祝福を皆さまにお贈り申し上げております。

全能の神が私共にコーランの中で言つておられます。

「慈愛溢れた慈悲に満ちあふれたアッラーはもし、アッラーがその気になれば、汝らすなわちユダヤ教、キリスト教、イスラムの人たちを一つの民にすることもお出來になりましたはずだ。しかし汝らに別々の啓示を授けられたのは、それで生きてみなさい」というみ心である。さればお互に競つて善行に励まねばならない」私は、結局最後はアッラーの御許へ帰りゆく身であるから、その時アッラーは我々がこうして争い争いしている問題について教えてくださるだろうと思っております。

今回のテーマは、宗教は紛争解決にどのような役割を持つかという根源的な問いかけです。このテーマは、過去十年から十五年間に世界で最も頻繁に討議されてきました。しかし、私は基本的な発想が間違っていると思います。紛争が起き、そして停戦になってから、宗教が和解の後始末をするというのではなくて、宗教は戦争が始まると行動を起さなくてはなりません。つまり、「お前たちはお互いに人種が違うし、肌の色が違うし、宗教、文化が違うぞ」という一触即発の状況が出来る前に、宗教者が動くことができるか、ということです。

根本は、自らが望む形で相手を遇するということです。これは宗教的にもまた、現実的にも意味があるやうり方です。経済的、軍事的な、力の不均衡は紛争を及ぼします。弱者を強者が正しく扱うことは正義と慈愛に満ちた世界を創るために大事なことです

ます。イスラムは、少なくとも五つの基本的な権利を、少数民族また個人に対して認めています。まず生きること、そして自由であること、財産の権利、宗教を信ずる権利、そして個人、人間としての尊厳であります。たった五つしかないのですか?と言われますが、世界の強国たちは、この五つを認めなかつた歴史があります。もしこういったことが認められて来たならば、人類はホロコーストやあるいは、ボスニアの大屠殺や十字軍も、バ



山宗教サミ  
ット十五周年  
記念に参  
加させてい  
ただきます  
ことを心か  
ら嬉しくま  
た名譽に思  
います。また

多くの者たちは、再び回復したいと願っています。一九九一年から一九九五年にかけての破壊を、少しづつ復旧させていこうと望んでいます。ですから、この美しい京都に、そして「の大切な集まりにお招きを頂き、比較

この美しい姿を、私のみならず、ボスニア・ヘルツェゴビナの多くの者たちは、再び回復したいと願っています。一九九一年から一九九五年にかけての破壊を、少しづつ復旧させていこうと望んでいます。ですから、この美しい京都に、そして「の大切な集まりにお招きを頂き、比較

去十年から十五年間に世界で最も頻繁に討議されてきました。しかし、私は基本的な発想が間違っていると思います。紛争が起き、そして停戦になってから、宗教が和解の後始末をするというのではなくて、宗教は戦争が始まると行動を起さなくてはなりません。つまり、「お前たちはお互いに人種が違うし、肌の色が違うし、宗教、文化が違うぞ」という一触即発の状況が出来る前に、宗教者が動くことができるか、ということです。

そう考えれば、今まで、宗教がいかに間違つて使われてきたかということが分かるはずです。紛争の原因は、経済的政治的な利益追求が多く、民主的国家においては世論の同意民意がなければ戦争は出来ません。大量殺戮を行うためには、まず攻撃するものの心に敵意を芽

排他的な態度ではなく、受け入れる態度をもつて異なる文化を取り入れ、心を開くことが大事です。このことは歴史を変えていく可能性があります。唯一の必然はなく、選択肢があり得ます。武力による解決ではなく、対話を通じての解決が可能になるのです。歴史における紛争の多くは、強国、大国によつて起されました。少なくとも強者の側によつて起こされたのです。ですから、強者が経済的、政治的な貪欲を抑えて、対話と連帯と敬意と人権を全ての人々に認めることが大切です。

学習方法に「あらうます」、「は」は、相手の人たちを尊んで扱う態度を示す言葉です。しかし、この言葉は、相手の立場や状況によっては、不適切な表現と見なされることがあります。そこで、この言葉を用いて、相手に対する敬意を示す方法について、詳しく説明します。

まず、相手に対する敬意を示すためには、相手の立場や状況を考慮する必要があります。たとえば、年長者や上級者に対しては、「おおきに」と「おおきに」などの敬語を用いるのが一般的です。また、相手の立場や状況によっては、「おおきに」と「おおきに」などの敬語を用いるのが一般的です。

次に、相手に対する敬意を示すためには、相手の立場や状況を考慮する必要があります。たとえば、年長者や上級者に対しては、「おおきに」と「おおきに」などの敬語を用いるのが一般的です。また、相手の立場や状況によっては、「おおきに」と「おおきに」などの敬語を用いるのが一般的です。

最後に、相手に対する敬意を示すためには、相手の立場や状況を考慮する必要があります。たとえば、年長者や上級者に対しては、「おおきに」と「おおきに」などの敬語を用いるのが一般的です。また、相手の立場や状況によっては、「おおきに」と「おおきに」などの敬語を用いるのが一般的です。

レスチナの十年以上にわたる問題も、イラクにおける戦争も、そして同時多発テロも、またイスラエルでの自爆テロも無かつたでしょう。全能なる神は異なる人種や肌の色をつくつて、そしてお互いに協力するようにと言つておられるのです。ですからお互いの文化をより学び、習慣を学び生活の仕方や価値、冷静などを学んでいくことが大切です。そして学んだことを敬意をもつて認めるべきだと思います。何か学んでいく、他者を学んでいく、様々な意味で今回の会議そのものがこの原則に基づいた出来事であると思います。それはこのような方法だけでなく学校教育や、出版において様々な形で可能になると思います。

**杉谷** どうもありがとうございました。大変経験にござった中から一つ一つ説得力のあるお話を頂戴いたしました。

紛争解決の基本原則とは分けて考えねばなりません。多くの人たちが様々な不正義によって苦しんでいます。多くのムスリムの学者たちは、テロや暴力は、如何なる理由であれ許されないと声をあげています。暴力はイスラム的な問題解決とは全く言えません。

実際的な対話と交流を他のグループとの間で行なうことを個人のレベルでもグループ、組織のレベルでも行なうことが大切です。イスラムはこういった原則を堅持しております。ムスリムにおいて、もはや他の選択肢がなく自己防衛によって立ち上がり、自らの自由、財産、生息地を守るしかないと、イスラム教の原則である紛争解決

対話が成立する前提条件は、平等であるということをあります。両者が対等でなければ対話は成立しません。双方がお互いを認め合う、そして受け入れ合う、そして敬意をもってお互いを認めるということです。でなければ、対話ではあります。その相手を自分にどうしては対話ではありません。それは対話ではありません。その相手として受け入れ、認めるならば対話は成立します。宗教的な指導者は、紛争予防そして紛争解決に対して積極的にその役割を果たすべきであります。王和的に他者と共に存する宗教の教え、そして対話をもてて対話をし、お互いを認め合つて共生していくことを自らの教区の信者に教えていくことが大切です。次

卷之三

創造された日から復活の日まで与えられたものであります。主光の神はイスラムが全人類が現世での幸福、成功、発展の実現と、来世での天国を得られるようになると

そしてその平和と紛争ということを説明したいと思います。

みなさん、こんには。まず始めに、このよなな機会をうけて、いただきましたこと、十五周年のこの記念集会に出席できましたことを皆さまに深く感謝致します。

イスラムは、全人類を導くよう最後のメッセージとして与えられたものです。それゆえにこのイスラムについて、

イスラムではムスリムと非ムスリムとの差別をしてはならないと言っています。啓示宗教はその権利を尊重し、全人類との交流を勧めています。人間はみな平等す。

を行うように呼びかけているものです。ですから預言者は、み言葉にありますように万有への慈悲としてあなたを使わせただけであると言っています。

いう」とを保護しております。  
イスラムは、行うべきことはその良きことを行うとい  
う意味で、これはイスラム教徒のみにあるものではなく、  
全人間そしてまた動物・植物・全世界の存在する全て  
のものに適用されるものです。イスラムは生命の保護と、  
全世界が慈悲と友愛、平和と協力によって、全てのこと

みなさん、「んにちは。まず始めに、このような機会を  
を与えていただきましたこと、十五周年のこの記念集会に出席できましたことを皆さまで深く感謝致します。

イスラムは、全人類を導くよう最後のメッセージとして与えられたものです。それゆえにこのイスラムについて、そしてその平和と紛争ということを説明したいと思います。

イスラムは神から与えられた最後のメッセージとして創造された日から復活の日まで与えられたものであります。主の神はイスラムが全人類が現世での幸福、成功、発展の実現と来世での天国を得られるようとに

し、全人類との交流を勧めています。人間はみな平等であり同じ権利を有します。社会の秩序を乱し、書を与える者は処罰される範囲で罰せられるということで

す。イスラムでは同じ権利を持ち、すべての人が協力し合うことを勧めています。クルアーンに「人々よ、我々の男と一人の女から、あなたの方を創り、種族に分けた。これはあなたがたを互いに知り合うようにさせるためのものである。これは全人類が同じ男女の子孫であり、そして種族に別れたのは優越性のためではなく、交流して互いに知り合うためのものである。そして人と人の差は自分をはじめ人類とその文明のためになる良いことを行うことである」とあります。

### イスラム

は神より、全人類の良きことを目的として、人間同士が愛と協力と権利と、権利の尊重をしこれに基づいて人間の兄弟愛を持って結ぶものとしております。クルアーンは「ムスリムと非ムスリムを分けてはならない、そして宗教に強制があつてはならない」ということを言っています。人に信仰したくなない宗教を強制してはならない。これはイスラムの基本原則の一つです。宗教への強制がないのなら、人間は兄弟愛の交流しかないのであります。これを立証するためにイスラムは人類の善と幸福を呼びかけています。クルアーンに「今日、我々はあなたの方のためにあなたの方の宗教を完成し、あなた方に対する我の恩恵を全うし、あなたのための教えとしてイスラムを選んだのである」という言葉がありまます。イスラムは完全な恩恵と良きことをもたらすためになります。イスラムの範は兄弟愛による人間交流です。ですから信徒間同士、またその他のとの関係を平和に基いて行なうことが重要です。平和が紛争や戦争で壊されではありません。イスラム教徒が攻撃された場合には反撃はしますが、攻撃された程度を過ぎてはならないと教えます。クルアーンに「あなた方に戦いを挑むものあれば、神の道のために戦え。だが侵略的であつ

てはならない」とあります。ですから、イスラムにおける闘争は自己防衛でなければ、正当化されません。公正で

理性が認める方法でなければならないのです。イスラムは防衛する場合にも他の人々を巻き添えにしてはなりません。また理由もなく動物を殺したり、木や植物を伐採したり、礼拝堂での礼拝をしている者を攻撃してはいけないので、そしてまた、モハメット預言者は「老人や女性、子供を殺してはならない。祈り合って善事を行え。神は善事を行う者を好むのである」と言っています。兵士に対しても礼拝堂にいる人々を殺してはならないと言つております。イスラムにおける紛争や戦いは、やむを得ない状況に迫られて、はじめて決定されるものであります。しかし、その際でも建物草木、工場、水源、資源などの文明の基盤を守ることが重要で、ムスリムに直接的な害を与えるもの以外を撃つてはならないと教えていましたし、受けた害と同じ程度にして限度を超してはならないと教えています。たとえ紛争中に自制できず、その限度を超えて行き過ぎるイスラム教徒がいたとしても、それをイスラムに結びつけるものではありません。なぜならそれは宗教の規範ではなく、個人的な行動だからであります。個人的な行為は、他の宗教の信者にも見られるもので、イスラムだけのものではあ

りません。イスラムだけが特別なわけではないのです。イスラムは、節度を守り、人類の為にまた、すべてのムスリム以外のものたちのためにもある宗教です。人類の一般的な遺産として存在しており、現在まで、また復活の日までの歴史を通して人間文明を構築していくものであります。

### 杉谷

どうもありがとうございました。十分の発言時間を使わないとお守り頂きまして、感謝を申し上げます。

### フリー・ドランダー

私は、イフエト・ムスタファ・ツィチさんの言われたことを、すべて受け入れます。私はドイツのホロコーストの最初の頃を生き抜いた人間です。その後アメリカに渡り、マーティン・ルーサー・キング牧師と一緒に行進もしました。

### 昨日、マルワットさんが「私共は一体である」とですか

ら人類の痛みを体の一部として感じた時に、お互に対する愛情が生まれるのだ」ということを言われました。神を信仰することによって誠の道が開かれ喜びを持つて生活を営むことを教わります。ですから信仰の名において人を殺める、殺戮をするということは絶対悪だと言うことを知らねばなりません。これは私どもにとつての一つのキーノートだと思います。すべての宗教は、人類がすべてお互いがかけがえのない存在であるということを認め合つて、共存のうちに暮らすことを目指しております。聖書の中に預言者ミカの言葉があ

ります。「世の終わりの終末期に、神の家は全ての山の頂の上に築かれる、人は普くそこに集まる。そして民族がそれぞれ神の山に行こう。ヤコブの神の家に行こう。神の道を教わるために。神の道を歩むために。人は剣を鎌に換え、槍を鎌に換えることになる。再び、剣を他の民族に対するうち下ろすことがないよう、「戦」ことを学ぶことのないように」。ユダヤ人も、イスラム教徒も、それから多くの他の宗教者が、同じ山に集まっています。エルサレムでも同じであります。もう一つの道を尊重しなければ、私どもは頑張ってヴィジョンを失うことになってしまいます。

ここ比叡山に多くの世界の宗教が集っております。光の下に立ち足下に雲を見ることは素晴らしいのです。が、山から下りればまた闇が待っています。私共は光を讀え、善を讀えてまいりました。しかし、オーベンハイマーが「一万の太陽の光が、悪と闇をもたらす」と書いたように、世の中の悪を見つめる必要があるのではないかと思ひます。宗教が悪を認める事ができるか、それに対する判断戦うことができるか、マルワット師が昨夜言われたことを思い出します。師は「内面的な、外的的な悪に対する戦い」を宗教である」と言われました。また「人類は例えてみれば、自分の身体のようである」とも言われました。そのことを忘れることがあつてはならないと思います。

昨年、チエコのプラハで会議がございました。群生学の精神療法の父、ロゴテラピーの父とも言われるピート・ランケルさんは、アウシュビツでその療法を生み出したという話が出ました。彼は、監獄の中で隣の人が悪夢を見て叫んでいるのを見て、その悪夢から人を起こすべきか、それとも起きて何になるのか、アウシュビツの現実

に戻るだけではないか、それなら、まだ悪夢の方がいいのではないかと考へたといいます。

私どもの立つ大地を踏まえて考えるときに、世の中の悪にもっと目を向けるべきではないかと思います。世界中で貧困は益々酷くなっています。母なる大地は破壊されております。熱帯雨林も破壊され、オゾン層も破れています。人を憎む気持ちが宗教を退廃させてしまっています。この数日私は、同僚の諸先生、またイスラムの先生方から多くを学びました。そして、ユダヤ教の原理主義者のラナティスム救世主義を考えさせられました。彼らは、神の名においてユダヤ教の信仰をつぶし、イスラエルの中の平和の声をつぶしています。彼らは利口心の他何ものもありません。

同じようにイスラムの神も神聖でない戦争、邪悪な戦争を神の名において行うテロリストに心を痛めておられるのではないかと思います。対話の道を模索せずして正当を叫ぶ、その間イスラエルとバレスチナの罪のない子供たちの血が、聖なる地に浸透していくのです。ムスリムとユダヤの親たちは失われていく世代のために涙を流しております。

カーレン・アームストロングという私の友人が最近アメリカで書きました。「テロリストたちの焦燥感は解らないではない。しかし罪のない人たちを殺戮する自燃者を許すことはできない。天国を約束して子供たちに殺人を教えるのは、許せない」。また、氏は新しいイスラムに対する憎しみに対してきちんと話し合う必要があるということも言されました。私は一九六六年以降ロンドンに住んでおりますが、アメリカでは、あまりイスラムに対する人々に言及しませんでした。ヘブライ大学の自燃者は占領の象徴だと言わましたが、その象徴 자체も悪

であると言わなければなりません。

手の痛みは抗生物質で治すことができるかも知れないが、心の中の痛みは簡単には癒すことは出来ません。

終末の病にイスラエルもパレスチナも陥ってしまっているのです。

政治よりは、宗教にこそ解決のカギがあると思うのです。イスラムもユダヤ教もキリスト教も教えるところは同じです。平和への、よりよい道があるにちがいありません。暴力は暴力を生むのみだと教えてくれます。ユダヤ主義が素晴らしい平和の宗教であることを、全部リストアップすることはいたしません。それはすべての宗教の中にあるものだと思うからです。自分の宗教を宣伝するのではなく、お互いを知る、そして自分自身を知るという対話の道をすすめたい、と思います。

私ども全てに悪はある、宗教の中にも悪があるということを認めなければならないと思います。悪に対しても、悪を憎むということを共有しなければならない。

しかし悪とは何なのか。

カントは「悪というのは人が自由に選ぶものである、自己愛が道徳的や法律を従わせる、ゆえに悪は内在的な、根源的なものになる」ということを書いております。人間性の中に悪があるから、悪を選ぶことになるのだというのです。人間性は悪であるときえカントは言い切っています。悪は、人間に内在するものであるといいます。語源的、根源的であるという意味で、内在的である。という言い方をカントは使うのです。人間性に内在する根源的なものは悪であるが、それを顕在化するのは人間であるということをカントは言っているわけであります。悪には二つの原因がある。人間性の脆弱さ、それから一番目に不純さ(道徳を道徳として受け入れられ

ないという不純さ、三番目は罪悪さという言い方をするわけです。人身が退廃するということは、道徳的な法則だけでははかれないと言つております。不法でない行為でも、不道徳な惡の行動であり得るということです。

ハンナ・アレンツはカール・ヤスバースに「惡は思われてい

たより、より根源的なものである。近代的な犯罪はモーゼの十戒には書かれていません」と手紙を書いております。

人間を不要にしている、社会に存在する惡に、我々はどういう答えを持つのでしょうか。リチャード・ルヴィン

ン・シュタイン・ラビは、物が人より大事になつてくる時、倫理的な宗教を負かして惡が行われ、夢が破壊されると言います。宗教の持てる偉大なるヴィジョンをここで回復することができるのかどうか。ハレスチナであれ、インドであれ、パキスタンであれ、バルカン半島の対立する両者が、人間が人間と対峙しているのだと、これを認識することができるようになるのでしょうか。

土地よりも人間の方が大事なのだ、領土よりも人間の方が大事であるということを認識することが再びできるでしようか。政治よりは、宗教のヴィジョンの方が解決の糸口を出すでしよう。戦場の兵士は情熱も身体も懲によって犯されてしまっています。対話を通じて、神を愛することによって、またお互いを愛することによって問題が解決出来るのではないかと思います。私は寺院に参拝して、み仏が貧者から富者、男女に囲まれているのを見ました。すべての人たちが仏を通して祈ることにこの祈りが他の人に届き、それによって、社会が再び平和の糸口をつかむことになるのではないでしようか。

自分のごく隣人を愛せよ、彼はあなたである。神は神であるということを思い出しながら話し合いを進めましょう。ありがとうございました。

杉谷 ありがとうございました。

統きました、マイケル・イブグレイブさんです。どうぞよろしくお願いいたします。

イブグレイブ この素晴らしい会議に、このように大切な対話に参加しましたことは私にとって非常に喜ばしいことですから、心から深く、天台座主渡邊惠進先生はじめ、このサミットを運営した皆さまに感謝を致します。

まず、哲学的で非常に強いお話をアルバート・フリードランダー師からいたしました。私はその後を受けまして、触れたいと思います。一つは宗教が紛争の原因になつていているのか。二つ目は、宗教は紛争予防に役立つかということです。

その前に二つほど申し上げますが、昨日の私どもの話し合いは、国と国との違い、文化と文化との大きな違い、例えばイスラムと日本との違いというような観点から話されました。しかし、宗教的多様性は大陸と大陸の間だけではなくて、一つの国の中にもあるということです。

英國でも、おそらく百五十万人から二百万人の英國籍のムスリムが住んでおります。そして

多くの国においてはキリスト教徒の存在は強く、他の国においては半分半分で、キリスト教とイスラムが同じ、またナイエリヤや、レバノンなどイスラムの強い国もあるわけです。荒っぽい見方ですが、地域社会の中で、一つの土地をお互いの住民が分かち合つてあるのはもっと正確にいえば西ヨーロッパと云うべきでしようが、この目的の中に英國も入れたいと思うのですが、西ヨーロッパにおいては、昨年九月十一日の影響は、イスラムだけなくて全ての宗教に対する敵意として起つてきました。

その敵意の底には「どんな宗教であれ、自らの宗教を絶対視し、他の宗教は間違つてると考えている、それが、紛争のもととなるのだ」という非常に單純化された考え方があると思います。

それならば、宗教の違いは、紛争の中にどのように現れているのかということになります。ムスタファ・チ師が特に言わなことは、宗教が敵対的な環境や態度を作り出すことにはかかわらず、終わりのない紛争に結びついていく可能性があるということでした。

では、宗教は、敵対的な環境や態度を作り出すのにどれだけ関わるのでしょうか。

確かに、宗教が直接的に関わっている責任があるという場合があります。他の信仰、他の宗教的違いに悪いイメージを作り出していくことです。キリスト教徒の私の心に、苦痛に満ちて戻つてくる思い出は、長く恥ずべきキリスト教徒とユダヤ教徒の問題です。フランスのジューイザック(哲学者、歴史学者)が「侮蔑の享受」ということを言つていますが、ユダヤ人に対して間違つたことを言い、それをキリスト教の教えの一部としてゆく、そ

のことによって、キリスト教徒がユダヤ教徒に対して敵意を持つことになり、恐ろしい結果になったということです。北アイルランドでは、杉谷先生が言及されましたようにプロテスタントのグループが非常に暴力的で、現世的な言葉をもつて、ローマ教会を「バビロンの民」という言い方で、悪魔的なイメージを想起し、ローマカトリック教会を批判しています。本当の純正なる宗教とは違ったイメージを作り出すわけです。これはキリスト教徒の間であります。ですから私たちにとって試練となるのは、ヨハネ・パウロ二世教皇が言わされましたように、私たちキリスト教徒の中で、歴史を通じて信仰を深く見直し、純化する、純粹化するということです。教皇は、敵意を生み出す不純部分を取り除いていくことが必要である、と言つておられます。私たちが対話をすることは、他の宗教の人よりも、むしろ我々の過激な信仰の人たちと対話をする方が、より一層難しいことであるとかと思います。これは、宗教のグループに直接責任があるという場合です。

もう一つ宗教が敵意を生み出すことに関わっているやり方があると思います。それは宗教的なシンボル、象徴を使ってそれを操作して、他のグループ、他の宗教、宗団を間違った形のイメージを作り出す。つまりそれらの人たちがその宗教で信じていない事、まだ実行していない事を、あたかも信じて実行しているかのようにプロパガンダすることです。北アイルランドのドゥアルマという都市の外れにドゥランクウェイという小さな村があります。ドゥランクウェイでは夏にアイルランド教会がアン吉利カンサービス、英國国教会とお祈りをします。それが、ロイヤリストといわれる過激派集団の活動を正当化するためには使われるつまり暴力的な行為を実際行うの

です。数年前、悲劇的な悲しむべき物語がありました。家が焼かれた為に三人の子供たちの命が失われたわけです。つまり宗教的な行為、宗教的なシンボルが政治的な目的のために使われるという例であります。それから正常時の十字架は、白いバックに赤い十字架を描くのですが、この旗を過激派、右派のキリスト教はシンボルとして使いました。つまり、右派のイデオロギーの目的のために使われてしまったわけです。宗教者は、象徴が我々の宗教の中で如何に大切であるかということを思い起して、元々の正しい聖なる意味を持つものとして取り戻す必要があると思います。

第三には、西ヨーロッパにおいて世俗世界と宗教の世界との間の対話という大事なものがあります。宗教間対話の中に、世俗の人たちを巻き込まねばなりません。ここで第二番目の話に戻り、現実的な側面においていくつか提案をしたいと思います。宗教者のなすべき大事な仕事は、対話であります。しかしその対話は正直な対話でなければなりません。自由に、お互いの間に共通性があると同時に、違いがあるということを認め合つたものでなくてはなりません。違いがあるといつて分裂する必要はありません。違いがあつても一緒にいられるということが大事です。英國国教会は、このような方向を求めております。

第二に、誤ったイメージや、誤ったことをお互いの宗教に対して言わないということです。特にメディアを通じて間違ったことを報道されないようにするということです。他の宗教であつても、それが間違っている時には、我々の隣人のために証人にならねばならないと思います。また他の宗教が間違っている時には、眞実の名の下に抗議するべきです。英國では、イスラム教を恐れ

る気持ちイスラムファービテがある。しかもこれが、マスメディアによって行われているということです。もしもスリムが、イスラマファービアに対して反対するならば、大変いいことがあります。

自らの信仰集団の中で、他の宗教に対して教えていくことは大事です。英國では、ローマカトリックと、英國国教会が運営する小学校で真剣に、他の宗教について教えていくとしております。ムスタフィチ師が言われたように、最も正しいやり方で、他の宗教に属する人たちを考えることを教えていくわけです。そして少なくとも在学する子供たちのうち、他の宗教の人たちを一五%は受け入れるということです。教育の問題は、将来の大きな問題です。

最後であります、祈りが大事であります。これは誠に実践的な問題であつて、異なる宗教に属する人たちが、共に祈り、そしてお互いのために祈り、肩を並べて、オーブンに祈るということであります。正義と平和のために、世界のために祈るということであります。今回

の集まりの会議の二日間の中で今日の午後の祈りといふものが、その意味で本当に大切であると思ひます。ありがとうございます。

杉谷　どうもありがとうございました。

続きまして、最後にベンドレイさん、よろしくお願ひいたします。

ベンドレイ　まず仏教会の天台宗の皆さま、特にコーディネーターの杉谷師は私の同僚でもあります、そしてまた他の宗教団体の方々が協力して、そして私たちがここに一堂に集まることが出来て大変嬉しく思いました。

まず、最初に申し上げたいのは、日本の仏教会がスリ



ランカの紛  
争仲裁に手  
伝いをして

ます。第一番目の事実といたしまして、一九九五年七月十一日、少なくとも八千人、もしかしたら、一万三千人の非武装のボスニアの男性、そしてまた少年たちが、組織的にセルビアの兵隊からスレブレニカの町でもって、女性たちと切り離されたということになります。スレブレニカというは国連が監視する安全な町であります。

谷師、日本  
の仏教徒の方々、そしてまた立正佼成会の方々の素晴らしく重要かつ適切な措置で、スリランカの仏教徒が協力する調整を行つて下さっているということに御礼申上げます。このことを続けてくださいと、お願ひし、それに対する支援を私たちとしては、誓うわけです。紛争を避け和解していく、という努力に対しても感謝し、支援いたします。

他の同僚が、杉谷師から宿題が出ておりました、二つの点に焦点を当て話をしてくれました。紛争の原因としての宗教の役割、宗教がどのような形で、紛争解決の役割を果たすことが出来るか、宗教がどのように紛争を予防することが出来るか、非常に難しい問題ですけれども、具体的に話したいと思います。

そこで戻るのが、イフエト・ムスタファイッチさんの物語ということになるわけでありまして、私の親愛なる同僚でありますけれども、彼自身がこの物語を身をもつて生きてきた、その話について語りたいと思います。そして兄弟として私が彼と一緒に仕事をしたことについてお話ししたいと思います。ボスニアに関して三つの事実をお話ししたいと思います。今出た三問題、すなわち宗教

が紛争の原因、宗教が紛争を和解する役割がある、そしてまた宗教が紛争を解決することができるという観点からお話ししたい。

下さっている  
ということ  
です。非常  
に嬉しく、ま  
た誇りに思  
います。杉

谷師、日本  
の仏教徒の方々、そしてまた立正佼成会の方々の素晴らしい重要かつ適切な措置で、スリランカの仏教徒が協力する調整を行つて下さっているということに御礼申上げます。このことを続けてくださいと、お願ひし、それに対する支援を私たちとしては、誓うわけです。紛争を避け和解していく、という努力に対しても感謝し、支援いたします。

他の同僚が、杉谷師から宿題が出ておりました、二つの点に焦点を当て話をしてくれました。紛争の原因としての宗教の役割、宗教がどのような形で、紛争解決の役割を果たすことが出来るか、宗教がどのように紛争を予防することが出来るか、非常に難しい問題ですけれども、具体的に話したいと思います。

そこで戻るのが、イフエト・ムスタファイチさんの物語と

いうことになるわけでありまして、私の親愛なる同僚でありますけれども、彼自身がこの物語を身をもつて生きてきた、その話について語りたいと思います。そして兄弟として私が彼と一緒に仕事をしたことについてお話ししたいと思います。ボスニアに関して三つの事実をお話ししたいと思います。今出た三問題、すなわち宗教

が紛争の原因、宗教が紛争を和解する役割がある、そしてまた宗教が紛争を解決することができるという観点をあてることによって容易に管理したり、また操作することができるわけです。気をつけて頂きたいのですが、宗教だけではなく、どんな集団でもそうであるということです。正直な宗教では、精神的に自分を変えることがありました。すなわちセルビアの兵隊からムスリムのボスニア人をまず、守るべきだった。しかし守らなかつた。そもそも八千人から一万一千人のムスリムの男性、そして少年が、全く冷血にも、殺されてしまった。残酷的に殺された。セルビア人の兵隊の多くは自分の宗教に対して忠誠を誓うもので、セルビアのアイデンティティとして、ういうことをしたということでした。ですから最初の質問は非常に具体的でそれに直面しなくてはいけない。すなわち何故宗教というものがこのような残酷な紛争を起こしたのか、止めることができないのか、八千人から一万一千人の非武装の人たちが、安全な町において捕えられる、そして冷血に殺された。何故こんなことが起るのか、また、さらに悪いことは、殺した多くの人たちが、こうすることをする、これは、殺すことだ信じてやつたということなのです。

宗教がこのようなテロを起こしたということ、この宗教の中にある酷い弱さというものは、一体何なのか。この問題に対しまして、具体的に答える必要があります。この状況におきまして、次々とはっきりしてきますが、

ようするに集団を作ること、集団のアイデンティティを作ること、これが宗教の危険性をはらむということです。グループダイナミクス、集団のダイナミクスというのは、尊威を感じることをもって強化されます。集団の團結というのは敵を持つことをもって強化されるのです。事実、地域社会における意見の不一致、また組織的な緊張関係などは、地域社会の外にある敵に焦点をあてることによって容易に管理したり、また操作することができるわけです。気をつけて頂きたいのですが、宗教だけでなく、どんな集団でもそうであるということです。正直な宗教では、精神的に自分を変えることがなされており、これこそ皆にサンガつまり仏教界のメンバーであるということの印であり、ウーマ、イスラムのコミュニティの、員であり、また教会キリスト教徒であるといふことの印であります。しかし、それが操作され、ねじ曲げられて、そして非常に自分たちの地域社会の世俗的、また神聖ではない野心のために正当化されてしまうと、実際こういったことが起るということになります。集団に属することによって非常に特殊な意識をもつて、操作されて、利己的な目的のために使われるのです。興味深いことに、これが起るのは宗教社会が弱いときに起こる、強いときには起こりません。精神面が弱くなれたときに起こる。強いときには起こります。

さて、ボスニアの話に戻ります。前世紀に戻りますと、宗教戦争があつた、マルキシズム、ファシズム、こういったものは全て宗教的な色彩があつた。そして非常に悲劇的な形で宗教がねじ曲げられた、そしてそれでもつて多くの虐殺が行われた。これは社会学的な観点でいいますと、宗教戦争と言えるわけです。こういった問題を検討

していくのも重要でしょう。またアメリカにおきましても、こういったダイナミクスが続いている。すなわち九月一日のテロ行為は、酷いものであり、間違つたものであります。しかし他者を敵にしてはいけない。そして他者を敵にすることは間違っている。このダイナミクスに注意しなければならない。誇りを持つて言えるのは、宗教社会はアメリカにおきましては、この種の非常に誤った形で敵をダイナミクスして利用する考え方を、一致団結して捨てようとしているのです。

さて二番目の問題ですが、宗教が紛争を変えて行くことができるということです。紛争解決出来るということ、「一番日の事実として」のスレブレンicaの虐殺が起きたから一年以内にして、殺された人たちのお墓の遺体がまだ温かいうちに、そのインクが乾く前に、戦争を止めるために、非常に痛みを持った、しかし定期的な接触というものが宗教指導者たちによってボスニア・ヘルツェゴビナで行われたということです。ムスタフィッチさんもその一人で、私もまたお手伝いをしました。各地域社会の痛みというものはあまりにも深く、あまりにも生々しいものであり、そこで宗教指導者たちは秘密裏に会合を持った。そうでないと誤解されるからであります。ムスタフィッチさんは事務局長であり、私の方はサラエボ・ボスニアで、九六年、九七年の冬を過ごして、手伝いをしました。そして九六年の六月になりますと、あのような虐殺がおこなわれてからたった一年後であります。海外からの外交官は不可能であると言つたわけですが、四人の宗教指導者、キリスト教徒、ユダヤ教徒の人たちが一緒になりまして、傷ついた人たち、荒廃した地域社会の前に立つて、そしてまた自分たちの家族の前で、息子を失った人たち、娘が強姦された人たちの前に立ちまして、共同の宣言を出しました。この宣言は共に生きるというものでありまして、これはユダヤの一人ひとりに対し配慮していくことです。そして宗教的な違いを尊重する宣言であって、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教の最も精神的な深い要求に基づいたものであります。これが素晴らしい事実であります。そして直後にこの四人の宗教指導者は、日本の指導者によつて招待され、来日しました。

二番目の問題点は非常に具体的です。宗教の中にある偉大な力は、人々が言葉に出来ないような残酷なこと、また苦しみ、苦難にどのようにして直面させることができるのか、また、それによって人々が許せない事を許す方向に宗教は何故もつていくことができるのか、また宗教というのは最終的な分析におきまして、ボスニアの友人たちがその敵の中に兄弟になり得るという可能性を見出すことができたのか。共に、一緒に生きていく仲間として見ていくことが何故できたのか、政治家の力を超える力が、何故宗教にあるのか。

それに対してもささやかな答えしか出しができます。あまりにもささやかでありますし、充分に質問に答えることができません。宗教というものは、通常、人間の尊厳、そして責任を高く評価しているのですが、これは全人類に対して当てはまるものであります。そして神の慈悲、そして許しというものを深く理解しているのです。ユダヤ教聖典は、ユダヤ人でない人たちの尊厳をも重要視しているのです。仏教も同じだと思ひます。すなわち仏教徒に対して信心を深くしなさいと言つて、同時に仏教徒でない人たちに対する尊嚴の念を持つてゐるということであります。こういったことが各宗教に見られるわけです。私がよく感じるのは、ムスリムの人たちは、聖典におきまして、聖典の方から神がこのコトランの中に、美またそして善ということを詠んでいます。またキリスト教徒も同じであります。聖典を読めばそこに美と善が書いてある。信徒の人たちは、神の美しさ、善、「これが聖典に書いてあるので、それに従う」ということがあります。仏教徒もまた然りであります。

最後に宗教が紛争の予防になることができるということについて、ここで三つの事実を取り上げたいと思います。またボスニアの友人の話にもどります。ボスニアの宗教指導者たちは、系統的な、組織的な形で、無知と不公正ということを社会に訴えました。一緒にになって宗教に関する辞書、もしくは各宗教に関する事実関係のデーターブックを作りました。

ムスリムの人たちが、ムスリムの章を書いて、キリスト教徒の人たちがキリスト教の章を、そしてユダヤ教徒の人たちがユダヤ教の章を書いて、これを市民に渡しました。また定期的にテレビにも出まして、そして無知というものを攻撃しました。また彼等は一緒に法の改正に向かつたわけです。すなわちこの宗教社会というのを共通の善のためのものにしたわけです。各宗教が紛争の原因に対し対応したということ、すなわち無知と不公正に対し対抗した、一緒にこれをやつたということです。

そして三番目の問題点は、何故、宗教が共通の善に行くのか、これは他の宗教と協力してであります。が、それは対しての答えであります。

宗教というのは、非常に大きな権利があり、平和に関して包含的な視野を持っている。すなわち公正で正義

のある環境を全ての人々にというビジョンがあるわけです。この共通の善を求めていたこと、これが宗教の共通基盤となつて、紛争の温床となる不公正、不平等に対する対抗することになります。私自身の経験から、そして私が仕事をしている組織の体験からいうと、私たちは世界の平和というものが、ただ單に紛争がないことと理解してはならない。平和はもっと肯定的な用語であり、平和ということは、私たちがお互いに眞の友好関係、パートナーシップを持つことによって得られることがあります。これが、美しく、善であるのです。それがあつてこそ本当に平和と言えるのです。

最後に申し上げたいことは、ささやかなヒントであります。おそらく皆さまも私に同意していただけると思います。そしてまた、中東の他の方々も同意していただけるとおもいます。

各宗教の精神的な指導層の人たちが、人々に対して、共に生きるという基盤を与えないといふ、中東に眞の平和は訪れないであります。政治家によつて魔法の解決策は与えられないということ、そして二つの宗教の基本的な伝統の中で、共通の基盤を探すことが重要であります。そのためには、この二つの宗教はそれぞれの聖典を読むにあたつて、これは両刃の剣であるといふ考えをもつて読む必要がありま



を起すことが必要です。すなはち自分たちの心の一番深いところに従つて変わるということ、また相手が自分たちの兄弟と信じ、尊敬を持つことによって変わることができると信じております。それによって中東による團結が可能になると思います。

## 宗教者の果たすべき役割

杉谷 大変、含蓄のあるお話をいただきました。今、ペンドレイさんが宗教というものは扱い方によっては両刃の剣になり得るとおっしゃいました。イスラム教のアッハガールさんによ質問いたします。イスラム教においては自己防衛の範囲ならば大変な攻撃を受けた場合は、やむを得ずそれは許されている。ところがその自己防衛といつもの、誰がどう判断するのでしょうか。そのあたりを訊ると過剰防衛が、相手に対する攻撃になる恐れがある。非常にその信仰に忠実であればあるほど、ジレンマに陥るようなことが起こりうるのではないか。そのようなことについてお答えを頂ければたいへん有り難いと思います。

アッハガール 偉大なる神の御名によつて。自衛と言いますのは、根本的な一つの基本によつて行うものであります。これは典型的な啓示宗教によつて定められております。人間の権利が認められており、そして生命が尊かされる時に危険が起つた時にこれが(自衛)行われるのであります。ですから、これは法的に許されないことに對して自衛の行動ができるのです。どのように行われるのかといえば、全部法的なものに基づいて行われます。イスラムにおいては、自分自身で防衛をすることは、特に宗教において定められております。コーランの中

でも定められておりますが、「神は非常に素晴らしいものでありますから、眞実を理性によつて理解すること」が非常に重要であります。ですから我々は、つづ個別の問題を判断していくかもしれません。何が眞実であるかということと感を超えないことが重要です。眞実は何か、他人の権利は何かといつことを決定し知ることであります。そして不公平、罪悪が何かということを判断して決めるのです。それで、イスラムでは行うことを決めていくのです。権利とイスラム法とイスラムの基本に基づいて、罪とは何かを決め、あなたの権利は何か、その権利とはどのようなものかを定めて行くわけです。それで、何が選択できるのかが決まります。罪悪がはつきりしていれば、全てのものに対しても対して判断できます。ですから理性で理解をすることが、イスラムなのです。

杉谷 昨日も何故お酒を飲んではいけないのか、また豚を食べてはいけないかについて、イスラムの方々の明確な答えがありました。私が大変感銘を受けましたのは、

ともすると日本人は、宗教を離れてまず合理的な説明を考えて、「ああ、これが合つてゐるから、この宗教は正しい」という説明の仕方が行われがちですが、昨日、イスラムの方は「神がこれを定めているから信じよう、しかし合理的な説明をすると、こういうことなんだよ」と、この順序が宗教者として正しい順序であろうかと思いました。

基本的な理念に基づいて自己防衛は許される。その背景は大変重く、あれは「そまた我々も理解し得るのではないかと思います。マイケル・イブゲレイブさんも、ペンドレイさんも違つた言葉で相手の宗教の悪口を言わない。おそらく悪口を言いたくなつて「自分がいいん

だ」と言いたい時には組織が弱くなつて求心力が無い時に敵を作りやすい。これは政治の世界ではよくあります。ですが、宗教でもこれが行われがちあります。サラエボでいち早く立ち上り、諸宗教の対話を始めたムスタフィッチさんは、宗教が皆が敵対しているときに違う宗教の人々に話し合おうと呼びかけた。彼は敵側ではないかと、支持者にも後ろ指を指されかねない中において、どのような形で話し合いが進められたかをお伺いします。

ムスタフィッチ 今のご質問に対する回答はペンドレイ先生の中まで出ておりました。ボスニア戦争が終結した後で、この対話を始めた時、特にボスニアのグランド・ミフティーは双肩に大きな負担を抱えていました。ボスニアのイスラム教徒の全ての苦難、苦慮を双肩に担つての対話です。そのリスクを顧みず公衆の前で正教会の人たちと席を共にしたのです。対話の前に、正教会は直接残虐な行為と関わりがあったことが明らかになつたわけです。ですからムスリム側としては正教会のリーダーと席を同じくしないと言つていた。席を同じくする唯一の条件として、正教会のセルビア人が、イスラム教徒に行方を認めて謝罪した後でしか席を同じくしないということでした。

しかし、グランド・ミフティーは、サラエボから来ていた正教会のメトロボリタンのダブルボスエスキー氏が、自らの正教会が残虐行為に関わっていたとそれを公表する前に隣に座られた、席を同じくされたのであります。リスクをとられたのです。ペンドレイ氏が指摘されましたように犠牲者の方が力がある場合がある、見えざるものであるけれども、敵の中にも犠牲者は善を見る事ができるのです。ボスニアはそれができたのかもしませ

せん。正教会のリーダーの方と席を同じくして対話を始めたのですから。しかし、初めはそれを秘密裏に行いました。公衆の前でそれをすることは憚れたのです。しかし徐々に雰囲気を整えていき、公衆の前でもそれが出来るのだという結論になりました。そして一般の人たちに、イスラム教徒、キリスト教徒にメッセージを出そうということになり、それが六月九日に出されたのです。その後で両方のリーダーが現れて道徳的に共有した責任を持つと書かれた書面に署名をしたのです。そして宗教を離れてすべての人たちに呼びかけたのです。お互いに話し合おう、傷を癒そう、眞実を語ろう、正義を行おう、追放された人たちに家に戻つてもらう道を開こうと、そして愛する家族を失つた人たちの心を癒すことを共に行おう、実際に手を下した本人を許そうということを呼びかけたのであります。

そのプロセスは続いて、終わつたわけではありません。ユダヤの人たちが第二次世界大戦中に受けた、経験の傷が言えるにはまだ時間がかかると、経験的に言えます。このボスニアでも同じく時間がかかります。しかしそのプロセスがスタートしたということが重要であると思ひます。もう一つ同僚の諸氏が指摘された点でもありますが、言わせて頂きたいことがあります。ペトナム、広島、ボスニア、それから第二次世界大戦中のヨーロッパに一例を見ることができます。人が人を殺めている、特に隣人同士が殺し合つてゐる。長年、何世紀にもわたつて一緒に暮らしていた隣同士が、お互いに殺し合つてゐる。これをどう説明するのか。どうしたら、の様なことが起つるのか。その正当性を問うのではなくて、何故起きるのかの説明を得たいのであります。兵隊あらうと

兵隊でなからうと、一番の武器は銃であるといわれています。しかしそれは間違ひであります。銃は最大の武器ではない。人の手に与えられる最大の武器というのは、思想であります。他者を敵とみなす考え方、それが銃であります。私の国では、残念ながら国外から、隣国から、例えればセルビアから、クロアチアから人が入ってきて、そのようなアイディアを植え付けて行つたのです。彼等に宗教、国籍で関係する人たちに、隣の住民は違う宗教をもつてゐるから敵である、抹殺しなければならないということを噛きにやつて来たのです。何の為かと言ひますと、経済なり政治の利益を追求するためにであります。ボスニアだけではなくパレスチナでも同じであります。そこでの解決は何なのかを考えますとき、人の頭に定着してしまつてゐる考え方をひっくり返すことしかないと、思ふのです。それに代わつて隣に住んでゐる人、異なる宗教を持つてゐる人たちは敵ではなくて友人であるという考え方を根付かせる事ではないでしょうか。その意味で宗教者、宗教界のリーダーは政治指導者よりももっと大きな役割を持つてゐると思うのであります。その考え方を普通の人たちの頭を切り替えるばかりではなくて、政治家の頭も切り替えていく必要があると思います。だからこそ、公衆に対して政治家がしようとしていること、していることを、宗教者のリーダーが、それは間違つてゐるとはつきり言つことがあります。同時に普通の人たちに、他の人たちは敵ではなく友になり得る人たちであることを話し合うことが、この暴力の循環を絶つことになると思います。

杉谷 非常に体験に根ざした心に浸みるお話をでした。

ボスニアにおいての貴重な体験の下に対話が成り立つ、今それを継続中である。大変な勇気が必要であったと思います。今中東では「存じの通り自爆テロ、それに対する報復等で、無辜の市民、また子供の尊い命が奪われております。その点に関して先ほどフリードランダーさんから「命を奪うことは許せない、テロも許せないし、報復も許せない」という話をいたしました。中東において、そのような対話の可能性、おそらく中東の宗教者は秘密裏に方法を模索し、苦労を重ねているのではないか、またそのような話を洩れ回っておりますが、そのことの可能性についてお話を伺えたら有り難いと思います。

**フリードランダー** 私は許すことが出来ないということを申し上げたのではなく、常に人々話は可能だと思います。私どもの体験から、キリスト教の友人たちがやつておりましたが、愛と過去を振り返っていくということができます。パレスチナとイスラエルに関して、我々が認識しなければならないのは、過去二年間ではなく、過去二十年間でもなく、あるいは過去五十年間ですらないと思います。もつと遙か遠い過去の重みが当事者にあります。しかしそれであっても、如何なる時においても事は変わり得ると思います。何故なら、我々は個人であり、またグループであってもお互いに手を差しのべることができます。しかしそれで、何が何でも、如何なる時におべることができるからです。これはエジプトとイスラエルにおいても、起つたことがあります。ラビン首相が対話をしようとして殺されました。しかしこれは外の敵によつて殺されたのではありません。内への敵によつて殺されたのです。また、マイケル・イブグレイブ師が言わされました。その時最も難しいのは、我々の内部の対話、つまり一つの宗教の中での対話です。常にお互いに話し合



いをすることは可能であります。それから公の場で行うことは可能であると思ひます。最初に秘密裏に行つて、最初に秘密の対話について伺いました。国家とイスラエルとが共存するということです。これはある時点で敵対行為を止め、そしてお互いに手を差しのべ合うことです。非常に多くの領域においてこのようなことが出てきております。レバノンでは自由な社会として其存が長い間見られておりました。この様なことは復活し得るのです。その為には、私はこれは政治家の問題であるというよりは、宗教の指導者たちがお互いに対話に関わっていくことによって、ゆっくりではあっても、自らの地域社会の教育をしていくことが必要であります。そして隣人との関係を正していくその中で宗教の力が生きていくわけです。宗教の外にいる人は祈りの力を信じない人があります。

私は私の隣人が神を感じているということを信じています。ですから如何なる瞬間にも祈りを通じて、平和がもたらされる可能性はあると思いますが、時間がかかるでしょう。そして、そのことは、他者の痛みを自らの痛みとして感じるところから始めなければならないと思います。その為には他者を知ることが必要であり、そ

うすれば、他者の為に死ぬことができるようになります。しかしながら時間がかかるでしょう。杉谷マイケル・イブグレイブさんは、宗教外部と内部では充分理解が行き届いても、外部との対話も大変重要な要素であることに触れられました。それからもう少し補足をしていただきたいと思います。

**イブグレイブ** それでは対話とは何かということについてお話をします。

宗教間の対話は、いかなる種類の対話、つまり、一つのグループの人たち、同じ宗教であれ、一つの人種間であれ、以下の原則に当てはめる事ができると思います。英國国教会においては、対話の四原則というものが、世界教会協議会(WCC)から来ております。

まず第一の原則は「対話」というものは、人が出会った時は、人が主役であります。抽象的な議論や体験が出来るのはではなく、人が出会いであります。そして対話は常に人間に依存しております。それはボスニア・ヘルツェゴビナのお話からも明らかであります。人が人としてこの世で出会うのです。抽象的な観点で対話をすることは危険であります。

第二の原則であります。対話はお互いの理解と信頼に基づくことです。公平であろうとする決意が、対話を求めていく当事者の間になければなりません。我々は時に、対話をするといつても、われわれのベストのものと、相手の一番悪いものを比較しようとする説惑に駆られます。いかに聖書の素晴らしいところを見

せよつかとする一方で、あなたの方の行動は本当に酷い、ということは対話にどうでは良い方法ではありません。公平でなければなりません。最も大事なことは、我々がお互いに信頼することを学ばなければならないということです。それが、対話を一緒により深い真実に向わせることであり、それ以外の方法では不可能であります。

第三の原則は対話の正しい証人となることです。我々は、対話において正直でなければなりません。神と真実を分かち合い、お互いの話に耳を傾けるのです。勝手に立ち上がり、宗教間で自分の話だけをするのではなくて、会話相手の話に耳を傾けるのです。

#### 第四の原則は、地域社会の善のために対話すること

であります。これは、キリスト教社会とくに英國において当てはまると思います。時に対話を超えて、一緒になって地域社会に奉仕をしていくことが大切であります。テープルの反対側で話をするのではなく、実際に一緒にドアを開けて外の世界に出てゆき、自らが属する人類のために、共通の奉仕をすることです。このような原則によって対話を可能にしていくといふことでござります。

杉谷 ありがとうございます。

今、対話の始まりには人との出会いが大切であるとお話にありました。そこで、本日、はるばるローマから聖エジディオ共同体の代表が来られております。アフリカ・モザンビーグでの、厳しい内戦の調停のために出会いの場を作られて、光明を見出された方です。

ジョバンニヨーリ ローマにおいて、モザンビーグ政府とモザンビーグのラビが合意に達しました。それは二年

間の話し合いと討議の結果、達せられたのです。何故、ローマでなのかといいますと、モザンビーグは十五年間の長い内戦で百万人の人々が殺され、内戦によって、人々は疲弊し、そこでは平和を見出す交渉が出来なかったのです。聖エジディオのコミュニティーは、政府と関係があつたので、政府軍の代表者と反乱軍の代表者にローマに集まつてもらい、秘密の討議を始めるようにしました。もちろん我々は政府でもなく、また国際組織でもなく、単なる信者の集まりにすぎません。ですから、私たちは両者を招くことしかできません。その基本は、お互いを隣人として認め合う、兄弟として認め合つて欲しいというこでした。

エジディオのリッカルディ教授は、ヨハネ二十三世が言われた言葉を引用されました。「我々は、分裂をいかに連帶するかを学ぶという夢がある」これは非常に深い言葉であります。難しい話し合いは、二年続きました。そして、ついに平和の合意に達しました。それは秘密の対話が、友情に満ちた雰囲気で行われたからです。我々は特別それを強制したわけではありません。單なる信仰者としてお互いを愛し合う、そして良い環境の中で平和を求めることが促進されるようになると願ったのみであります。私たちはこの経験から学ぶことができると思います。その教訓とは、宗教は平和を守ることが仕事であります。私たちにはこの経験から学ぶことができると思います。モザンビーグの人たちにとっても、モザンビーグはアフリカ全諸国にとってよい手本となつており、十年間の平和が続いております。これは、私たちに、宗教は本当に単純な信

仰者の集まりであれば、積極的に役割を果たすことができる」とを教えていました。もう一つは、戦争に反対する戦い、平和を作り出す戦いは、アルバート・ブリードランダースさんが言われたように、大きな仕事の一つであります。まず、死刑を廃止することは、良いことだと思ひます。非常に重いものだと思います。宗教者が暴力を減らす為に死刑に反対する、その他平和を求める多くの行動が、世界のあらゆるところで行われる可能性があります。

杉谷 紛争和解という非常に重たいテーマの中に希望を見出すことができるお話をでした。

最後にベンドレイさんに、取りまとめをお願いします。

ベンドレイ 最初のコメントですが、謙遜の気持ちを持つことが、共に仕事をする、また対話をするための基盤となるということです。ですから天台宗に対しても、「ここにいらつしやるパートナーの方々と私たちが出会える機会を、今回だけでなく、過去十五回も与えてください」とことに感謝いたします。

一步下がって、地球全体を大きな展望で、また歴史を長い目で見る必要があるでしょう。地球上の六十億人の人々の七十五%、もしくはそれ以上の人々は、なんらかの宗教を持っています。つまり多くの人たちが宗教を信じているのです。地図には、小さな線が描いてあります。それが国境です。このような見方もできるでしょう。しかし仏教の拡がり、イスラム教の拡がり、またキリスト教の動き、またヒンドゥー教の拡がり、ユダヤ教の影響を見ていくのも、ひとつの見方です。どういったインフラストラクチャーを各村や町において作つていつたの

かという見方もあります。アフリカの小さな町に行きましたと郵便局は一つだけ。しかしほそくは四十あり、二十の教会があります。政府は手紙を郵送する郵便サービスができます。しかし教会ではできません。日本の小さな町に神社、お寺がたくさんあるとの同じ事です。ですから社会で一番大きなインフラストラクチャーで、我々が時代を超えて作ってきたものは、宗教団体といえます。これは素晴らしい資産です。また、我々の記憶を思い出してください。私たちの記憶はどこから来ているのか、人間であることはどうしたことであるのかという記憶を思い出してください。これは宗教的な伝統の中にあります。それを消し去ってしまうということは、忘却で何も思い出せないということになるのです。すなわちこのような遺産がある、このような素晴らしい遺産を離していることが、我々の精神性になつているのです。この遺産があればこそ、行動する能力ができます。能力には倫理観が必要になります。誰かが死んでも、癒しがないということならば、悲劇であります。今日、我々は紛争について検討しています。これは政府に責任があると思います。しかし政府は、紛争に対して全面的に責任を負うことはできない。精神性が必要だからです。私たちには、人間とは何かという倫理観が必要だからです。我々は全ての人々に手を差しのべきことがあります。これは我々に共通する思想です。一人で行うのではなく、共に行うのです。ここで、さまざまな美しい言葉、行動によって、我々はお互いが兄弟であり、パートナーであることを認め、受け継いだものに対する忠誠心を持つということは、お互いに敬意をも

つて協力することになります。

**杉谷** 本日は「紛争和解と宗教」という非常に大きなテーマのもとに、また限られた時間の中で大勢のよくばつた発言者をお願いしました。運営上充分行き届きましたが、今日この登壇頂いた方の心は皆さまの心へ届いたことだと思います。特に「宗教者の果たすべき役割」について、多くの方々に公開をしてこのフォーラムを開催したかったのですが、会場やいろいろな都合で、宗教代表者のみご招待申し上げました。しかしながら、この中味のある内容を多くの人々にお伝え頂くためにマスメディアの方々にも今日この協力頂いて取材をして頂いております。言葉では一言一言非常にあつたという間に過ぎてしまいますが、その裏に血の滲むような努力がありました。また、我々は言葉の軽さに流され、言葉のみで終わらかねない状況にたたされていることもあります。自分の裏に血の滲むような努力があつたこともわかりました。また、我々は言葉の軽さに流され、言葉のみで終わらかねない状況にたたたれていました。

本日の貴重な意見を頂きましたバネリストの皆様方、そして素晴らしいコーディネーターをしてくださいました杉谷先生に感謝の意を表します。閉会の挨拶といたします。をするための環境を整え、推進役として宗教に携わる私たちが果たすべき役割があるのでないかということです。この広い地球上から全ての紛争をなくすということは、極めて困難であるということは歴史が証明しています。しかしながら、私たちは諦めはなりません。本日のようなフォーラム、昨日の記念講演、シンポジウムを通して得られた成果を、私たちひとり一人が何らかの形で行動に移して行かねばならないと思います。最後に会場の皆さま方にこのことをお願いするとともに、今日の貴重な意見を頂きましたバネリストの皆様方、そして素晴らしいコーディネーターをしてくださいました杉谷先生に感謝の意を表します。閉会の挨拶といたします。

お陰様で皆さまにご協力いただきまして、「紛争和解と宗教」フォーラムを終ることができます。皆さまご協力、本当にありがとうございました。

**黒住(司会)** それでは、フォーラムの閉会に際しまして、日本ムスリム教会副会長徳増公明様に締めくくりの挨拶をお願いします。

**徳増** 本日のフォーラムは「紛争和解と宗教」というテーマで海外からのイスラーム、キリスト教、ユダヤ教の代表の方々に、それぞれの立場から熱心にお話しいただき、大変内容の濃い、有意義な意見を聞くことができました。その内容の主張の一つは、各パネリストの皆様方のお話にありましたように、紛争和解には対話による相互理解が重要であるということです。そしてその対話

L E C T U R E

# 平和への祈り式典

比叡山延暦寺根本中堂前広場

比叡山宗教サミット15周年記念  
平和への祈りとイスラムとの対話集会

# 平和の祈り式典

八月四日(日) 一五時—一六時三〇分  
比叡山延暦寺根本中堂前広場

(敬称略)

◎司会=出口眞人(大本大道場長)

海外代表入場

シンセサイザー演説 西村直記

開式の辞

田中恒清(世界連邦日本宗教委員会副委員長・石清水八幡宮官司)

海外代表・国内代表登壇

海外代表

- ①ムハンマド・サアド・アッサーイム(サウディアラビア)
- ②ムハンマド・アブドルファティール・アブドルアジーズ(エジプト)
- ③ミル・ナワズ・カーン・マルワット(パキスタン)
- ④ムーサ・ゼイド・ケイラニ(ヨルダン)
- ⑤イフエト・ムスタフィッチ(ボスニア・ヘルツェゴビナ)
- ⑥アブドゥラーマブルーク・アッナッガール(エジプト)
- ⑦アルバート・フリードランダー(アメリカ)
- ⑧サン・テック・リー(バチカン)
- ⑨マイケル・イブクレイブ(イギリス)
- ⑩ウイリアム・ベンドレイ(アメリカ)
- ⑪アゴスティーノ・ジョバンニーリ(イタリア)
- ⑫アルベルト・クワットルッチ(イタリア)

国内代表

出口 紅(大本教主)

森 和久(全日本仏教会理事長)

白柳誠一(日本キリスト教連合会理事長)

加藤隆久(神社本庁常務理事)

岡野聖法(新宗連常任理事・解説会法主)

五百旗頭陽一郎(日本ムスリム協会名誉会長)

庭野日鏡(立正佼成会会長)

⑦WCRP





⑧世界連邦日本宗教委員会 池田鷲輝(世界連邦日本宗教委員会委員長)  
⑨天台宗 渡邊惠進(天台座主)

主催者代表挨拶 平和祈願文 名誉顧問 渡邊惠進(天台座主)

平和の鐘(默祷)

平和の祈り

①イスラーム代表

海外代表・日本ムスリム協会二名

②ユダヤ教代表

アルバート・フロード・ランダー

③教派神道代表

島本邦彦(大本本部長) 吉田豊秋 余田幸男 稲垣裕彦

④仏教代表

半田孝淳(天台宗探題) 森 和久(全日本仏教会理事長) 南沢道人(永平寺監院) 大西貞興(消水寺執事長) 稲岡慈順(天台宗參務)

⑤キリスト教代表

白柳誠一(カトリック枢機卿) 大塚昌直(カトリック京都司教)

田中健一(カトリック京都司教) 武藤六治(日本聖公会京都教区主教)

サン・テック・リー(バチカン) マイケル・イグナレイフ(イギリス)

⑥神社本庁

中小路宗隆 佐波近尚 室川章幸 山田敦子 藤本有里子

⑦新日本宗教団体連合会代表

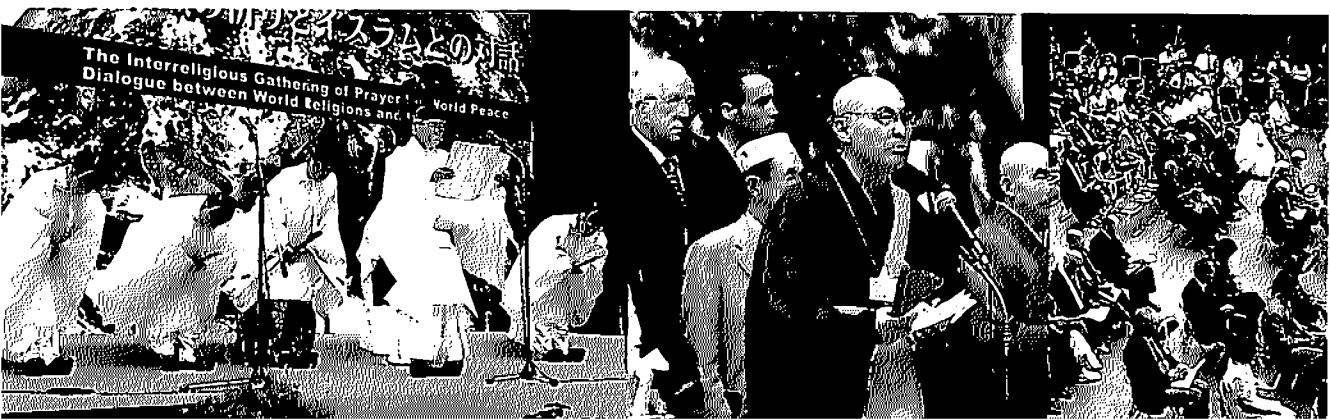
庭野日鑑(新宗連理事長・立正佼成会会長) 岡野聖法(新宗連常任事  
解脱会法主) 佐藤滋光(新宗連監事・證律院住職)

平和のメッセージ アゴスティーノ・ジョバンニーリ(聖エジディオ共同体)

比叡山メッセージ発表 名譽顧問 白柳誠一(世界宗教者平和会議日本委員

会理事長・日本キリスト教連合会理事長)

閉式の辞 清原恵光(比叡山延暦寺執行)



# 平和祈願文

敬い奉つて、大宇宙に遍満したまゝ神さま、仏さまに謹んで申し上げます。

一九八七年八月、この比叡山に世界の宗教代表者が集い、人類の恒久平和を共に祈る「比叡山宗教サミット平和の祈り」が行われましてから、はや十五周年を迎えました。

この間年々歳々休むことなく、宗教者はこの地に集い互いに理解の度を深めると共に、協力して平和の為に祈り、かつ微力を捧げてまいりました。

幸いに、かつては想像もしなかつたほど宗教間の壁は低くなり、宗教者はそれぞれ互いに手を取り合つて祈り合うことができるようになりました。まことに有り難い極みであり、心から感謝いたします。

しかしながら、我々が日夜希求する地球上の平和は猶ほぞ遠い現状であることに思いを致し、自らの至らざることを反省し、深く懺悔するものであります。

今日、十五周年を迎えるに当たり、人類が直面しております諸問題は深刻さを増しております。地球上での紛争は遂次限定されつつあるように見えますが、我々が予想もしなかつたテロ行為が、平和を謳歌する国家や都市に突然襲いかかるという、まさに無差別殺戮の時代に入つたように見えます。戦争の地域が、ある日世界中のどこでも起ころうことを実感せざるを得ません。

その原因が那辺にあるかと思うとき、民族があるいは過激な宗教信者が抱く怨恨にあることを否定

することはできません。仏教では四苦八苦を人生の根本苦と考えますが、中でも互いに憎しみ会う怨憎の苦しみを最も深刻に受けとめています。

怨恨が無差別に無関係の者まで殺害するとしたら、これは容易ならざる事態であります。比叡山を開かれた傳教大師最澄上人はご遺言に中で「恨みをもつて恨みに報いれば恨み止まず、徳をもつて怨みに報いれば怨み即ち止む」と申しております。

テロに対しても武力、武力に対して無差別テロの悪循環は一日も早く止めねばなりません。

我々は昨日から今日にかけて世界の宗教代表者と真剣に語り合いました。そして今ここでそれぞれが信じ奉る神さま、佛さまに自らの至らざることを懺悔し、平和のために互いに協力して努力することを神佛に誓っております。しかし我々の祷力には限りあることも自覚しております。我々宗教者が、自らの宗教の発展だけのために如何に努力しても結果的に平和が来ないことも承知しております。

私たちはあなたの本当のお心が、我々人間一人一人が平和の心を一層深く發揚して、平和のために身命を惜しまぬ人となれと教えておられることを承知しています。私たちは、あなたの心を体して今日を期して更に努力する覚悟でありますが煩惱多い衆生をお護り頂き、神佛のお力で私たちをお導き下さると共に、世界の平和に偉大なるお力を添えて下さいますよう参会者一同心から祈念致します。何卒、哀愍し、我々の心からの願いを納受下さい。

平成十四年八月四日

天台座主 渡邊 恵進

懇祷し奉る

「世界平和祈りの集い」によせて

# 「世界平和祈りの集い」によせて

アゴスティーノ・ジョバンニヨーリ教授

聖エジディオ共同体の代表として、この祈りの集いの十五周年を共にお祝いできます事は、私の大変名誉とするところです。一九八七年、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世がアッシジで祈りの集会を開催したその翌年、故山田恵諦猊下がこの平和の祈りの道を開かれ、以来毎年比叡山で祈りの集いが開催されてまいりました。同じようにヨーロッパでは、聖エジディオ共同体が主催して集会を行つております。

昨年スペインのバルセロナで行われた平和会議では、日本の宗教者の皆様にも多数ご参加頂きましたが、会議終了の数日後、九月十一日にアメリカで悲惨な同時多発テロが起つたのです。ある意味では、私達は今でも九月十一日の悲劇の時を生きているといえるでしょうし、それは暗く悲しい時間です。信仰を持つ私達はこの事件で何が起きたのか、深い問い合わせをしなければなりません。

昨年十月三日と四日に聖エジディオ共同体では、イタリアのローマでイスラム教とキリスト教の対話集会を主催しました。多くのムスリムとキリスト教徒が参加しました。例えば、カトリックのカルロ・マリア・マルティーニ枢機卿、ロジャー・エチエガレイ枢機卿、マイケル・フィッツジェラルド司教、アンドレア・リッカルディ教授、などのほか、他の宗派からはマルグレゴリオス・イブラヒム総主教、世界ルター派連盟事務総長のジョージ・フリーマン師などです。イスラム教からも指導者の皆様が参加されました。例えば、カタールからユーサフ・クワラダウイ師、世界ムスリム・コンングレス会長のアブドゥラ・オマール・ナシーフ師（サウジアラビア）、エジプトのグランド・ムフティ・ナセル・ファリド・ワセル師、イスラム文化世界連盟事務総長のモハメド・サイード・ノアマニ師（イラン）等です。

# 「世界平和祈りの集い」によせて

聖エジディオ共同体の訴えは、有り難いことに多くの宗教者の賛同を得、この一大事にあたり、話し合いがいかに大切であるかが証明されました。私たちが実感したのは、平和がいかに壊れやすいものであるか、我々市民の安全がいかに不安定なものであるか、今の世界に起きていることが、いかに予測のできない苦しみであるのか、ということでした。

この事件に直面した世界の人々が、これが悪の力の現れであるかのような印象をうけている様にも見えます。人類共通の現在と未来について多くの問題が提起されました。

この悲惨な事件は、文明と宗教の衝突であるとの声もありました。キリスト教の西洋世界とイスラム世界の衝突である、との見解、また、宗教は世界と人々の上に危険な土壌であり、暴力と悪を正当化し、助長するものである、との意見も出されました。これは宗教生活そのものに対する不信感を植え付ける姿勢です。

宗教の重要な任務がこの暴力的事件以来疑問視されています。信仰を持つ人々は、確実に、また、第一にテロリズムと、悪の勢力を断固として拒否する道徳的義務があることは言うまでもありません。テロは人々の生活や自由な表現を軽蔑するニヒリズムに陥らせ、宗教の価値をおとしめるものです。宗教の根本的価値は戦争・暴力・テロリズムを否定し、平和を求めます。信仰を持つ人々は、平和とは神の別の呼び名であると認識します。今、この時こそ、私たちは信仰と平和の特別な繋がりが、あらゆる宗教に存在することを声を大にして訴えなければなりません。

私はここで聖エジディオ共同体が一九八七年にローマで世界の宗教指導者と共に発表した宣言文の一部を引用したいと思います。

「すべての人に明言します。宗教は人々を憎しみや戦争に駆り立てるものではありません。また、宗教は罪のない人々の血を流すことを正当化しません。すべての宗教は戦争ではなく平和を求めます……宗教の名において戦争を語る事は理にかないません。私たちは主張します、宗教の言葉は平和であれ、と」。

聖エジディオ共同体は、キリスト教徒、ムスリム、ユダヤ教徒、仏教徒、神道の友人たちと一致協力して、人間の命と平和の聖なる価値を呼び覚ましたいと思います。また、今日キリスト教徒とムスリムの関係が特に問題化し

ています。両者は長年にわたり、話し合いを続けてきました。毎年多くのムスリム指導者が聖エジディオ共同体の会議にご出席下さいます。また、二〇〇一年のバルセロナ大会で、今年は九月初旬、イタリアのパレルモでも、多くの日本宗教者の皆様と共にムスリムの皆様がご参加下さる予定です。私たちが長年統けているのは対話です。対話によって新たな調和が生まれ、過去の誤解や無知を拭い去ります。九月十一日の事件後でさえも、宗教が求める平和への決意は全く揺るぎなく、変わりません。バルセロナ大会の最後に確認された宣言文では、困難な時でも平和と対話の路線は変わらずに続けることを謳っています。

現在、いかに政治的状況が逼迫しても、宗教戦争に発展することもなければ、文明間の戦争に至ることもあります。あるのは世界の悲惨な状況です。しかし、これ以上溝を深くしてはなりませんし、距離を遠ざけてもいけません。また、誤解の壁を高くしてはなりません。我々は知性と信仰をもって生き、おそらく今からは、ポスト・モダンの世界が開かれるでしょう。

文明や宗教の衝突があるかもしれないとの憶測から、偉大な宗教の遺産を壊してはなりません。信仰者の心から心へと伝えられる宗教の偉大な資産は、人々を内側から変革し、神と他の人々の前に責任を持ち、精神的価値と聖なる命を尊ぶように導きます。現在様々な問題に直面する個人個人ですが、大きな変化を前に自信を失い、将来を憂い、小さな人生を生きたいと願い、個人の利益のみを追求しようとする人間に、宗教は偉大な力を發揮します。

宗教にとって平和とは単なる戦争のない状態ではありません。宗教は人々の魂に触れる精神的価値であり、人々の命を抱き心の核心に根ざす社会的関係でもあるのです。

今日、部分的な世界で宗教が求められているのではなく、全世界が人々の信仰に注目し、疑問を投げかけ、宗教の言葉を待ち望んでいます。それは心配だけでなく問い合わせに満ちています。憎しみの文化を回避するにはどうすれば良いのでしょうか？宗教の講話、実例、証言が、異なる宗教を信じる人々にどのように役立ち、どのように平和の技術者となり、日常生活や世界に貢献できるでしょうか？

今日の世界で、様々な宗教を信じる人々は、世界中の様々な地域で、都市や田舎で共に暮らしています。彼らは出会い、共に働き、協力しています。今は、同じ宗教を信じる人々のみが單一的に存在する時代は過ぎ去りました。現在は異なる宗教の様々な人々が共に暮らしています。それゆえにこそ、共存が不可欠であり、民族、宗教、国家

## 「世界平和祈りの集い」によせて

の視点、などの異なる人々が共存の方法を学び、それを実現しなくてはならないのです。そのために深いところから働きかけ、宗教の側面はもちろんのこと、平和について学ばねばなりません。社会の變の奥深くまで達する平和、他人を尊敬する事を教える平和、憎しみの根を癒す平和、暴力の誘惑に打ち勝つ平和を学ぶのです。新しいシナリオでは、恐ろしい暴れ者を、新たなもつと大胆な責任をになう人間に変えることが求められます。

おそらく宗教は、すべての善意の人々に従つて、世界の最も貧しい虐げられた人々に纖細でなければならないでしょう。一九八七年に亡くなつた、偉大な教皇であり人間の賢い觀察者であつたパウロ六世は預言的言葉として、「貧困は暴力を育てる土壌であるかも知れない」。また、「暴力は新たな不均衡と破壊の原因を造る」と言われました。また最後に、「発展は平和の別名である」との言葉を残されました。

パウロ六世は、「平和は単に戦争がないことでは無く、常に用心深く力のバランスを見極めた結果である。平和は一日一日の積み重ねによって創られ、神の意志を追求して、さらに完璧な正義を人々の中に実現することである」と言わされました。

イスラム、キリスト教、ユダヤ教、仏教、神道、そしてすべての宗教は平和に貢献することが出来ます。これらは異なる歴史をもつた宗教、異なるメッセージを有する宗教、また、それぞれ異なる社会との関わりを持つ宗教ですが、すべての宗教にとって平和は神の名前です。多様性は誤解や紛争の原因にはなりません。むしろ、調和ある理解に役立つものです。この祈りの集いは、サミット開催の成果によつて、私達の努力のみならず、人々の願いを良い方向に導いて下さる神のご加護で、私たちの希望が大きくなる事を信じております。

D

E

T

A

資 料 編

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

# 開催までの経過

## ◎5月

### ●第1回総務部会

5月21日 大津・天台宗務序第2庁舎

(すべて2002年)

### ●第1回式典部会

5月22日 大津・比叡山延暦寺事務所

## ◎2月

### ●開催準備委員会

2月28日 京都・新都ホテル

### ●第1回会議部会

5月24日 大津・天台宗務序第2庁舎

### ●第2回事務局会議

5月28日 京都・平安神宮記念殿ホール

### ●第1回接遇部会

5月28日 京都・平安神宮記念殿ホール

## ◎3月

### ●第1回実行委員会

会議後、記者会見

3月29日 京都・新都ホテル

## ◎4月

### ●第2回実行委員会

6月17日 京都・新都ホテル

### ●第1回事務局会議

4月25日 京都・立正佼成会京都普門館

### ●第2回総務部・会議部合同部会

6月17日 京都・新都ホテル

# 比叡山宗教サミット15周年記念 「平和への祈りとイスラムとの対話集会」

◎ 7月

## ● 第3回総務部会

7月4日 大津・天台宗務庁

## ● 事務局移設

8月1日 京都・宝ヶ池プリンスホテル

## ● 記者会見(レク)

7月12日 京都・京都宗教記者クラブ

## ● 第3回接遇部会

8月2日 京都・宝ヶ池プリンスホテル

## ● 第1回比叡山メッセージ起草委員会

7月12日 大津・天台宗務庁

## ● 比叡山宗教サミット15周年記念 「平和への祈りとイスラムとの対話集会」

8月3日 京都・国立京都国際会館  
京都・宝ヶ池プリンスホテル

## ● 第2回式典部会

7月13日 大津・天台宗務庁

大津・比叡山延暦寺

## ● 第3回会議部会

7月17日 大津・天台宗務庁

## ● 第2回接遇部会

7月19日 京都・宝ヶ池プリンスホテル

## ● 第3回実行委員会

8月27日 京都・新都ホテル

## ● 第4回総務部会

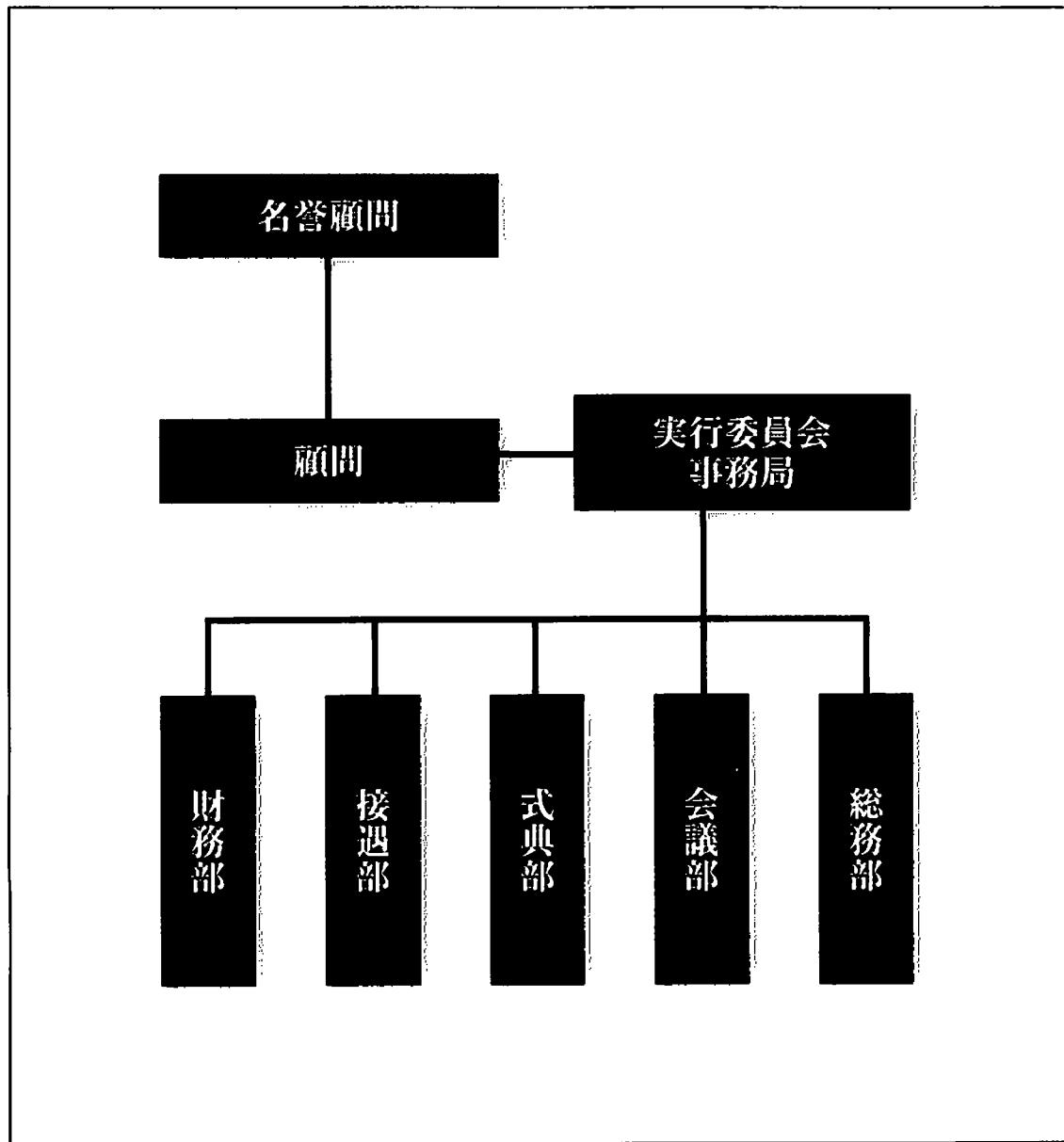
7月24日 大津・天台宗務庁

## ● 第2回比叡山メッセージ起草委員会

7月24日 大津・天台宗務庁

◎ 8月

## 事務局組織図



**比叡山宗教サミット15周年記念  
「平和への祈りとイスラムとの対話集会」**

**海外招聘者名簿**

宗 教	国 名	名 前	役 職
イスラーム	ヨルダン	ムーサ・ゼイド・ケイラニ師	国際イスラム評議会代表
	サウディアラビア	ムハンマド・サード・アッサリム博士	イマーム・ムハンマド・ビン・サウード・イスラーム大学学長
	エジプト	ムハンマド・アブドルファティール・アブドラー・アジーズ博士	アズハル大学イスラム神学部副学部長
	エジプト	アブドゥラー・マブルーク・アッナッガール博士	アズハル大学イスラム法学部教授
	パキスタン	ミル・ナワズ・カーン・マルワット師	アジア宗教者平和会議実務議長
	ボスニア・ヘルツェゴビナ	イフェト・ムスタフィッチ師	ボスニア・ヘルツェゴビナ宗教間対話協議会事務局長
	ユダヤ教	アメリカ	アルバート・フリードランダー師 元WCRP国際名誉会長
キリスト教	バチカン	サン・テック・リー師	教皇庁諸宗教対話評議会アジア担当官
	イギリス	マイケル・イブグレイブ師	英國国教会宗教間協議会顧問
諸宗教	アメリカ	ウイリアム・ベンドレイ師	世界宗教者平和会議国際委員会事務総長
	イタリア	アゴスティーノ・ジョバンニヨーリ教授	聖エジディオ共同体
	イタリア	アルベルト・クワットルツチ教授	聖エジディオ共同体

## 名 訂 願 問 名 簿

(氏名)	(役職)
渡邊 恵進	天台座主
新田 邦夫	教派神道迎合会理事長
工藤 伊豆	神社本庁總長
深田 充啓	新日本宗教団体迎合会理事長
白柳 誠一	世界宗教者平和会議日本宗教委員會理事長・日本キリスト教迎合会理事長

## 願 問 名 簿

(氏名)	(役職)
矢田部 正巳	神社本庁副總長
藤岡 重孝	神宮少宮司
加藤 知衛	服部天神宮宮司
外山 勝志	明治神宮宮司
小串 和夫	熱田神宮宮司
室田 輝	京都府神社庁庁長
九條 道弘	平安神宮宮司
出口 紅	大本教主
黒住 宗朗	黒住教教主
宮坂 寿勝	真言宗智山派管長
板堀 興宗	曹洞宗管長
中村 康隆	浄土門主
藤井 日光	日蓮宗管長
和田 有玄	高野山真言宗管長
西片 義保	臨済宗妙心寺派管長
庭野 曜誠	立正佼成会会長
中山 善司	天理教真柱
宮本 文娟	妙智齋教団会長
飯島 正三	恩親会会長
御木 貴日止	パーカーク・リバティー教団教主
新井 三知夫	救世真教会会長
金光 平輝	金光教教主
池田 穎輝	世界迎邦日本宗教委員會委員長
五百旗頭陽二郎	日本ムスリム協会名誉会長

## 実 行 委 員 会 名 簿

(氏名)	(役職)
委員長 西郊 良光	天台宗宗務總長
副委員長 加藤 隆久	神社本庁常務理事・生田神社宮司
副委員長 山野井 克典	立正佼成会理事長
事務局長 工藤 秀和	天台宗事務
実行委員 杉谷 義純	天台宗国際平和宗教協力協会顧問・世界宗教者平和会議日本委員會事務総長
	日本宗教連盟事務局長・教派神道迎合会理事
和泉 正一	神社本庁涉外部長
宮澤 佳麻	賀茂別雷神社宮司
蓮内 光樹	明治神宮権宮司
毛利 義就	石清水八幡宮宮司
田中 恒潤	京都府神社庁事務局長
中島 茂博	新日本宗教団体迎合会事務局長
齊藤 順次	新日本宗教団体迎合会事務局次長
生田 茂夫	世界宗教者平和会議日本委員會事務次長
出山 友利	世界迎邦日本宗教委員會副委員長
出口 貢人	世界迎邦日本宗教委員會事務局長
吳 茂宣	淨土宗總務局長
松本 国岳	臨済宗妙心寺派總務部長
松井 宗益	臨済宗東光寺住職
宝積 玄承	法相宗大本山崇福寺副住職
安田 瑞樹	天台宗事務
小堀 光賀	比叡山延暦寺執行
沢原 康光	比叡山延暦寺副執行
佐々木 光澄	人類愛護会事務局長
山崎 光男	大本本部広報涉外室長
松田 一	黒住教副教主
黒住 宗道	天理教教会本部總務部長
鹿尾 昭男	カトリック京都司教区司祭
花井 拓夫	

# 実行委員会名簿

武 肇 六治	日本聖公会京都教区主教
松原 達雄	立正佼成会外部長
東 順 肇	立正佼成会外務部次長(広報グループ)
宮本 けいし	妙智會教団理事長
砂口 美作	日本ムスリム協会会長
砂 増 公明	日本ムスリム協会副会長

## 宣 言 文 起 草 委 員 名 簿

	(氏 名)	(役 殿)
委員長	雲井 昭吾	天台宗勤学・天台宗総合研究センター長
	園田 桂	京都大学名誉教授・秩父神社宮司
	武 肇 英臣	日本ムスリム協会理事

## 事 務 局 名 簿

<総務部>	(氏 名)	(役 殿)
部長	佐々木 光澄	比叡山延暦寺副執行
次長	生田 茂夫	新日本宗教団体連合会事務局次長
	田山 友利	世界宗教者平和会議日本委員会事務次長
	眞崎 全康	比叡山延暦寺総務部主事
	横山 和人	天台宗総務部出版室編集長
	斎藤 良弘	天台宗総務部出版室次長
	大沢 玄仁	天台宗総務部国際課長
	東 順 肇	立正佼成会外務部次長(広報グループ)
	阿部 公俊	立正佼成会外務部次長(平和活動グループ)
	根本 曜廣	立正佼成会外務部次長(諸宗教対話グループ)

## <接遇部>

部長	中嶋 茂博	京都府神社庁事務局長
次長	丸瀬 恵一	立正佼成会京都教会会長
	鶴瀬 駿	神社本庁国際課長
	梶道樹	世界連邦日本宗教委員会事務局長
	長谷川 光宣	臨済宗妙心寺派総務課長
	村上 太郎	法相宗大本山諒院寺副執事長
	久保 齐尚	天台宗参務
	獅子王 国栄	比叡山延暦寺副執行
	眞田 康祐	比叡山延暦寺副執行
	福井 邦彦	天台宗総務部法人部課長
	岩田良太郎	天理教教会本部涉外広報課長
	ルカス・ホルステイング	カトリック・フランスコ会
	砂増 公胡	日本ムスリム協会副会長

## <式典部>

部長	宮本 けいし	妙智會教団理事長
次長	畠田 玄光	比叡山延暦寺副執行
	出口 真人	世界連邦日本宗教委員会副委員長
	奥 茂宣	世界連邦日本宗教委員会事務局長
	小切 覚輝	比叡山延暦寺副執行
	松田 一	大本本部広報部外室長
	武 肇 英臣	日本ムスリム協会理事

## <会館部>

部長	花井 拓夫	カトリック京都司教区司祭
次長	黒住 宗道	黒住教副教主
	宮瀬 佳廣	神社本庁涉外部長
	赤川 恵一	世界宗教者平和会議日本委員会総務部長
	小堀 光實	天台宗参務
	山崎 光男	人類愛護会事務局長
	浦地 洋一	日本聖公会司祭・平安女学院中学・高校長

## <財務部>

部長	工藤 秀和	天台宗参務
次長	志井 圭定	天台宗総務部課長
	大谷 正道	天台宗参務
	梅山 駿四	比叡山延暦寺副執行
	井上 光洋	天台宗総務部課長

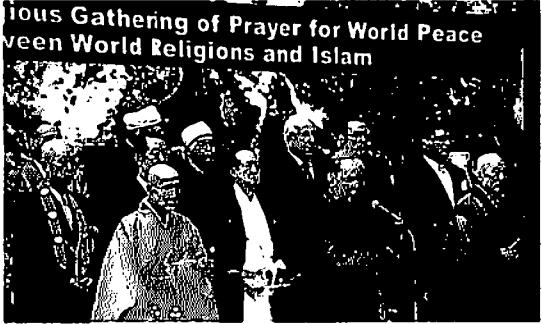
# マスコミ報道に見る

## 平和への祈りと イスラムとの対話集会

世界宗教者対話集会の意味

### 紛争続く現状、いかに語るか

眼  
単眼  
複眼



イスラムの教えは人の命を奪うことを行っていない——サウジアラビア・イスラム大学の学長イブラヒムの確認からは、人の道として当然の事を口々に説いた。10月から1300人の宗教者が参加したこの会、京都(比叡山)で開かれた「平和への祈り」と「イスラムとの対話集会」は寧ろ問題だ。開催場所にあつた「宗教こそが世界平和を実現させる重要な要因である」と

追求されるが、民衆の支持がなければ遂行できない。相手への敬意を高めていくためには、宗教者の影響力を利

用しようとする。それに抵抗するか、仲間となるか、という問題だ。

かつて首都サラエボは、2000年四方にユダヤ、カトリック、ギリシャ正教の教会やイスラムモスクがひしめきあい、長い間宗教が共存していた。それが、互いに憎悪のあまりとなつて殺し合つことになつただけに、争に他人事ではないた

る」という一筋が、冷感後の物語だ。

スニア・ヘルツェゴビナ。多数が虐殺、レイブの被害者となつたモ

スレム人の一人として参加したイスラム教徒イフエット・ムスタファさんはこう語った。

「戦争は政治的経済的利益から方をつづむ、「しかし」変わらぬ可能性がないわけではない」と懇願的な見

方をつづむ、「しかし」変わらぬ可能性がないわけではない」と懇願的な見

うのではなく、宗教者が対話にかかる、地域社会に戻つて地域の人々に働きかけ、隣人との関係をただしていくことが重要だ」と語った。

異なる宗教の指導者が共に泊り研修ということがほとんど行われていなかつた中で画期的大とされ

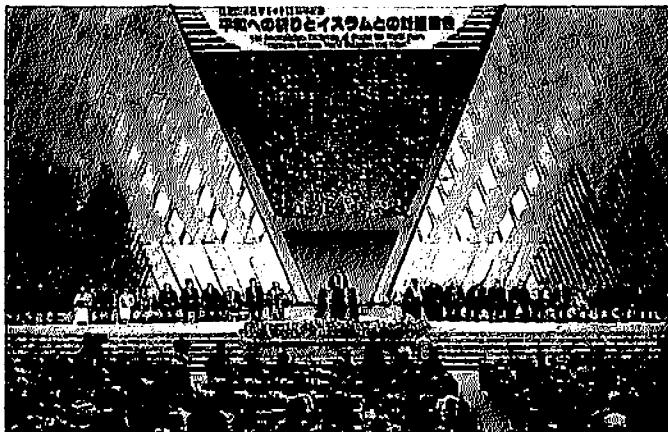
た昨年の「比叡山宗教サミット」——世界宗教者平和の祈りの集い」から15周年。それを記念したこの集会は、天台宗や新宗教団体、カトリック、それに世界宗教者和平会議(WCRP)日本委員会などが協力して開催した。

しかし、今回の集いでは、「いい放しが目立つた。イスラム教の代表者はたちは、口々にその教のすばらしさを説いたが、ではなく、

イスラム教徒に白煙テロが続出すのか、「イスラム過激派」は本

朝日新聞  
8月22日夕刊

# 平和への道探る



10カ国の宗教者が参加した「平和への祈りとイスラムとの対話集会」（京都市左京区・国立京都国際会館）

比叡山宗教サミット十五周年を記念した「平和への祈りとイスラムとの対話集会」が三日、京都市左京区の国立京都国際会館で開幕した。十カ国約千三百

人の宗教者や市民約千三百人が集い、イスラムへの理解を深めるとともに平和への道を探った。

米中核同時テロを受け、仏教や神道、キリスト教などの七団体でつくられた実行委員会が開いた。

「イスラムと平和」と題して記念講演したイマーム大（サウジアラビア）のムハンマド・アッサー・リム学長は、「イスラムは平等や人間性を重んじる」と強調し、「宗教の価値を知るために相互理解の対話を」と訴えた。

続くシンポジウムでは、アスハル大（エジプト）のムハンマド・アブドルアジーズ神学部副学部長が、イスラムがユダヤ教徒に寛容だった歴史を紹介、「イスラムの慈悲は全人類へのものでなくはない」と述べた。国際イスラム評議会のムーサ・ケイラ代表（ヨルダン）は、イスラムの名の下でのテロを非難しつつ、「イスラエル

京都新聞  
8月4日朝刊

イスラム  
理解へ集会  
宗教者集い対話

昨年9月の米国・同時多発テロなどを受け、宗教者が集い、イスラムへの理解を深めようとした「平和への祈りとイスラムとの対話集会」が3日、左京区の国立京都国際会館で始まった。4日まで。

1300人の宗教者が参

のパレスチナ占領が根本原因」と、中東紛争の解決を訴えた。

アジア宗教者平和会議のミル・ナワズ・マルワット実務議長（パキスタン）は、「宗教が平和と人類愛を誇るのに、平和の武器になっていない。テロと闘おう」と呼び掛けた。「異なる宗教に寛容な日本がイスラムと他宗教の間に橋かけを」とも求めた。四日は左京区のホテルに会場を移す。

昨年9月の米国・同時多発テロなどを受け、宗教者が集い、イスラムへの理解を深めようと、「平和への祈りとイスラムとの対話集会」が3日、左京区の国立京都国際会館で始まった。4日まで。

87年に開かれた「比叡山宗教サミット」から15周年になるのを記念、全国宗教会議、日本キリスト教連合会、神社本庁などの団体がつくる実行委員会が主催して開かれた。海外9カ国の12人を含む約300人の宗教者が参

加した。開会式典で河合隼雄・文化庁長官は、「宗教者の平和主義」と題して記念講演したサウジアラビアのイマーム大（サウジアラビア）のムハンマド・サウド・アッサー・リムさんは、「平和」それがイスラムのあいさつ。禮拝法も、「最初の礼拝」を親しげに説いた。

また、シンボジウムの中では、エジプトのアブドルアジーズ神学部長（エジプト）は、「平和への祈りとイスラムとの対話集会」が3日、左京区の国立京都国際会館で始まった。4日まで。

セーシーでは、人類が別は憎むべきことだ」と指摘。イスラム教は、生命大切にして、他宗教を尊重などと強調した。

パキスタンのアシフ・ミル・ナワズ・カーン・ミル・ナワズ・カーン・アブドル・ファティール・アブドル・アジーズさんは、「イスラムのメッ

朝日新聞  
8月4日朝刊

# 「イスラム」テーマに

## 比叡山宗教サミット開幕 教義を超える連帯

京都



各國の宗教指導者が  
教義を超えて連帯する「比叡山宗教サミット」が3日、京都市左京区の国立京都国際会館で、2日間の日程で始まった

【写真・鶴尾公治】15周年の今回のテーマは「平和への祈り」と「イスラムとの対話」で、10カ国からイスラム教、ユダヤ教、キリスト教、仏教、神道などの指導者ら12人が参加。イスラム教を理

解するための国際会議が

国内で行われるのは昨年

9月の米同時多発テロ後初めてで、約1300人

が傍聴に詰めかけた。

(25面に関連記事)

同サミットは、世界平

和実現のために宗教者同士が不対立を排し、理解を深めること

が不可欠だと訴えてきた。今回は、

テロで深まつたイスラム

教への偏見をなくすため

「イスラムとの対話」を

掲げた。

開会式で実行委員長の

西郊良光・天台宗宗務総長が「イスラムに対する

誤解を解くため今こそ

宗教者が働くねばならな

い」とあいさつ。記念講演ではサウジアラビアの

イマーム大学長、ムハン

マド・S・アッサーリム

師が、イスラム教の平和

主義への理解を訴えた。

【山崎明子、矢坂敦】

出席者の選考と招請を担

当した。今春、カイロを

訪れ、イスラム神学の最

高峰府、アズハル大学学

長に直談判して同大から

2人の学者の派遣を実

現。サウジアラビアのイ

マーム大学の学長招へい

にも成功した。

【河口美作】

「コーランには『神ア

ッラーは法を超えるもの

を愛でたまわぬ』とい

う言葉がある。イスラムは平和主義で、中庸を尊びます」と河口さんは話してくる。【田原由紀雄】



河口美作会長

### イスラム理解を

日本ムスリム協会長

国内約7000人のムスリムのリーダーで、サミット実行委員会に推され

た橋口美作・日本ムスリム協会会長(66)は、「第一

級の学者らがでイスラムを語る機会が表現した意

毎日新聞  
8月4日朝刊

# 対話で暴力の連鎖断ち切れ

## 比叡山メッセージ

京で平和集会

比叡山宗教サミット十五周年を記念した「平和への祈りとイスラムとの対話集会」は四日前、京都市左京区のホテルで

「紛争和解と宗教」をテーマにフォーラムを開いた。午後には大津市の比

叡山頂で平和への祈りと、暴力の連鎖を断ち切

るよう訴えた「比叡山メッセージ」を発表して閉幕した。

フォーラムでは、海外の五氏が紛争和解に宗教が果たす役割をめぐり白熱した議論を繰り広げた。激しい民族紛争を経たボスニア・ヘルツェゴビナのイフェト・ムスター

会事務局長（イスラム）



「比叡山メッセージ」を発表した「平和への祈りとイスラムとの対話集会」（大津市・延暦寺根本中堂前）

アルバート・フリードランダー国際名脳会長（ユダヤ教）は中東紛争につ

いて「対話せず、互いが正当性を叫ぶ間に罪なき子どもたちの血が聖なる地にしみこんでいく」と

暴力の連鎖を断ち切るよう訴え、「領土より人間が大切、との認識」と価値観の転換を呼び掛けた。紛争時に利用されやすい宗教の弱さを克服するよう求める意見も相次ぎ、宗教者約二百七十人が熱心に耳を傾けた。

午後の「平和の祈り式典」は延暦寺・根本中堂前で約六百人が参加して、これまで宗教の違いを超えて平和へともに祈りをささげた。「比叡山メッセージ」では、テロと暴力を否定し「武力に頼る

限り報復の連鎖を断ち切れない。対話と相互理解が問題解決の出発点」と平和への決意を語った。

京都新聞  
8月5日朝刊

毎日新聞  
8月5日朝刊

## 宗教を超える対話継続 比叡山宗教サミット閉幕

「イスラムとの対話」  
をテーマに世界の宗教者が  
が集まった「比叡山宗教  
サミット」は4日、比叡  
山上（大津市）の延暦寺

根本中堂前広場で「平和  
への祈り式典」を開催。

国内外を代表する宗教者  
ユダヤ教、英國教会の  
宗教学者、イスラム教、

基督教徒

が次々と登壇、平和の祈  
りを繰り返した後、「昨

年9月の米同時多発テロ

を「宗教戦争」や「文明  
間の衝突」とするのではなくと批判する比

坂山メッセージ」を発表

して閉幕した。

式典に先立ち開かれた

フォーラム「紛争和解と

一師（ユダヤ教）は「隣

人が我々同様に宗教を信  
仰していることを信じ、

痛みを分からぬいたい」

と話し、宗教を超えた対  
話を続けていくことを確  
認した。

【山崎明子、矢坂敦】

توصيات مؤتمر هيئة الأديان العالمية باليابان،

## تركيس الجهد لهم أعمق للإسلام وتعاليمه

ركد المؤتمر الخامس عشر لـ «الجهاز لبيان الدين» الذي اقامته هيئة الأديان العالمية اليابانية عدّة توصيات في ختام مؤتمر «الحوار مع الإسلام من أجل السلام» وهي عبارة عن رسالة لكل رجال الدين ودعا المؤتمر إلى ضرورة احالة الإسلام في كافة مناطق العالم اجمع خاصة فـ «القدس وأفغانستان والهند وبكستان». ركذ المؤتمر مصريّة المسلمين من أجل تحقيق الإسلام خاصة بعد احداث سينتمير في أمريكا وأوصى بمصرّة رفض الأعداء للإمامية والحنفية والوقوف على كلّيات ومسقطات ذلك العدد خاصّة أنّ الذين كانوا وراء تلك الأحداث مع الأسف الشديد مسلمو

ركد المؤتمر إلى صورة تركيس الحضارات، الأمر الذي ينهي إلى الجهد لهم أعمق للإسلام ميلاد أسباب جهينة للعنف، أو العنصرية للإسلام، والتالي عليه بعد أن تستقر في معركة قلّهم بالاسلام، الضرب من عشرائهم، فاللهم، والجهل هو من أعمق وأسنياب تركيزه بعد أن تقدّم العقوبات في معركة العنصرية التي شير إلى أن ينشأ إلى لهم الصحيح والمعادن بمحبّي الأنّ على السيد العالى كلّ الوطيد، ويعده لذلك دعا المؤتمر في تصوّراته أنّ الذين كانوا وراء تلك الأحداث مع الأسف الشديد مسلمو



M

E

S

S

A

G

E

比叡山宗教サミット15周年記念

平和への祈りとイスラムとの対話集会

## 英 文 訳

比叡山メッセージ・開催趣旨・平和メッセージ・天台座主祈願文。  
ヨハネ・パウロ二世メッセージ・ハッサン殿下メッセージ

mentality would only create mistrust of others. We therefore believe that mutual understanding and united commitment is the way to stop repeating the same tragedies.

Since the September 11th tragedy, we realize that unfairness, misunderstanding, indifference, poverty and oppression drive human beings into desperation and nihilism which also proliferate hatred and hinders the well being of humanity.

At this meeting we also shared the renewed grief and anger to the fact that terrorism and war have been killing innumerable precious lives. We must not give up hope to resolve this situation. We must ceaselessly appeal to the world that whatever your grand cause may be, violence would not be the answer to this vicious cycle of hatred and retaliation. There would be no positive future for the humankind, if armed conflicts are repeated continuously in the name of religion. Love, compassion, justice, impartiality which are the humans' potential gift must overcome intolerance and distrust. We must realize in our hearts that religion is not the cause of wars, but that the fault lies within the human nature.

We believe in reconfirming the promotion of interreligious dialogue, mutual

understanding and respect among all religions, as we have continued during this summit as basis of alleviating the problems. We have gathered on Mount Hiei to dedicate our concerted effort and prayers and have taken an oath to walk in the path for peace. With conviction we appeal to all that there be no "alleged" enemy and with no exception should be pointed out among our fellow brothers and sisters of the world. We ask the guidance of God and Buddha that we should continue to work and pray together, to have meaningful dialogue and to raise our spiritual potentiality towards the goal that all beings on earth can coexist peacefully.

August 4, 2002

Participants of the 15th Anniversary of the Religious Summit Meeting on Mount Hiei, the Interreligious Gathering of Prayer for World Peace: Dialogue between World Religions and Islam

# A Message from Mt.Hiei

On the 15th Anniversary of the Interreligious Peace Summit which was held on August 3rd and 4th, 2002 we who have gathered here on Mount Hiei wish to convey our sincere message of peace not only to the religious leaders who are making their tireless efforts for world peace, but to all the people who aspire peace.

In 1987 the first Religious Summit Meeting was held at Mount Hiei. At that time many people remarked that it was a miraculous event to have the prayer for peace gathering by believers of different religious traditions, sharing together the common goal for peace and transcending beyond cultural and religious differences.

In 1997 when we observed the 10th Anniversary of the Interreligious Summit, we reaffirmed the seed of peace, planted first in Assisi, which has sprouted throughout the world and that the small wish for peace has sprouted and has multiplied and developed into the hope for global peace.

Presently, the believers of peace are deeply concerned about the uncertain world situations that have involved ethnic disputes, such as conflicts in Afghanistan, India, Pakistan and many parts of the world. They tried their best, whatever small their contribution is, to alleviate the problems. Under these circumstances, the incident of September 11th, 2001 terrified the world. Having confronted the disas-

trous reality, we who have continued peace-making efforts through the prayers and dialogue felt shattered. Nevertheless, we firmly proclaim that terrorism and violence would by no means be condoned. Similarly we must carefully investigate on what exist behind the violence, and continually search for peace.

The tragic events of September 11, 2001 in America was believed to have been caused by Muslim terrorists and gave the world the wrong impression towards Islam. In this respect we strongly raise our voices to say that Islam is also for peace.

It is for this reason that the theme for this year's summit was "the Interreligious Gathering of Prayer for World Peace: Dialogue between World Religions and Islam." Religious leaders of the Islam faith were invited so that we could have a meaningful dialogue with them.

At this meeting we have agreed that we strictly oppose to the shortsighted impeachment and political propaganda of the September 11, 2001 tragic event as being "a clash of civilizations or a religious war."

To deal with the fear of the "unknown enemy" or to camouflage the feeling of uncertainty, we sometimes ignorantly create the unknown enemy on illogical basis. We must be aware that such

Immediately after September 11th the world religious representatives gathered in New York. Muslims, Christians, Judaists, Buddhists, and many others dedicated a united prayer for those who were killed by the tragedy the terrorism. They also had a conference to reconstruct the spirit of peace, shattered by the incident. This positive action taken by the religious leaders, we believe, must have been one of the results of the dialogue that we have been gradually developing during the past fifteen at Mount Hiei. For this reason, we are certain that the dialogue is a light of hope toward a lasting peace on earth.

We therefore decided that we would hold "the Interreligious Gathering of Prayer for World Peace: a Dialogue between World Religions and Islam" on the 15th Anniversary of the Religious Summit Meeting on Mt. Hiei on August 3rd and 4th 2002. We trust that the meeting will be a timely occasion to discuss the agenda of how we can overcome today's troubled world situation after the September 11th.

To this meeting, we have invited representatives from the world religions, particularly from the Islamic countries. Through united prayer and dialogue, we hope to clarify the ignorance and misunderstanding which are the basic cause of the world climate of prejudice and hatred against Muslims. At the same time, the occasion would be an opportunity for all of us to reflect deeply on our ignorance; it would be a new beginning to promote a deeper friendship, to establish a world of co-existence, by living and working together, and by loving and sharing with each other.

In "the Message from Mt. Hiei," released at the first Religious Summit Meeting on Mt. Hiei in August 1987, we claimed, "...We recognize and affirm that the search for peace is a fundamental aspect of every religion." But recognition, however, seems to be disturbed now. We therefore must seriously reflect upon the insufficiency of our prayers and have dialogue with the suffering people who are the victims of prejudice and misunderstanding. We reject the armed forces as a means of solving disputes. Rather, our fundamental ground is a step-by-step dialogue and united prayers to change the history of disputes which has lasted for centuries.

At the Fifteenth Anniversary of the Religious Summit Meeting on Mt. Hiei, we will consolidate our invocation for peace and proclaim the dialogue for tolerance and compassion, to those who are preoccupied with a distrustful and intolerant mentality. We will also listen carefully to the voices of the participating world religious representatives to make further efforts toward the realization of world peace.

We will dedicate our sincere prayer, so that Lord above may grant us everlasting peace.

Executive Committee of the  
Interreligious Gathering of Prayer for  
World Peace:  
Dialogue between World Religions and  
Islam

# Prospectus

In 1986, people of various Japanese religions united their efforts to start an interfaith organization called, "Japan Conference of Religious Representatives". On August 4th, 1987, the endeavor was realized for the first time with a meeting of world religious leaders on Mt. Hiei. On that day people of various world religions prayed together and made a statement that religious people must make "a preferential option for the poor."

Thereafter, the Japanese religious people have kept their commitment to dialogue towards peace. Their strengthened unity flowered as the tenth Interreligious Gathering of Prayer for World Peace was held on August 1997.

The fervent prayer dedicated by the world religious leaders on Mt. Hiei has spread out to various parts of the world, and the message of peace and equality brought by the people of various religions began to touch the hearts of the suffering people. One of the results of such a new religious trend was the Millennium Peace Summit of the World Spiritual Leaders convened at the United Nations hall. The spiritual leaders gathered there appealed that religion, if not politics and economics, could be a vital force to realize a peaceful world.

In the past, however, we have seen many cases in which religion, which is primarily a tool of peace and happiness, was used by politics as a tool for the aggravation of conflicts. It is for this reason that we of the Japanese religions have kept our voices heard to claim the vital importance of dialogue among the religions of different traditions to promote understanding and

tolerance.

On the other hand, soon after the end of the cold-war political structure, discrimination and suppression of the rights of ethnic minorities became major problems in many countries. Now, people have come to suffer from multiple problems, such as the explosion of ethnic conflicts, engulfed differences between the rich and the poor both as individuals and as nations, and many others.

In particular, the religious conflicts in the Middle East and South Asia are becoming critical. They try to solve the dispute by claiming legitimacy without a thought of any other means to solve the problem. This negative force to destroy those who are different in religion and ethnicity leads to the tragedy of the September 11th. The unprecedented terrorist attack in the United States on that day last year froze the world with fear. The heavy message thrust before us was a massacre in the name of "the sacred war," and a war under the flag of "justice." Countless numbers of people's blood were shed and the tears of those who lost their loved ones seemed never to dry. Although some say that the causes are clash between cultures and religions, we must face the fact that as an undercurrent of this tragedy, there is misunderstanding and intolerance in people's minds, not to speak of poverty caused by the existing economic and political systems.

Since ancient times, our beliefs in our lord lead us to live the truthful way, and give us energy to live with joy. We must know therefore that any killing in the name of our beliefs is absolutely wrong.

the sign of a clash of civilizations and of religions. A clash between the Christian-Western world and Islam and it has also been said that religion is a soil where dangerous outlooks on people and the world, which can justify violence and evil, develop. This has given rise to attitudes of distrust towards religious life itself.

The main task of people of religion is to be questioned by the outbreak of violence. Certainly and first of all, there is the moral duty to give a resolute denial to terrorism and to the dark forces, which despise human life, expressions, almost, of the nihilism according to which every man, religion, value can be exploited. It is rooted in the value of the religions which do not want war, violence and terrorism, but peace. They consider that peace is God's precious name. This is a time for reaffirming and for highlighting again that a special link between faith and peace exists in all the religions.

I would just mention the text of the appeal signed in 1987 by the leaders of the different world religions which the Community of Sant' Egidio in Rome brought together.

"We want to remind everybody that religions do not drive people to hatred and war, do not justify the shedding of innocent blood. Religions do not want war, but peace . . . We feel it is absurd to speak of war in the name of religion and we firmly say: may the word of religion be peace!"

The Community of Sant' Egidio felt the need to call its Christian, Muslim, Jewish, Buddhist, Shinto friends to reflect together on the sacred value of peace and

of human life. There is today a special problem of relations between Christian and Muslim. They have been speaking to each other for years. Every year, many Muslim leaders used to join the prayer meeting of the Community of Sant' Egidio: in 2001 in Barcelona and this year in Palermo, Italy, at the beginning of September, where we also hope to welcome many Japanese religionists. Ours is a story of much dialogue, which have found a new harmony, wiping out the ignorance or the misunderstanding of the past. Even after September 11, we want to say to each other that nothing had changed in the commitment of religions to the search for peace. Rather, the appeal signed at the end of the Barcelona meeting leads us to immediately continue a line of peace and dialogue in these hard times.

However political events now develop, there is neither a war of religion nor a war of civilizations. It is just a terrible time for the world: but ditches must not be made deeper, distances must not be increased, walls of misunderstanding must not be raised. We must live with intelligence and faith, this time that is, perhaps, the door on to the post-modern world.

The great religious resources cannot be ruined by the possibility of a war of civilizations or of religions. The great resources, that religions transfer to the heart of their believers, aim at transforming people from inside, at making them responsible before God and other people, leading them to appreciate spiritual values and the sacred sense of life. Great is the task of religions which face contemporary men and women, often lost and uncertain in front of great changes, worried about the future,

# **Peace message from Community of Sant' Egidio**

**Presented by Prof. Agostino Giovagnoli**

It's a great honor for us, representatives of the Community of Sant' Egidio, to share this prayer meeting in the fifteenth anniversary of the first Mt. Hiei's meeting. In 1987, just one year after the Prayer meeting of Assisi organized by the Pope John Paul II, Most Ven. Eta Yamada started a path of prayer and peace and Tendai school continued on this path, organizing every year a prayer meeting on Mt. Hiei as the Community of Sant' Egidio did in Europe.

One year ago, in Barcelona, Spain, many Japanese religionists shared the prayer meeting of the Community of Sant' Egidio, but just after few days, on September 11th, there was the terrible terrorist attack in United States. In a sense, still now we are living in a tragic time which began with the terrible events of 11 September and is a time of darkness and sorrow. As people of religion we are deeply questioned by what happened.

On October 3rd and 4th, The Community of Sant' Egidio organized in Rome, Italy, a Muslim-Christian Summit. Many Muslim and Christian people came, as the catholic card. Carlo Maria Martini and card. Roger Etchegaray, mgr. Michael

Fitzgerald and prof. Andrea Riccardi, other Christian leaders as Mar Gregorios Iohanna Ibrahim, Ishmael Noko, Secretary General of the World Lutheran Federation, George Freeman, Secretary General of the World Methodist Council, USA. There were many important Muslim leaders as Yusuf Qaradawi from Qatar, Abdullah Omar Nasseeef, President of the World Muslim Congress, Saudi Arabia, Nasser Farid Wasel, Grand Mufti of Egypt, Mohammed Said Noamani, Secretary General of the World League of Islamic Culture, Iran, too.

The Community of Sant' Egidio's appeal was welcomed by many religious people, with great generosity, that revealed the need to speak to one another at this grave time. We have all realized how fragile peace is, how uncertain is our citizens' security, how the contemporary world is experiencing a painful unknown. It was as if a sort of astonishment seized the public opinion faced with events that reveal the power of evil. Many questions have been raised about our present and on the common future.

Some voices have been raised which interpret those terrible moments as

tempted to live a little life and to look for their own well-being.

For religions peace is not just the absence of war, but a spiritual value that touches the soul of people, their social relations and that is rooted in the heart and embraces the life of peoples.

Today, not only circumscribed worlds address themselves to religions, but it is the whole world that looks at people of religious faith, that questions them, that is waiting for a word. It is a moment full, not only of worries, but also of questions: what can we do more to avoid the culture of hatred? How can religious preaching, example, testimony help believers of the different religions to be artisans of peace on the ways of the world and in their daily life?

Today, in our contemporary world, believers of all religions live together in every part of the world, in many cities and countries: they meet, work together, cooperate. The world where people lived just with those who believed in their same faith has ended. Today many different people live together. It is important, then, to learn to coexist and to insist on the commitment of religions to realize the art of coexistence among people who are different from an ethnic, religious, national point of view. It is necessary to work deeply - also on the part of religions - for peace, a peace that goes down into the folds of society, that teaches respect for the other, that heals the roots of hatred, that heals from the temptations of violence. New scenarios, terrible menaces call for new and more daring responsibilities.

Maybe religions, in accordance

with all people of goodwill, must promote greater sensitivity towards the outcasts of the world. A great pope, a wise observer of human events, Paul VI, who died in 1978, spoke prophetically when he observed that poverty may be a good soil for violence: but - he also observed - violence "introduces new imbalances and causes new ruinations". He concluded by saying that "development is the new name of peace". "Peace - he said - is not just the absence of war, fruit of the always precarious balance of forces. It is built day after day, in pursuing an order wanted by God, that implies more perfect justice among people".

Islam, Christianity, Judaism, Buddhism, Shinto and all religions can contribute to peace. They are different religions, with different histories, with a different message, with a different relation between religion and society, but for all of them the name of God is peace. Diversity can neither be an occasion for misunderstanding nor for conflict. Rather for harmonious understanding. This prayer meeting, after our efforts during the summit, increases our hopes: we trust not only in our efforts but also in the help of God who can turn to good the plans of people.

# Invocation

I humbly pray to God and Buddha in Heaven.

It has been 15 years since the first Religious Summit Meeting was held on Mount Hiei. During the past years people of many different faiths have worked very hard in deep prayer for better understanding and mutual cooperation so that we can live peacefully throughout the world although sometimes with little influence.

In spite of our efforts, however, we must face reality that ever lasting peace on earth is still far from our reach. In this respect we must repent from the bottom of our hearts for our insufficiencies.

It appeared at the ending of the last century that conflicts among nations had dwindled, but today at the beginning of the 21st Century humankind confronts many grave issues. The new century began with unprecedented terrorist attacks killing many innocent people. Many fear that in this new century terrorist attacks could occur anytime and anywhere.

When I reflect on the basic cause of the tragic situation, I see anger and resentment that erupt from the hearts of the extremists. Buddhism teaches that human suffers from four Noble Truths and eight basic sufferings. Among those sufferings, hatred of others is one of the worst sufferings. As a Buddhist, I can imagine how serious and complex is the hatred harbored by the extremists causing indiscriminate massacre.

Saicho Dengyodaishi, founder of Tendai denomination at Mount Hiei, left the following words at his deathbed, "If you retaliate against hatred with hatred, your adversary will harbor new hatred against you. Forgive the offences of your adversary: and if you meet your adversary with a heart of tolerance and good intentions, his hatred will fade away." In response to Saicho's teachings, I would like to say that we must immediately stop the vicious cycle of terrorism, and also armed attacks on terrorists.

On August 3rd and 4th peoples of many different traditions gathered in Kyoto on Mount Hiei and took a solemn oath that we would continue our efforts to walk in the path of peace. But we must honestly admit that our efforts are limited.

We therefore, humbly ask God and Buddha of our own faith that you will guide us to work towards a more peaceful world. Guide us so that we can persevere all hardships and that we will gain inner peace and love for all.

Gassho,

Most Venerable Eshin Watanabe  
Tendai Zasu, the Supreme Priest of the  
Tendai Buddhist Denomination  
Mount Hiei  
August 4, 2002s

# **Francis Cardinal Arinze**

## **President, Pontifical Council for Interreligious Dialogue**

Most Venerable Watanabe,

His Holiness Pope John Paul II sends his warmest greetings to you and to all those who are participating in the Fifteenth Anniversary of the first World Peace Summit at Mount Hiei. His Holiness recalls with esteem and gratitude your distinguished predecessor as Supreme Priest of the Tendai Buddhist Denomination, Venerable Eta Yamada. Not only did Venerable Yamada attend the World Day of Prayer for Peace which his Holiness Pope John Paul II convoked in Assisi in October, 1986, but he was also present at other meetings which carried forward the "Spirit of Assisi". In this same spirit he was the force behind the first World Peace Summit at Mount Hiei which is being commemorated on this auspicious occasion.

This year the decision has most appropriately been taken to focus the attention of the summit on dialogue with Muslims. Following the tragic events of 11 September 2001, there has been great unrest in the world. There is indeed a great deal of suspicion and misunderstanding which can only be dissipated if people meet and listen to one another. Here the leaders of all religions have a particular responsibility. This listening spirit is strengthened by prayer which opens the human heart to

God and in this way to the needs of God's creatures, particularly fellow human beings. Prayer is also a source of a courage for strengthening the two pillars upon which, according to His Holiness Pope John Paul II, peace rests, namely justice and forgiveness.

You can be assured that His Holiness will be with you in spirit on these days of the Summit and that his prayers accompany you.

May Peace be with you and with all the participants.

# **His Royal Highness Prince El Hassan bin Talal**

## **Hashemite Kingdom of Jordan**

Although most regrettably I could not be here with you today to participate in this important and topical religious summit on Dialogue Between World Religions and Islam, please allow me to convey the following message in a spirit of fraternal solidarity with our gracious Buddhist hosts, our Shinto and Confucian friends, and with adherents of all faiths worldwide committed to fostering harmony, respect, tolerance and compassion among diverse peoples wherever they may be.

This great country, Japan, with its rich heritage and numerous contributions to global civilisation, is no stranger to religious pluralism and tolerance, with the principles for religious freedom having been laid down over a century ago, in 1890, by the Meiji Constitution - principles that witnessed a great reinvigoration following World War II with the enactment of the Shukyo Hojin Ho (the Religious Corporation Law) in 1951, guaranteeing religious freedom and protection for all.

Indeed, Japan was seen as the obvious venue for the [May 23-25] 1998 conference of the International Coalition for Religious Freedom, entitled "Religious Freedom and the New Millennium". I drew great inspiration reading the words of

Michio Ochi (House Representative, Tokyo Sixth District) in his welcoming address. He noted that "there is a disease that is more terrible than AIDS. That is loneliness and lack of relationships... When we break the basic bonds of human relationship, that leads to violence. In Kanji, the Japanese written characters, the human being is represented by two sticks, which are holding together; thus demonstrating that relationship which brings social security and brightness to the human heart."

Your Eminence;  
Ladies and Gentlemen:

Since the diabolical attacks on the United States on September 11th last year, the world has been grappling to formulate an understanding of Islam. Some attempts have and continue to be carried out in an earnest, enlightened manner that separates Islam, as doctrine, from the brutal tendencies of those who commit such crimes in the name of their faith, while other attempts have sadly constructed a sense of inherent inextricability between Islam and the actions of terrorists who happen to be Muslim. The title of this summit, A Dialogue Between World Religions and Islam, is therefore most relevant and timely.

We must remind ourselves of the powerful version of the Qur'anic view of solidarity among the faiths. Solidarity, of course, cannot presume the adherence of the followers of one faith to the prescriptions and ordinances of another. On this point, the Qur'an is clear: "There shall be no compulsion in religion" (2:256) and "You have your own religion, and I have mine." (109:6) Solidarity among the faiths means that competing human communities strive for the good, strive to understand and reach out to one another in pursuit of a common human ethic and vision. The noble faith of Buddhism reinforces this spirit of reverence and solidarity with the other: "As a mother with her own life guards the life of her own child, let all-embracing thoughts for all that lives be thine." (Khuddaka Patha, Metta Sutta).

Common values and joint objectives underpin our friendship. Jordan and Japan share the belief that peace-building, economic reform and democratisation are the best ways to deal with the politics of extremism. We both work for peaceful conflict prevention and resolution, for the advancement of economic and social development and for the promotion of human and humanitarian rights and democracy. In addressing both the concepts of "man against man" and the humanitarian question of man against nature, almost two decades ago, the Independent Commission for Humanitarian Issues, in which I partic-

ipated with Madame Sadako Ogata, proposed a new humanitarian order. I laud her role and the role of the Japanese peacemakers and peacebuilders who testify to this global objective.

Please allow me to conclude with the words I have long treasured of the great Muslim scholar ibn Al-Arabi (b. 1165 in Muslim Spain and d. 1240 in Damascus), known as Al-Shaykh Al-Akbar (the Greatest Master):

"My heart is open to all the winds:  
It is a pasture for gazelles  
And a home for Christian monks,  
A temple for idols,  
The Black Stone of the Mecca pilgrim,  
The table of the Torah,  
And the book of the Koran.  
Mine is the religion of love.  
Wherever God's caravans turn,  
The religion of love  
Shall be my religion  
And my faith."

D

E

T

A

# あとがき

比叡山宗教サミット15周年記念  
平和への祈りとイスラムとの対話集会

# サミットを振り返つて

実行委員会副委員長 加藤 隆久

(神社本庁常務理事・生田神社宮司)

今般、比叡山宗教サミット十五周年記念「平和への祈りとイスラムとの対話集会」を開催致しました処、国内外より数多くの宗教関係者に御参加戴き、主催者の一人として厚く御礼申し上げます。

今回のサミットは、昨年の九月の米国に於ける同時多発テロ事件以降、世に蔓延したイスラムに対する誤解や偏見を払拭するとともに、世界平和に向けての決意を再確認するべく開催されたものです。

記念講演やシンポジウムを通じて、イスラム教が平和を願う宗教であり、あのテロ事件が決してイスラムによる聖戦などと称されるものではないことが御理解戴けたものと存じます。

また、神道や仏教などをはじめ多様な宗教が共存し、寛容な国民性でも知られる日本こそ、イスラムと他宗教との橋渡し役を担えるとする期待がイスラムの代表者から寄せられましたことは、私どもが深く心に銘記するところです。

残念ながら、今日に於いても宗教や民族の違いに起因する対立や紛争が後を絶たず、世界平和の実現には依然厳しいものがあります。しかしながら、私ども宗教者は、真摯な祈りと対話を重ねることこそが世界平和への最善の道であることを確信し、着実にその歩みを進めて行かなければならぬと存じます。

そのためにも、宗教者一人一人がそれぞれの立場から人々に寛容の精神を説き、人類普遍のものにまで高めるよう努力されることを願つて止みません。

最後に、このサミットの運営に際し、献身的に御奉仕戴いた天台宗御当局をはじめ各宗教宗派の関係者に対し、深甚なる謝意を表して、結びと致します。

# 「重み増す宗教者の対話」

実行委員会副委員長 山野井 克典

(立正佼成会理事長)

比叡山宗教サミットを終え、帰りの新幹線の座席に就くと、同行の一人が「今日はあり難かったです。お祈りの間、神仏が雨の降るのを待つていてくれましたね」と感激の様子。それに呼応し「そして、今回のサミットは、時宜を得た素晴らしい大会でした」と会話がはずんだのでした。正しく時宜を得た大会でありました。

特に、昨年のあの同時多発テロが、全世界に与えた衝撃があまりにも大きかつただけに、世界平和実現への希求も大きかつたのです。

今回のサミットのテーマは「平和への祈りとイスラムとの対話集会」でした。イスラム関係の方々は、このサミットへの参加を快諾されたと同いましたが、イスラムに対する偏見や誤解を払拭したいという願いがあつたのだと思いました。一方、日本の宗教関係者にとつてもこの比叡山宗教サミットを通して、イスラムを正しく理解したいという願いがあつたのだと思います。それらがタイミング良く祈りと対話集会として実現したものだと思います。

紛争や対立は、依然として跡を絶ちません。本年も悲惨な事件が相次いで勃発しました。このような事件を見ますと、平和の実現は難題中の難題と言わざるを得ません。しかし、どんな高い山でもまず一步から歩み始めなければなりません。国連を中心とする平和外交と同時に、各界の協力が望まれる問題であります。特に宗教者による対話促進は、ますます重要度を増してきましたのではないでしょうか。

かつて、比叡山で多くの宗祖が学びました。その意味で、「比叡山宗教サミット」が継続して開催されてきたことは非常に大きな意味があると思いました。今回も、会議の先頭に立たれた渡邊恵進お座主猊下はじめ、天台宗、比叡山の関係の方々のご尽力に感謝申し上げます。

そして、パキスタンから来日されたマルワット師の、日本の宗教者に対する、世界宗教者への橋渡しの期待に応えられるよう、微力を尽くしてまいりたいと思います。

比叡山宗教サミット15周年

## 平和への祈りとイスラムとの対話集会

発行日＝平成14年12月25日

発行＝天台宗務厅

発行人＝比叡山宗教サミット15周年

「平和への祈りとイスラムとの対話集会」実行委員会

〒520-0113

滋賀県大津市坂本4-6-2 天台宗務厅内

TEL (077) 579-0022

FAX (077) 579-2516

制作・編集＝天台宗務厅総務部国際課・出版室

印 刷＝ヨンダ印刷株式会社

**比叡山宗教サミット15周年記念  
「平和への祈りとイスラムとの対話集会」実行委員会**

**Executive Committee of the Interreligious Gathering of World Peace:  
Dialogue between World Religions and Islam**

〒520-0113 大津市坂本4丁目6番地2号 天台宗務院内  
TEL(077)579-0022 FAX(077)579-2516

4-6-2 Sakamoto,Otsu-city, Shiga-pref, Japan 520-0113